



# 帝政末期トリエステ国立ギムナジウムにおける多言語教育

根本, 峻瑠

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2018-03-25

(Date of Publication)

2019-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7065号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007065>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 博士論文

平成 29 年 12 月 7 日

帝政末期トリエステ国立ギムナジウムにおける多言語教育

神戸大学大学院人文学研究科  
博士課程後期課程 社会動態専攻

根本峻瑠

# 目次

序論	2
第一章 帝政末期トリエステの言語状況 .....	18
第一節 多言語社会としての帝政末期トリエステ .....	18
第二節 媒介言語としてのトリエステ方言 .....	27
第二章 トリエステ国立ギムナジウムの基本的性格と生徒 .....	32
第一節 言語面から見るトリエステ国立ギムナジウムの全体的特徴 .....	32
第二節 生徒の背景：母語・宗派・出身地・出身家庭・進路 .....	41
第三節 生徒とクラス編制 .....	56
第三章 トリエステ国立ギムナジウムの言語教育体系 .....	67
第一節 1910/1911 年度の言語教育 .....	67
第二節 リュブリャーナ第二国立ギムナジウムのスロヴェニア語教育との比較 .....	75
第三節 トリエステ市立上級ギムナジウムのイタリア語教育との比較 .....	81
第四節 成績と生徒の背景 .....	85
第四章 トリエステ国立ギムナジウムにおける言語科目選択 .....	89
第一節 言語科目履修状況と入学から卒業までの言語科目選択 .....	89
第二節 言語科目選択の背景 .....	95
結論	104
参考文献・史料 .....	113

## 序論<sup>1</sup>

本研究では、アウスグライヒ体制下ハプスブルク君主国統治時代のトリエステに設置されていたドイツ語を主要教授語とする中等教育機関であるトリエステ国立ギムナジウム k. k. Staatsgymnasium in Triest における言語教育と、そこに通った生徒たちの背景を考察する。これにより当時のトリエステの言語状況を捉え直し、ハプスブルク君主国における言語の共存とネーションの共存のあり方を考えるのが本稿の主眼である。

近年のハプスブルク君主国史研究は、ハプスブルク君主国を諸ネーションが相互に敵対する旧弊的・抑圧的な場と見なすのではなく、ロビン・オーキー<sup>2</sup>やピーター・ジヤドソン Pieter Judson<sup>3</sup>のように、君主国内に見られた多様性と諸言語・ネーションの共存の可能性に向けた取り組みを再評価する流れにある。20世紀初頭において、この国では主だったものだけでも11の言語が話され、文化ではゲルマン、ラテン、スラヴ、ユダヤ、宗教でもカトリック、正教、ユダヤ、イスラームと、その多様性は研究者の関心の的となってきた。このように多言語・多民族世界であったアウスグライヒ体制下ハプスブルク君主国を、大津留厚はネーション間の均衡を作り出すための様々な方策が試みられた「実験」の場として評価した<sup>4</sup>。

数ある論点の中でも、言語と教育の問題はハプスブルク君主国におけるネーションの均衡を論じる上で重要なテーマである。なぜならハプスブルク君主国は常に多民族・多言語状況にあり、とりわけ19世紀以降は、民族と言語の平等を定めた1867年の国家基本法第19条や、チェコの国政機関の窓口で住民と対応する言語<sup>5</sup>としてドイツ語とチェコ語を平等に扱うよう規定した1880年のターフェ言語令のように、ネーション間・言語間に均衡を作り出すことに腐心してこざるを得なかったからである。特に1867年の国家基本法第19条は、ハプスブルク君主国における言語権、もう少し詳しく述べれば民族と言語の平等、公的な場に

---

<sup>1</sup> 以下本稿には、根本峻瑠「20世紀初頭トリエステにおける言語的多元性と国立ギムナジウム」『神戸大学史学年報』第31号、2016、1-26頁で論じた内容が含まれる。

<sup>2</sup> ロビン・オーキー『ハプスブルク君主国 1765-1918』山之内克子、秋山晋吾（監訳）NTT出版、2010。

<sup>3</sup> Pieter Judson, *The Habsburg Empire*. Cambridge: Belknap, 2016.

<sup>4</sup> 大津留厚『ハプスブルクの実験』春風社、2007。

<sup>5</sup> 「外務語」とも呼称される。1897年にはチェコの国政機関において機関内の業務で使用する内務語でもドイツ語とチェコ語を平等に扱うこと、対象地域の官吏が1901年までに双方の言語を修得することを義務付けた規定したバデー二言語令が出されるが、ドイツ系住民・議員からの強い反発を招き、結局は撤回されている。

における州言語 Landessprache の平等な権利、そして第二言語習得の非強制を、少なくとも理論上は保障していた。これはネーションの均衡という問題が、ハプスブルク君主国にとって「言語問題」と「教育問題」として立ち現れていたことを如実に表すものとして重要である。

第 19 条第 1 項 国家の全民族は平等であり、各々の民族は自らの民族性と言語を保持し育成するための不可侵の権利を有する。(Alle Volksstämme des Staates sind gleichberechtigt, und jeder Volksstamm hat ein unverletzliches Recht auf Wahrung und Pflege seiner Nationalität und Sprache.)

同第 2 項 全ての州言語が学校、官庁並びに公共の場で用いられる際に平等の権利を有することは国家によって承認される。(Die Gleichberechtigung aller landesüblichen Sprachen in Schule, Amt und öffentlichem Leben wird vom Staate anerkannt.)

同第 3 項 複数の民族が居住する諸州に於いては、公的教育機関は第二言語の習得を強制されることが無く自らの言語で教育を受けられる手段を有することが出来るようにあらねばならない。(In den Ländern, in welchen mehrere Volksstämme wohnen, sollen die öffentlichen Unterrichtsanstalten derart eingerichtet sein, daß ohne Anwendung eines Zwanges zur Erlernung einer zweiten Landessprache jeder dieser Volksstämme die erforderlichen Mittel zur Ausbildung in seiner Sprache erhält.)<sup>6</sup>

この国家基本法がハプスブルク君主国の言語政策に及ぼした影響は、小学校制度に端的に見ることができる。国家基本法と 1869 年制定の全国小学校法（1 時間以内の通学区間に居

---

<sup>6</sup> 1867 年 12 月 21 日「国民の一般的権利に関する国家基本法」Staatsgrundgesetz vom 21. December 1867, über die allgemeinen Rechte der Staatsbürger für die im Reichsrathe vertretenen Königreiche und Länder. (RGBl. Nr. 142/1867)。原文は Hoke, Rudolf; Reiter, Ilse. *Quellensammlung zur österreichischen und deutschen Rechtsgeschichte. Vornehmlich für den Studiengebrauch.* Wien: Böhlau, 1998, S. 441 から。

住する児童が5年平均で40人以上いる場合には1つの小学校を設置することを定める)を根拠に、事実上の公用語であったドイツ語だけでなく、チェコ語、ポーランド語他の言語を教授語とする小学校が各地に設立されていった。ドイツ語以外を教授語とする小学校は1870/1871年度時点で既に半数を超え、その後も増加の一途を辿った<sup>7</sup>。1912/1913年度の全23409校の教授語の内訳を見ると、ドイツ語8569校、チェコ語5947校、ポーランド語3486校、ルテニア語2761校、スロヴェニア語876校、セルビア・クロアチア語611校、イタリア語703校、ルーマニア語190校、マジャール語4校、2言語<sup>8</sup>262校となっており<sup>9</sup>、この数値は各言語の話者数比と概ね合致するものであった。大津留が留保をつけながらも評価したように、限界があったとはいっても初等教育に関してはネーションと言語のある程度の均衡・共存が実現されていたといっただろう<sup>10</sup>。

一方、義務教育でなかった中等教育については事情が異なっている。国家基本法、全国小学校法で保障された初等教育機関とは異なり、中等教育機関についてはドイツ語以外の言語を主要教授語とする学校が各地に順調に設立される状況にはならなかった。例えばベルトルド・ズッターBerthold Sutterが論じたツェリエ(ドイツ語話者69.21%、スロヴェニア語話者30.34%<sup>11</sup>)のスロヴェニア系国立ギムナジウム設立問題のように、何語を教授語とするギムナジウムを設立するかという問題は、住民の対立の原因となることがあった。ズッターはターフェ Taafe 内閣が1888年に決定したスロヴェニア語を主要教授語とするギムナジウムをツェリエに建設する計画が、ツェリエ、シュタイアーマルクのみならず全国的にドイツ系住民の反発を招き、最終的にはヴィンディツシュ=グレーツ Windisch-Graetz 内閣の躓石となったことを明らかにしている<sup>12</sup>。言語による不均衡は学校数の面から見ても明らかで、1913/1914年度のギムナジウム・実科ギムナジウムは全324校のうち、ドイツ語138校、イタリア語72校、チェコ語68校、ルテニア語10校、セルビア・クロアチア語7校、

---

<sup>7</sup> 上田理恵子、京極俊明「ハプスブルクの国制」大津留厚他(編)『ハプスブルク史研究入門』、143頁。

<sup>8</sup> 主要教授語として2言語が併用されているもの。

<sup>9</sup> 上田理恵子、京極俊明「ハプスブルクの国制」141頁。

<sup>10</sup> 大津留『ハプスブルクの実験』、大津留厚他編『民族』ミネルヴァ書房、2003。

<sup>11</sup> Die Ergebnisse der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den im Reichsrath vertretenen Königreichen und Ländern, 1/1. Die summarischen Ergebnisse der Volkszählung. Mit 6 Kartogrammen, S. 62.

<sup>12</sup> Berthold Sutter, *Die Badenische Sprachenverordnungen von 1897*, I. Graz: Böhlau-Verlag, 1960, S. 107-127.

スロヴェニア語 2 校、ルーマニア語とマジャール語は 0 校、2 言語 18 校であり<sup>13</sup>、この数が小学校数ともそれぞれの言語の話者数比とも対応していなかったのは明らかである。

これは各中等教育機関における生徒の背景が、初等教育機関と比べて多言語的であったことを意味する。即ち、初等教育においては母語を教授語とする学校を高い確率で選択できた一方、中等教育においては選択の余地が狭まり、母語以外を教授語とする学校に行かざるを得ない場合が多かった。これは学校側の視点に立てば、複数の異なる言語を母語とする生徒を受け入れることを意味したはずである。こうした多様な背景を持つ生徒に対し、実際の中等教育の現場はどのように対応したのだろうか。そしてそこで異言語話者間の共存・均衡はどこまで実現されていたのだろうか。本稿ではこうしたテーマから、ハプスブルク君主国における多言語状況と「実験」を考察してみたい。

しかしながら、ハプスブルク君主国の多言語状況と中等教育の関係を見ていく上で、二つの問題が生ずる。1 つ目は、一口に「多言語状況」「多言語性」といっても、ハプスブルク君主国の言語状況は様々であったことである。例えば 1910 年時点での人口 5 万人以上の「大都市」の中から代表的なものについて、言語話者数の割合の上位 3 言語を見ていくと、都市によって状況が異なっていたのは明らかである（**下表参照**）。

**話者数の上位 3 言語 (1910 年)** <sup>14</sup>

都市	1	2	3
ウィーン	ドイツ語 (94.14%)	チェコ語 (5.37%)	ポーランド語 (0.26%)
プラハ	チェコ語 (91.36%)	ドイツ語 (8.48%)	ポーランド語 (0.06%)
トリエステ	イタリア語 (62.31%)	スロヴェニア語 (29.81%)	ドイツ語 (6.21%)
リヴィウ	ポーランド語 (85.78%)	ルテニア語 (10.83%)	ドイツ語 (2.94%)
グラーツ	ドイツ語 (98.82%)	スロヴェニア語 (0.76%)	-
クラクフ	ポーランド語 (94.37%)	ドイツ語 (3.41%)	ルテニア語 (0.43%)
チェルニウツィー	ドイツ語 (48.40%)	ルテニア語 (17.85%)	ルーマニア語 (15.73%)
プーラ	イタリア語 (47.55%)	セルビア・クロアチア語 (35.52%)	ドイツ語 (10.65%)

<sup>13</sup> 上田理恵子、京極俊明「ハプスブルクの国制」、142 頁。

<sup>14</sup> Die Ergebnisse der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den im Reichsrat vertretenen Königreichen und Ländern, 1/1. Die summarischen Ergebnisse der Volkszählung. Mit 6 Kartogrammen, S. 62-4. プラハとウィーンについては Emil Brix, *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation: die Sprachenstatistik in den zisleithanischen Volkszählungen, 1880 bis 1910*. Wien: Böhlau, 1982, S. 438, 446 から補った。グラーツの第三位の言語については記載なし。プーラはイストリア半島にある現クロアチア領の都市、リヴィウЛьвів (独: Lemberg) とチェルニウツィーЧернівці (独: Czernowitz) は現ウクライナ領の都市。

このように各都市で多数派・少数派の言語の組み合わせは異なり、更に比率も異なっていた。そしてここでは都市を挙げたが、クラインやボヘミア、キュステンラント、ブコヴィナといった地域単位になるとまた数値は変わってくるのである。当時ハプスブルク君主国の事実上の公用語であったドイツ語は権力や社会的影響力と強く結びついた言語であり、それはいずれの「大都市」にも一定のドイツ語話者が存在していたことからもうかがえる。話者数比で見ると、上記の表中の都市はウィーン、プラハ、グラーツ、クラクフのように「ドイツ語と非ドイツ語が上位2言語として対峙する都市」と、トリエステ、リヴィウ、プーラのように「非ドイツ語の2言語が対峙し、ドイツ語が第3極である都市」に分けられる。「言語的対立」を考えるにしても、前者と後者で事情が変わってくるのは明らかである。つまりハプスブルク君主国の多言語状況を考察していくには、君主国全体を俯瞰した研究とともに、都市や州単位に焦点を当てた個別具体的な事例研究が積み重ねられる必要があるといえる。

問題の2つ目は、中等教育機関には国立／市立ギムナジウムその他、国立／市立実科学校や女学校のように様々な種類があった点である。そして学校を個別具体的に考えるのか、中等教育全体を論じるのか、制度について論じるのか、通った生徒について論じるのかといった点も考慮せねばならない。多様な「中等教育」を一様に論ずることは、現実の状況を歪めて再構築してしまう危険性を孕んでいる。少なくとも、各学校の異なる性質を踏まえた上で、個々の状況を考察し、事例を積み重ねた上で全体像に近づけていく作業は必要だろう。

これらの問題を踏まえ、本稿はまずハプスブルク君主国における多言語性の個別研究の一つと位置付け、研究対象地域としてはトリエステを取り上げ、また分析対象の中等教育機関としては国立ギムナジウムを取り上げる。

ハプスブルク君主国の多様な言語環境の中で、何故トリエステを取り上げるべきなのだろうか。ケーススタディの一つに過ぎないにせよ、19世紀末から20世紀初頭の帝政末期において、トリエステの言語状況は興味深い考察対象となり得る。当時のトリエステは人口のおよそ60-70%をイタリア系住民、20-30%程度をスロヴェニア系住民、5-6%をドイツ系住民、そして残りをクロアチア系、セルビア系、ギリシャ系他少数集団が占める都市であり、そこには常に言語問題に起因する対立と共存の可能性があったからである。また国内の他の大都市と異なり大規模港湾を有すること、ハプスブルク君主国全体では優勢だったドイツ語ではなくむしろ少数派のイタリア語が優勢であったこと、ハプスブルク君主国への14世紀の編入以来比較的高い自治性が維持されてきたことは、トリエステを他の大都市とは異なる

独特の位置づけを持った都市にし、ハプスブルク君主国の言語状況を考える上でもユニークな事例としていると考えられる。

ここで 19 世紀からハプスブルク君主国崩壊までのトリエステを巡る先行研究を整理しておこう。この時期のトリエステを見る視点はこれまで相反する 2 つの視座において考察されてきた。一つはトリエステにおける／トリエステを巡る言語・ネーション間の「対立」を強調する視点であり、もう一つは反対に「共存」を見る視点である。

複数のネーション、多言語が併存する興味深い状況について、先行研究も等閑に付してきた訳ではない。これまで、この状況を分析する際に用いられてきた伝統的な視角は、イタリア系住民とスロヴェニア住民の対立である。ハプスブルク君主国における「民族問題」については、A・J・P・テイラー A. J. P. Taylor、ハンス・コーン Hans Kohn、ロバート・A・カン Robert A. Kann の古典的・通史的研究をはじめに<sup>15</sup>多数の研究が蓄積されているが、エミール・ブリックス Emil Brix はアウスグライヒ体制下ハプスブルク君主国のオーストリア統治部分で国勢調査に際して 1880 年から 10 年毎に 4 回実施された日常語の統計調査を検討し、この調査によって住民のネーションへの帰属意識が先鋭化され、ネーション間の対立が激化していったと論じている<sup>16</sup>。調査結果はネーションの勢力を数値として可視化するだけでなく、学校や公的機関における各言語の地位にも影響するという重要な意味を持っていた。ブリックスの研究ではオーストリア各地域が網羅されており、トリエステに関しては、市の人口の約 70%を占める多数派のイタリア系住民と約 20%のスロヴェニア系住民が調査方法や集計を巡って様々な対立を繰り広げ、とりわけこの調査以降、両者の言語的アイデンティティの衝突が顕著になっていったと結論づけられている。トリエステにおけるこうした対立に関する研究は多く、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてトリエステで発行されていたスロヴェニア語新聞とイタリア語新聞各紙から住民対立を分析したシュテファン・チョコ Štefan Čok<sup>17</sup>や、トリエステにおけるスロヴェニア民族運動の展開を考察したヨジ

---

<sup>15</sup> A. J. P. Taylor, *The Habsburg Monarchy, 1809-1918. A History of the Austrian Empire and Austria-Hungary*. London: Macmillan & Co., 1941; Hans Kohn, *The Habsburg Empire*. New York: Van Nostrand Reinhold, 1961; Robert A. Kann, *A History of the Habsburg Empire 1526-1918*. Berkeley: University of California Press, 1974.

<sup>16</sup> Emil Brix, *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation: die Sprachenstatistik in den zisleithanischen Volkszählungen, 1880 bis 1910*. Wien: Böhlau, 1982.

<sup>17</sup> Štefan Čok, Slovensko-italijanski in hrvaško-italijanski odnosi preko poročanja tržaških časopisov 1866-1882, in: *Acta Histriae*, 20, 1/2, 2012, str. 189-212.

エ・ピリエヴェツ Jože Pirjevec<sup>18</sup>らの研究がある。更にイタリア系都市エリートとそのスロヴェニア系住民観を扱ったアンナ・ミッコ Anna Millo<sup>19</sup>、イタリア系住民とスロヴェニア系住民の衝突をフランス人という第三者的な立場から見たアルチェオ・リオーザ Alceo Riosa の研究にも言及しておく必要があるだろう<sup>20</sup>。こうした研究の立場からいえば、19世紀以降ナショナルな意識を高めていったスロヴェニア系住民が人口や経済力で勝るイタリア系住民を相手に権利を拡充する動きを強めていった帝政末期は、ジアンパオロ・ヴァルデヴィット Gianpaolo Valdevit が述べるようにトリエステの政治領域においてイタリア系住民とスロヴェニア系住民の間に埋め難い溝が生じていた時代として描き出される<sup>21</sup>。

一方、トリエステをマクロな視点で見れば、ハプスブルク君主国対イタリア王国という対立軸も設定できる。ハプスブルク君主国はイタリア統一運動の大きな「障害」の一つであり、リソルジメント運動期、そして1861年のイタリア王国建国後もいわゆる「未回収のイタリア」問題<sup>22</sup>が存在していた。こちらの問題に関しても、イタリア史やハプスブルク史の研究者による先行研究が蓄積されている<sup>23</sup>。

---

<sup>18</sup> Jože Pirjevec, *“Trst je naš!” Boj Slovencev za morje (1848–1954)*. Ljubljana: Nova revija, 2007.

<sup>19</sup> Anna Millo, *L'elite del potere a Trieste. Una biografia collettiva 1891–1938*. Milano, Franco Angeli Storia, 1989.

<sup>20</sup> Alceo Riosa, *Adriatico irredento. Italiani e slavi sotto la lente francese (1793–1918)*. Napoli: Guida Editoli, 2009.

<sup>21</sup> Gianpaolo Valdevit, *Trieste. Storia di una periferia insicura*. Milan: Mondadori, 2004.

<sup>22</sup> トリエステ、リエカ、南ティロール、ダルマチア、イストリア半島といった歴史的にイタリア系住民が多く居住してきた地域をイタリア王国に統一しようとする試み。

<sup>23</sup> この問題を巡る研究の嚆矢としては、濱口忠大が同時代の代表的研究として挙げているように（濱口忠大「トリエステ近現代史研究文献案内--歴史叙述に描かれた国境都市の肖像」『人文論究』第59巻1号、2009、193-195頁）、イタリアによるトリエステ「回収」の必要性を力説したルッジェーロ・ティメウス Ruggero Timeus や (Ruggero Timeus, *Trieste*. Roma: G. Garzoni Provenzano, 1914)、イタリア系とスロヴェニア系のネーション対立を考察しながらトリエステと中欧後背地の紐帯を強調したアンジェロ・ヴィヴァンテ Angelo Vivante が挙げられる (Angelo Vivante, *Irredentismo adriatico. Contributo alla discussione sui rapporti italo-austriaci*. Firenze: Libreria della voce, 1912.)。他にこの時期のハプスブルク君主国とイタリア関係、また「イッレデンティスト観」に焦点を当てたのがフェデリーコ・カボッド Federico Chabod で (Federico Chabod, *Storia della politica estera italiana: dal 1870 al 1896*. Bari, Editori Laterza, 1965)、その研究はジュゼッペ・マンマレッタ Giuseppe Mammarella とパオロ・カカーチエ Paolo Cacace に継承されている (Giuseppe Mammarella, Paolo Cacace, *La politica estera dell'Italia. Dallo stato unitario ai giorni nostri*. Bari, Laterza, 2010)。こうした中でセルジョ・ロマーノ Sergio Romano は未回収のイタリアの回収こそ第一次世界大戦前のイタリア外交の最優先課題だったとする見方に疑問を呈している (Sergio Romano, *Der Irredentismus in der italienischen Außenpolitik*, in: Angelo Ara; Eberhard Kolb (Hg.), *Grenzregionen im Zeitalter der Nationalismen. Elsaß-Lothringen / Trient-Triest, 1870-1914*. Berlin: Duncker & Humblot, 1998, S. 13-24)。ロマーノはトリエステが確

こうした「対立」軸を中心とした研究に対し、トリエステの持っていた「共存」の側面が着目された研究もある。カルロ・スキフラー Carlo Schiffrer はトリエステをラテン、スラヴ、ゲルマンの言語と文化が接する「コスモポリタンのイタリア都市」と評し<sup>24</sup>、クラウディオ・マグリス Claudio Magris とアンゲロ・アラ Angelo Ara の流れを汲んだクラウディオ・ミンカ Claudio Minca は「コスモポリタンの都市トリエステ」においていかに脱国家的・コスモポリタンの「トリエステ人」としてのアイデンティティが形成、喪失、模索されてきたのかを論じている<sup>25</sup>。このようにトリエステを評して「コスモポリタン」的都市と述べる研究の根拠は、トリエステに多民族・多文化が平和裏に存在していたことと、開かれた港街であったことに収斂する<sup>26</sup>。これら先行研究で「コスモポリタン」ということばに明確な定義づけはなされておらず、半ば自明のものとして使用されている点には疑問が残るが、仮にこうした立場からいふのであれば、トリエステは佐々木洋子が述べるように「同時代の海港都市に共通する、居住者の宗教や出身地、それに伴う生活習慣の多様性を前提としながら、コスモポリタン都市として成長を遂げた」<sup>27</sup>都市として描写できる。港湾都市として発展を遂げる中で、常に他者を受け入れ続け、そして集まった多様な背景を持つ住民が平和的に共栄したという側面があったのは確かであるといえる。そしてこうした観点で考えると、帝政末期はこの「コスモポリタンの」調和が崩れ、トリエステ社会がイタリア系住民とスロヴェニア系住民とに分断されていく時代であり、またイッレデンティズモに共感する一

---

かにイタリアの一部ナショナリストの注目の的となったと認めつつも、国内情勢の安定が喫緊の課題であったイタリア政府内でトリエステの「回収」論が主流となることはなく、現実的には三国同盟以降のイタリアとオーストリアは第一次世界大戦まで同盟に基づいた安全保障を維持していたと指摘している。また濱口忠大はリソルジメント期のトリエステのイタリア系住民が、イタリア・ナショナリズムに安易に呼応するのではなく、むしろ連邦制による大規模経済圏を志向していたと論じている。同研究ではイタリア王国とハプスブルク君主国という東西の境界、そして地中海世界とアルプス地域という南北の境界の交差点に位置する「二重の境界性」を持つトリエステを舞台とした「もう一つのリソルジメント」の可能性があったことが指摘されている（濱口忠大「対岸からのリソルジメント—19世紀半ばのトリエステにおけるナショナリズムと大規模経済圏構想—」博士論文、関西学院大学、2014）。

<sup>24</sup> Carlo Schiffrer, *Le origini dell'irredentismo triestino (1813-1860)*. Udine: Istituto delle scienze accademiche, 1937.

<sup>25</sup> Angelo Ara; Claudio Maglis. *Trieste: un'identità di frontiera*. Torino: Einaudi, 1982. Claudio Minca. 'Trieste Nazione' and its geographies of absence, in: *Social & Cultural Geography*, 10 (3), 2009, pp. 257-277.

<sup>26</sup> 他、例えば Giulio Cervani, *Intorno al cosmopolitismo triestino*, in *Annali Triestini* IV/IV. Trieste: Università di Trieste, 1950, pag. 237-252.

<sup>27</sup> 佐々木洋子「トリエステにおける『共存』：十九世紀ハプスブルク帝国の辺境におけるコスモポリタニズム」『青山史学』第30号（伊藤定良教授退任記念号）、2012、55頁。

部イタリア系住民がハプスブルク君主国からイタリア王国に引き付けられていく時代と捉えることができる。

ではトリエステの数ある中等教育機関の中で、なぜ国立ギムナジウムを取り上げるべきなのだろうか。この理由は3つある。まずトリエステ国立ギムナジウムはイタリア語が優勢な都市にありながら、ドイツ語を主要教授語とする教育機関であったことである。上述の通り、先行研究におけるトリエステについての視角では「イタリア系住民（イタリア語）対スロヴェニア系住民（スロヴェニア語）」、ないし「イタリア王国対ハプスブルク君主国」という二項対立的図式が主流である。トリエステ国立ギムナジウムについての考察は、この図式をドイツ系住民（ドイツ語）／イタリア系住民（イタリア語）／スロヴェニア系住民（スロヴェニア系）に塗り替えることが可能になる。帝政末期のトリエステ国立ギムナジウムはこれら3者の生徒が数の上で拮抗する場であり、文字通り3者が相互に関係する場であったのである。トリエステのドイツ系住民に関しては例えばそのコミュニティの成立の歴史と宗教面に焦点を当てたピエルパオロ・ドルシ Pierpaolo Dorsi<sup>28</sup>の研究があり、オーストリアの海港都市としてのトリエステを象徴する巨大海運会社オーストリア・ロイド社 Österreichischer Lloyd については、ジュリオ・ベルナルディ Giulio Bernardi らによる国際研究、アメリカのロナルド・クーンズ Ronald E. Coons<sup>29</sup>、更に我が国でも濱口忠大<sup>30</sup>のように既に多数の研究者が扱っている。しかし言語とトリエステという枠組みで考えると、ハプスブルク君主国統治時代トリエステにおけるドイツ語の位置付けの考察はいまだ不十分である。話者数では劣るにせよ影響力のある言語であり、イタリア語対スロヴェニア語の対立では「中立的」であったドイツ語を考察に入れることで、トリエステの言語状況が一層明確に浮かび上がってくると考えられる。これまでもスザンヌ・チャイチュナー Susanne Czeitschner のように裁判制度におけるドイツ語の優位性を論じた研究はあるが<sup>31</sup>、ブリックスの研究では話者数が相対的に少ないことを理由にドイツ系住民は考察対象から捨象され

---

<sup>28</sup> Pierpaolo Dorsi, La collettività di lingua tedesca, in: *Storia economica e sociale di Trieste*, vol. I, a cura di Roberto Finzi e Giovanni Panjek, Trieste: Lint editoriale, 2001, pag. 547-571.

<sup>29</sup> Ronald E. Coons, *Steamships, statesmen, and bureaucrats: Austrian policy towards the Steam Navigation Company of the Austrian Lloyd, 1836-1848*, Wiesbaden: Steiner, 1975.

<sup>30</sup> 濱口忠大「対岸からのリソルジメント」、2014。

<sup>31</sup> Susanne Czeitschner, Diglossia, hegemony and polyglossia in the judicial system of Trieste in the 19th century, in: Rosita Rindler Schjerve, *Diglossia and Power: Language Policies and Practice in the 19th Century Habsburg Empire*. Berlin: Walter De Gruyter Inco., 2003, pp. 69-106.

ており、また佐々木洋子の考察ではトリエステの人々を結びつけたのは「イタリア語、より正確にはトリエステ化したヴェネツィア語」<sup>32</sup>であると述べられ、援用されているカッタルツァの論考でもイタリア語をリンガ・フランカとする住民たちが「トリエステ人」への帰属意識を持っていたと述べられている一方で<sup>33</sup>、ドイツ語の果たしていた機能については着目されていない。トリエステ国立ギムナジウムの分析は、多数派のイタリア系住民／イタリア語の前でスロヴェニア系住民／スロヴェニア語以上の少数派であったドイツ系住民／ドイツ語に光を当て、イタリア対スロヴェニアという二項対立的図式とは異なるトリエステ像を描き出すことにつながる。

トリエステ国立ギムナジウムに着目する2つ目の理由には、教育機関における言語の扱いがハプスブルク君主国におけるネーション・言語間均衡を考える上で重要な視点となることが挙げられる。例えばドイツ系住民とスロヴェニア系住民が争ったツェリエにおけるスロヴェニア語を主要教授語とするギムナジウムの設立問題や、プラハ大学における教授語としてのチェコ語の導入<sup>34</sup>のように、教育機関における言語の扱いは住民の大きな関心の的となり、かつそれぞれの言語を話す人々の言語権と密接に関連する問題であった。白井裕之と木村護郎によれば「言語権」の中心的論点は「第一に自集団の言語と自己同一化し、これを学校において習得し、また公共機関で使用する権利、そして第二に当該地域の公用語を学習する権利」の2つである<sup>35</sup>。この視点から考えたとき、ドイツ語を教授語とするトリエステ国立ギムナジウムにはまずトリエステのドイツ系住民の子弟が母語であるドイツ語を学び、そしてドイツ語で教育を受ける権利を保障する機能があった。これは人口が圧倒的に少ないドイツ系住民と他の住民との間に均衡を作り出すものであったと捉えることができる。更にイタリア語を「当該地域の公用語」とすれば、同校ではイタリア語の学習も可能であった点から、こちらの権利もある程度は保障されていたといえるだろう。確かにドイツ系住民はハプスブルク君主国全体で見れば多数派であり、ドイツ語は支配的立場にあった。トリエステ国立ギムナジウムは1842年に設立されたが、イタリア語を主要教授語とするトリエステ市立

---

<sup>32</sup> 佐々木洋子「トリエステにおける『共存』」、55頁。

<sup>33</sup> 佐々木洋子「トリエステにおける『共存』」、58頁。Marina Cattaruzza, Nationalitätenkonflikte in Triest im Rahmen der Nationalitätenfrage in der Habsburgermonarchie 1850-1914, in: Ralph Melville u. a. (Hg.). *Deutschland und Europa in der Neuzeit*. Stuttgart: F. Steiner Verlag Wiesbaden, 1988, S. 715.

<sup>34</sup> この結果プラハ大学はドイツ語で教育を行う部門とチェコ語で教育を行う部門が併存する体制となる。

<sup>35</sup> 白井裕之、木村護郎「はじめに」言語権研究会編『ことばへの権利』三元社、1999、10頁。

上級ギムナジウムの設立は 21 年後の 1863 年である。佐々木洋子の研究にあるように、設立当初のトリエステ国立ギムナジウムではイタリア系生徒の保護者が教授語としてイタリア語の導入を求めている<sup>36</sup>。同研究では、この保護者の請願はイタリア・ナショナリズムの色合いが強いものではなく、生徒の学習上の便宜を図るための理性的なものであったと結論付けられているが、結果的にイタリア語の教授語としての導入は叶わなかったため、トリエステではトリエステ市立ギムナジウム設立までドイツ語話者が有利な状態にあったのは明らかである。しかし当時のトリエステのドイツ系住民は人口の 1 割にも満たず、紛れもない「少数者」であった。その意味でいえばトリエステのドイツ語を母語とする子供たちの言語権もまた守られるべきだったといえる。こうした見方はハプスブルク君主国内におけるドイツ語の抑圧的側面と非ドイツ語母語話者のエクソフォニーを強調する視点では覆い隠されてしまうのではないだろうか。また、トリエステ国立ギムナジウムは教授語ではなくともイタリア語とスロヴェニア語を授業科目として提供していた。このことは市内に存在したイタリア系の主要国公立中等教育機関がスロヴェニア語を提供せず、スロヴェニア系生徒も皆無に近かったのとは対照的である。公教育におけるスロヴェニア語の使用の拡大は、トリエステのスロヴェニア系住民の悲願の一つでもあった。この点でもトリエステ国立ギムナジウムの有り様は、トリエステに均衡を作り出す試みを考える上で極めて興味深い考察対象となる。

理由の 3 つ目は、ギムナジウムの個別研究の必要性である。ハプスブルク君主国の教育史研究が 19 世紀初頭のヨハン・デニス Johann Denis とイグナンツ・コルノバ Ignanz Cornova の自伝的著作に遡る長い歴史<sup>37</sup>を持つ一方で、その中心的視点はギムナジウムの起源、設立、制度といったハード面の解明に向けられてきた。例えばハンネローレ・ブルガー Hannelore Burger はアウスグライヒ体制下オーストリアを広く見渡しつつ、国家基本法と主に初等教育の関係を論じ<sup>38</sup>、ヘルムート・エンゲルブレヒト Helmut Engelbrecht は 1848 年から 1918 年までのオーストリア（現在のオーストリアの領域に相当する、狭い意

---

<sup>36</sup> 佐々木洋子「一九世紀トリエステにおける国立ギムナジウムの授業語」『青山史学』青山学院大学、第 35 号、59-78 頁、2017。

<sup>37</sup> Johann Michael Denis, *Jugendgeschichte, von ihm selbst beschrieben. Aus dem Lateinischen übersetzt.* Winterthur: Steiner, 1802; Ignanz Cornova. *Die Jesuiten als Gymnasiallehrer, in freundschaftlichen Briefen an den k. k. Kämmerer und Vizepräsidenten in Gallizien Grafen von Lezansky.* Prag: Calve, 1804.

<sup>38</sup> Hannelore Burger, *Sprachenrecht und Sprachgerechtigkeit im Österreichischen Unterrichtswesen 1867-1918.* Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1995.

味でのオーストリア)におけるギムナジウム史の概要を明らかにした<sup>39</sup>。エンゲルブレヒトの研究はゲラルト・グリム Gerald Grimm が指摘するように体系的な研究が不十分であったハプスブルク君主国ギムナジウム史研究の画期となった<sup>40</sup>。しかしそれぞれのギムナジウムの個別具体的な研究は未だ十分になされているとは言い難く、事例研究の積み重ねが必要であると考えられる。

なお、国立ギムナジウムの特徴を立体的に描き出すにあたり、トリエステの他の中等教育機関及び近隣の国立ギムナジウムとの比較分析は有効であろう。よって本稿では、トリエステ市内の他の中等教育機関と、カポルレツラの論考では扱われていない近隣の国立ギムナジウム<sup>41</sup>との比較を行う。母語から見た生徒数を比較することにより、学校の間における言語による共存と分離、媒介と排除が浮かび上がる。またトリエステ国立ギムナジウムのイタリア語・スロヴェニア語の教育内容を評価するには、これらの言語を主要教授語とし、かつ当該言語を母語とする生徒が多数派の学校における教育内容との比較が有益であろう。

### 【本研究の視角】

以上の問題意識を持って、本稿では研究の中核として次の視角を設定する。

#### トリエステ国立ギムナジウムの生徒

一つはトリエステ国立ギムナジウムにどのような生徒が通っていたのかを浮かび上がらせることである。このギムナジウムは上流階級やドイツ語母語話者のみを対象とした排他性を持った学校だったのだろうか。あるいは多様な人々に開かれた性格を持っていたのだろうか。そして多様な背景を持つ生徒たちは、学校内でどのように接点・交流を持っていたのだろうか。トリエステ国立ギムナジウムに関する研究は不足している。ヴィットーリオ・カポ

---

<sup>39</sup> Helmut Engelbrecht, *Geschichte des österreichischen Bildungswesens. Von den Anfängen bis zur Gegenwart*. 6 Bände, Wien: Österreichischer Bundesverlag, 1982-1995. 本稿と特に関係するのは第四巻である。

<sup>40</sup> Gerald Grimm, Wege und Wendepunkte der Erforschung der Geschichte des österreichischen Gymnasiums. Ein Beitrag zur Geschichte und Methodologie der Pädagogischen Historiographie in Österreich, in: Lechner, Elmar; Rumpler, Helmut; Herbert Zdarzil (Hg.) *Zur Geschichte des österreichischen Bildungswesens. Probleme und Perspektiven der Forschung*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1992, S. 79-116.

<sup>41</sup> 具体的にはリュブリャーナやプーラ、ツェリエの国立ギムナジウム。

ルレッラ Vittorio Caporrella はイタリア語を教授語としていた市立上級ギムナジウム Ginnasio Superiore Comunale di Trieste を取り上げ、19 世紀末から 1914 年までのトリエステのイタリア系中産階級家庭の教育戦略について論じている<sup>42</sup>。同研究は市立ギムナジウムに通っていた生徒の母語／ネーション・宗派・職業選択の三要素を中心に分析し、1890 年、1900 年、1910 年と 10 年毎のデータを示してそれらの通時的変化を定量的に考察している。ここでトリエステ国立ギムナジウムに関してはトリエステ市立女学校とともに比較対象として取り上げられているものの、考察の中核はあくまでイタリア系中産階級家庭とイタリア系ギムナジウムであるトリエステ市立上級ギムナジウムである。トリエステ国立ギムナジウムを考察の中心に据え、その有り様を検討することは、当時のトリエステ社会全体の教育の様相の解明に貢献できる。この点については第二章「トリエステ国立ギムナジウムの基本的性格と生徒」で考察する。

### 言語教育の内容

二つ目はトリエステ国立ギムナジウムにおける言語教育の内容の具体的な解明である。制度としてどのような科目が設置されていたのかということに留まらず、そのカリキュラム、実施状況に踏み込んで考察する。トリエステ国立ギムナジウムでは、必修科目であるラテン語、古典ギリシャ語の他にドイツ語（必修科目）、イタリア語とスロヴェニア語（両者とも選択科目）、フランス語（自由科目）が設置されていた。ここでの言語教育はどこまでの水準が目指されたものだったのだろうか。ドイツ語の扱いと他の近代語の扱いにはどこまでの差があったのか。生徒の実際の到達度を示す成績はどうなっていたのだろうか。成績に言語による格差はあったのだろうか。そしてトリエステ国立ギムナジウムの教育体系は、近隣の他の中等教育機関と比較して、教材、時間数、授業内容に差異はあったのだろうか。ここではトリエステ近郊のギムナジウムにも目を向ける。トリエステ内外の教育機関との比較を加えることで、より広い視点からトリエステ国立ギムナジウムの位置づけが明らかにできると考えられるからである。

なお「言語教育」を字義通りに捉えれば、ラテン語と古典ギリシャ語も無論含まれるものではあるが、本稿では近代語の授業内容のみを対象とする。トリエステ国立ギムナジウムに限らず、ラテン語とギリシャ語の学習は欧州に広く共通する人文的素養を身につけるための

---

<sup>42</sup> Vittorio Caporrella, Strategie educative dei ceti medi italiani a Triestetra la fine del XIX sec. e il 1914, unv. Diss. Freie Universität Berlin, 2009.

ものであり、実生活でも使用できる近代語を学ぶこととは全く意味が異なっていたからである。こうした考察を踏まえ、トリエステにおける言語間の均衡にどこまでトリエステ国立ギムナジウムの言語教育が寄与し得たのかを考察する。これは第三章「トリエステ国立ギムナジウムの言語教育体系」で考察する。

### 言語教育と生徒

最後に三つ目として、用意された言語教育システムに対して生徒が実際にどのように参画していたのかを明らかにすることが有益であろう。エンゲルブレヒトやブルガーによる体制面、学校側の視点からのハプスブルク君主国教育史研究の補填として、本稿は生徒の側からの視点で解明を試みる。イタリア語、スロヴェニア語、フランス語が選択肢として与えられた状況で、どれくらいの生徒がどういった基準でどの言語を選んでいただろうか。そこには何か明確な傾向が見て取れるのだろうか。これらの問題を考察することで、言語から見た生徒の共存・分離が明らかにされる。これは第四章「トリエステ国立ギムナジウムにおける言語科目履修状況と成績」で扱う。

これら三点の考察から、本稿は国立ギムナジウムという場でトリエステの諸言語・ネーションがどのように関係していたのかを捉える。そしてトリエステ国立ギムナジウムは帝政末期のトリエステで言語間・ネーション間に均衡を作り出す上でいかなる機能を果たしていたのか、トリエステ社会の中でどのように位置づけられるのかを、「共存か、分極か」という二項対立的視点ではなく相対化した視点から明らかにする。

### **【考察時期】**

本稿が考察する時期はハプスブルク帝政末期の19世紀後半から20世紀初頭である。その中でも本稿は1910年を考察の中心に据える。この理由は3つある。1つはこの時期がトリエステにおけるネーション間の調和が揺らぎ、イタリア系とスロヴェニア系の対立が深まっていく時期であることによる。言語・ネーションの対立の中で、ドイツ系・イタリア系・スロヴェニア系三者の集うトリエステ国立ギムナジウムにはどのような共存あるいは分極化があったのかを考察する。

2つ目は史料状況である。トリエステ国立ギムナジウムの1910/1911年度の生徒については、史料から母語、宗派、保護者の職業、出身地といった情報が入手できる。そして

1910年にはオーストリア（アウスグライヒ体制下でウィーンの政府が統治する部分）で最後の大規模日常語調査が実施されている。言語問題を考察する以上、当時のトリエステに各言語の話者がどれだけ存在したのかを把握するのは必須といえる。ここで1880年から10年毎に1910年まで実施された国勢調査による日常語話者数のデータが格好の史料となる。これによりトリエステのみならずオーストリア全体における言語話者数の概要が把握できる。また、1910年はハプスブルク君主国の末期であるため、人口、産業、日常語についての蓄積された統計データを数多く利用でき、過去の年度との通時的比較も可能である。

3つ目の理由は、1911/1912年度からトリエステ国立ギムナジウムでの選択科目に関する規定が変更され、イタリア語とスロヴェニア語はそれぞれの言語を母語とする生徒には必修科目となることである。自由意志の働く余地が減る以上、これ以降の年度では、生徒の言語科目履修に対する意欲や言語科目選択の背景の解明が困難になる。

以上の理由により、本稿では1910/1911年度を考察の中心とし、比較対象としては同じく日常語調査の実施された1900/1901年、1890/1891年を扱う。第1回日常語調査は1880年に実施されているが、史料中で生徒個人の母語が確認できるのは1880年代半ば以降であり、1880/1881年度は各生徒の母語が不明であるため除外する<sup>43</sup>。

## 【史料】

本稿では中心史料として、トリエステ国立ギムナジウムの『年報』*Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest* と、『生徒記録簿』*Hauptkatalog des k. k. Staatsgymnasium in Triest* を用いる。この『年報』*Jahresbericht*（または*Programm*）はハプスブルク君主国の各ギムナジウムで1850年から不定期に発行されるようになり、1875年からは毎年発行されていた公的な刊行物である<sup>44</sup>。『年報』は2部構成で、第1部にはその学校の教員が執筆した教育的な読み物が置かれ、第2部には学校便り *Schulnachrichten* が掲載されていた。その内容は、総評、教員一覧、本年度授業内容、作文題目、重要法令、教材・図書収集、奨学金・褒賞、統計資料、卒業試験、お知らせ、といった様相である。次章以降ではこれを利用してトリエステ国立ギムナジウムの学校としての体制を考察する。その際比較対象としてリュブリャーナ Ljubljana（ドイツ語：ライバツハ

<sup>43</sup> ただし、学校全体についての各言語の母語話者数は史料に記載がある。

<sup>44</sup> Grimm, Wege und Wendepunkte der Erforschung der Geschichte des österreichischen Gymnasiums, S. 88.

Laibach)、ツェリエ Celje (ドイツ語: ツィリイ Cilli)、マリボル Maribor (ドイツ語: マールブルク・アン・デア・ドゥラウ Marburg an der Drau)、ノヴォ・メスト Novo Mesto (ドイツ語: ルドルフスヴェルトまたはノイシュタットウル Rudolfswerth または Neustadt)、コペル Koper (イタリア語: カポディストリア Capodistria、クロアチア語: コパル Kopar、ドイツ語: ガファース Gafers)、プーラ Pula (ドイツ語: ポレイ Polei、イタリア語: ポーラ Pola、スロヴェニア語: プリイ Pulj) の国立ギムナジウムと、トリエステ市内の国立実科学校、イタリア系の市立ギムナジウムと市立女子校を取り上げる。リュブリャーナ、ツェリエ、マリボル、ノヴォ・メスト、コペルは現在のスロヴェニア領に含まれる都市で、プーラはクロアチア領となっている。これらの学校の『年報』と『生徒記録簿』も、形式面ではトリエステ国立ギムナジウムのものとほぼ共通している。

\*\*\*

注① 特に明示しない限り、史料・二次文献の引用の和訳は筆者によるものである。

注② 地名のカナ表記は日本語での慣習と現在における所属国の言語に基づく。

## 第一章 帝政末期トリエステの言語状況

本章では考察の前提として、19世紀末から20世紀初頭のトリエステの言語状況を確認する。第一節でトリエステ史の概略と、帝政末期の状況を言語的対立に焦点を当てて見ていく。続いて第二節では媒介言語としてのトリエステ方言について述べる。トリエステの言語状況は対立的構図からのみでは語り切れないからである。トリエステ方言はドイツ語でもスロヴェニア語でも、最も近いイタリア語でもない混成言語として住民を媒介していたのであり、その成り立ちと様態はハプスブルク君主国による統治と密接に関連している。

### 第一節 多言語社会<sup>45</sup>としての帝政末期トリエステ

第二次世界大戦後、鉄のカーテンの一つの起点、西側と東側としての接点としても知られることとなるトリエステは、アドリア海最奥、イストリア半島の付け根にあり、現在のイタリア・スロヴェニア国境に位置する港湾都市である。今日ではイタリア領に属し、フリウーリ＝ヴェネツィア・ジュリア州の州都でありトリエステ県の県都でもある。

海港都市トリエステの起源は古代に遡る。ローマ、東ローマ、フランクと支配者が変わった後、12世紀には自由コムーネ *Libero Comune* として自治を行うに至る。しかしヴェネツィアとの競合に押されたトリエステはレオポルト三世に庇護を求め、1382年9月30日にハプスブルク家の領地となった。ハプスブルク君主国の領土のうち、自主的に編入された唯一の例である<sup>46</sup>。港湾都市として著しい発展を遂げるのは18世紀にアドリア海との窓口として自由港指定を受けてからで、この時にはイストリア半島を挟んで反対側に位置するリエカ

---

<sup>45</sup> 「多言語社会」という用語について、安田敏朗は「もともと多言語性のない社会などなく、まったく均質な言語社会というものは想定しにくい」と指摘している。安田の研究は日本語と日本社会、帝国日本と植民地を対象としたものだが、敷衍することができる。日本語以外の言語であっても、安田が日本語について述べたように、一つの言語として括られる中には地域言語や階層言語といった多様なヴァリエーションが想定可能であり、その言語自体が多言語性を持つとすれば多言語性のない社会はなく、全く別系統の言語が話されていけば、確かに多言語性のない社会はない。それでも本稿が対象とする時期のトリエステのように、ドイツ語、スロヴェニア語、チェコ語、クロアチア語やイタリア語（とトリエステ方言）が日常的に話されていた空間は十分に「多言語社会」であり、多言語性の強い社会であったといえるだろう。本稿でいうところの「多言語社会」に「多言語使用こそ望ましい／多言語使用者になるべきである」という価値判断は含まれていない（安田敏朗『「多言語社会」という幻想』、三元社、2011、2頁）。

<sup>46</sup> 佐々木洋子「トリエステにおける『共存』」、44頁。

とともに指定を受け、両港は輸入品への関税が免除された自由港として発展した。トリエステは 1830 年代にはその「黄金期」を迎えた。ハプスブルク家領となって以降も相当程度の自治権が担保されていたトリエステは、19 世紀半ばに近隣のゲルツ・グラディスカ Graftschaft Görz und Gradiska、イストリア Markgrafschaft Istrien、クヴァルナ諸島<sup>47</sup>Quarnerische Inseln とともに行政区キュステンラント Küstenland を構成し、その中心である知事府はトリエステに設置された。

帝政末期のハプスブルク君主国はアウスグライヒ体制という独自の体制を敷いていた。1867 年に成立したこの体制下では、1713 年 4 月 19 日のカール六世による国事詔書 Pragmatische Sanktion を根拠にハンガリー王国の自立性が明文化され、ハプスブルク君主国の国内全土でドイツ系に次ぐ第 2 の人口を占めるマジャール系住民に大幅な自治が認められた。新たに生まれた「オーストリア＝ハンガリー」という国名が示すように、ハプスブルク家当主がオーストリア皇帝とハンガリー国王を兼任し、軍事・外交とそれに要する財政を除き、オーストリア側とハンガリー側はそれぞれに政府（オーストリア政府は皇帝に、ハンガリー政府はハンガリー国王に対して直接責任を負うことが定められていた）と国家基本法を持ち、自治を行うこととなったのである<sup>48</sup>。アウスグライヒ体制下ではハプスブルク君主国の全ての官職が「オーストリア＝ハンガリーの共通業務」の官職（k. u. k = kaiserlich und königlich を冠する官職）、「ウィーンの国会に代表を送る諸王国並びに諸領邦」の官職（k. k. = kaiserlich-königlich を冠する官職）、そして「ハンガリー王国」の官職（k. u. = königlich-ungarisch）に区分されていた<sup>49</sup>。このアウスグライヒ体制下でトリエステはオーストリア<sup>50</sup>に属しており、それゆえにトリエステ国立ギムナジウムには k. k. が冠されていた。現在では国境の地方都市に過ぎないと対照的に、アウスグライヒ体制下のトリエステはオーストリア内でウィーンとプラハに次ぐ第 3 の人口を抱え、かつ経済面では随一の重要港湾であった。例えば 1910 年のトリエステ港の入港船舶数は 12,877 隻、総トン数は 4,267,168 トンと、トリエステに次ぐオーストリアの主要港だったプーラの 6,079 隻、

---

<sup>47</sup> イストリア半島とクロアチア本土の間の島々。

<sup>48</sup> 大津留厚「ナポレオン戦争からハプスブルク君主国の崩壊まで」大津留厚他（編）『ハプスブルク史研究入門』、124-126 頁。

<sup>49</sup> 大津留厚『ハプスブルクの実験』、34 頁。

<sup>50</sup> 以下本稿で特に明示のない限り「オーストリア」は「アウスグライヒ体制下におけるオーストリア政府統治部分」を指す。

1,458,117 トンを遥かに上回る<sup>51</sup>。これにザダル（同 4,655 隻、1,262,959 トン）とスプリト（同 4,062 隻、1,023,448 トン）を加えた 4 港でオーストリア全体の入港船舶数・総トン数の 3 割強を占めるが、その中でもトリエステの数値は突出している。貨物輸送にはウィーンまで延びる南部鉄道が重要な役割を果たした<sup>52</sup>。産業の概況について述べておくと、トリエステの第一次産業の主たる担い手はスロヴェニア系住民であり<sup>53</sup>、イタリア系住民は第二次・第三次産業に 8 割が属し、ドイツ系住民は第三次産業に 8 割が属していた（表 1-1 参照）。そして全体で見ればトリエステは第二次・第三次産業人口が 8 割を占める商工業都市であったといえる。

表 1-1：トリエステの日常語話者数別産業従事者数（1910 年）<sup>54</sup>

日常語	A.農林業		B.工業		C.商業		D.公務員・軍属・自由業・無職	
ドイツ語	46	0.4%	1861	15.7%	5150	43.5%	4793	40.4%
スロヴェニア語	7905	13.9%	20151	35.4%	19836	34.9%	9016	15.8%
イタリア語	1093	0.9%	40558	34.1%	46797	39.3%	30575	25.7%
その他	32	1.0%	487	15.3%	1373	43.2%	1283	40.4%
合計	9076		63057		73156		45667	

文化の面でも帝政末期トリエステは大いに発展し、20 世紀初頭までにはレヴォルテッラ美術館 Museo Revoltella、古代博物館 Museo Lapidario、自然史博物館 Museo di Storia Naturale、水族館 Acquario Marino、ヴェルディ劇場 Teatro lirico Giuseppe Verdi、市立図書館 Biblioteca Civica といった数々の文化施設が用意され、住民の文化的生活の向上に貢献した。ジェイムズ・ジョイス James Joyce、ウンベルト・サバ Umberto Saba、イタロ・

<sup>51</sup> Österreichisches statistisches Handbuch, Wien: k. k. Statistischen Central-Comission, 1911, S. 204. 隻数・総トン数とも非貿易船を含む。

<sup>52</sup> 佐々木洋子『ハプスブルク帝国の鉄道と汽船：19 世紀の鉄道建設と河川・海運航行』刀水書房、2013。

<sup>53</sup> それ故に市の周辺部の住民の多くはスロヴェニア系であった。ただしスロヴェニア語話者全体で見れば、第一次産業就業者は少数派である。

<sup>54</sup> Berufsstatistik nach den Ergebnissen der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den im Reichsrat vertretenen Königreichen und Ländern, 6 Heft des dritten Bandes der Volkszählungsergebnisse Küstenland und Dalmatien, Wien: Bureau der k. k. Statistische Zentralkommission, 1915, S. 114 より作成。オーストリアの国勢調査における就業状態は、A：農業・林業並びにそれに類する職業、B：工業、C 商業（飲食店業、旅館業、居酒屋業を含む）、D：公務員、自由業、その他（無職、年金生活者）と 4 種類に区別されていた（Berufsstatistik nach den Ergebnissen der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den in Österreich, 3/1. Hauptübersicht und Besprechung der Ergebnisse, Wien: Bureau der k. k. Statistischen Zentralkommission, 1916, S. 10）。即ち現代的な産業分類でいえば A が第一次産業、B が第二次産業、C が第三次産業に相当する。

ズヴェーヴォ Italo Svevo といった著名な作家が活躍したのも帝政末期のトリエステである。また現在に至るまで「ウィーン風」としてよく知られているトリエステのカフェ文化は18世紀に始まり、市内中心部に位置する現在のイタリア統一広場 Piazza Unità d'Italia 付近のカッフェ・デッリ・スペッキ Caffè degli Specchi やカッフェ・トンマーゼオ Caffè Tommaseo のような著名なカフェはしばしば政治運動や文化運動の拠点となっていた。また上述のように当時のトリエステは知事府を擁し、政治的にも地域の中心都市であった。こうした位置づけと18世紀以来の自由港としての伝統は各地から多様な人々の集まる要因となっていた<sup>55</sup>。

このような状況のトリエステが、「様々な地域から流入する人々を受け入れる、コスモポリタンの都市として意識されていた」<sup>56</sup>と描写される一方で、トリエステはネーションの対立とも無縁ではなかった。それはトリエステのイタリア系住民とスロヴェニア系住民の権利を巡る衝突に端的に現れている。

19世紀以来、特に1848年革命以降、ハプスブルク君主国内各地における非ドイツ系ネーションの自治拡大要求は高まりを見せた。トリエステにおいても、19世紀後半以降、スロヴェニア語の行政と学校における使用を求める運動が積極的に行われた。こうした動きはトリエステやスロヴェニア系住民に限定されてはならず、例えばチェコ（狭義のチェコ、「ベーメン」を指す）ではターフェ首相 Eduard Taaffe (1833-1895)時代の1880年、内務省と司法省が、チェコに置かれているそれぞれの関係機関に対し、使用言語を内部で使用される言語（内務語）と、地域住民の応対で使用される言語（外務語）に区分し、外務語に関してはドイツ語とチェコ語を平等に取り扱うことを規定する通達を出していた（ターフェ言語令）。

権利拡大を求める動きの拠点の一つは新聞であった。イヴァン・ピアーノ Ivan Piano がトリエステで創刊したスロヴェニア語新聞である『イリルスキ・プリモリヤン』 *Ilirski Primorjan* (1866<sup>57</sup>)、『プリモレツ』 *Primorec* (1867-1869)、『スロヴェンスキ・プリモレツ』 *Slovenski Primorec* (1868)や、ガシュペル・ヘンリク・マルテラネツ Gašper

---

<sup>55</sup> Marina Cattaruzza, Die Migration nach Triest von der Mitte des 19. Jahrhunderts bis zum Ersten Weltkrieg, in: Glatz, Ferenc; Melville, Ralph (Hg.), *Gesellschaft, Politik und Verwaltung in der Habsburgermonarchie 1830-1918*, Stuttgart 1987, 273-304 (299-301).

<sup>56</sup> 佐々木洋子「トリエステにおける『共存』」、43頁。

<sup>57</sup> 以下括弧内は発行されていた期間を示す。

Henrik Martelanec による『ヤドランスコ・ザリヨ』 *Jadransko zarjo* (1869-1870)、そして政治協会エディノスト Edinost<sup>58</sup>が発行していた同名の機関紙『エディノスト』 *Edinost* (1876-1928) といった新聞各紙は、揃ってトリエステにおけるスロヴェニア系住民の行政と教育の場における権利の拡大を主張していた<sup>59</sup>。それはトリエステのイタリア系住民の権利・要求と衝突するものに他ならなかった。同時期のイタリア系住民が発行していたトリエステのイタリア語新聞を見ると、最も影響力のあった『チッタディーノ』 *Il Cittadino* (1866-1893) をはじめに、『プログレッソ』 *Il progresso* (1871-1873)、『ヌオヴォ・テルジェステオ』 *Il nuovo tergesteo*<sup>60</sup> (1876-1877)、『インディペンデンテ』 *L'Indipendente* (1877-1922) といった新聞が発行されていた。これらの新聞はスロヴェニア語各紙よりも早くから定期的に発行されていたため、優位な立場にあった<sup>61</sup>。

トリエステで発行されていたスロヴェニア語の新聞がいずれも短命に終わる中で、『エディノスト』は唯一長期間発行された新聞であり、スロヴェニア系住民のナショナルな言論の拠点であった。1876年1月8日付の初号では、創刊の目的が次のように示されている。

スラヴ人、就中スロヴェニア人にとってトリエステが極めて重要であり、トリエステとその周辺に居住するスラヴ人が苦境に立たされていることは、同市にスロヴェニア語の新聞を創刊することが絶対的に必要たらしめている。これを鑑み政治協会エディノストは以下の趣旨に則った新聞を創刊することを決定した。

- a) 同じ意図を持った社会の眼差しの前で、完全な独立性を有すること。
- b) 自由の気風を尊重するが、自由主義的ではないこと。その自由の気風は公正で誠実な水準までのものであること。
- c) 平和を愛し、家庭の不和ではなく統一と調和を奨励するものであること。地に平和を、人に善良な意志を。
- d) 民族的であり、スロヴェニア民族への外敵の攻撃に対しては断固立ち向かうこと。

---

<sup>58</sup> スロヴェニア語で「統一」の意。

<sup>59</sup> Čok, Slovensko-italijanski in hrvaško-italijanski odnosi preko poročanja tržaških časopisov 1866-1882, str. 192.

<sup>60</sup> Tergeste はトリエステの古代における名称である。

<sup>61</sup> Čok, Slovensko-italijanski in hrvaško-italijanski odnosi preko poročanja tržaških časopisov 1866-1882, str. 192.

なんとなれば我々の言葉に学校や文書や公的機関における権利を与え、憲法に定められた決定と本質を持つものとするためである。

- e) 我々が民族のため、スロヴェニア愛郷主義を築き、教え、鼓舞し、高めること。
- f) 宗教的事項については取り扱わないこと。ただし読者諸兄が平静で明確な良心を持ち、自己の良心と他者全てを最大限尊重することを望む。

以上が本誌の綱領である。善良なる目的に成功と幸福の有らんことを<sup>62</sup>。

この「以下の要旨」のうち、「d) 民族的であり、スロヴェニア民族への外敵の攻撃に対しては断固立ち向かうこと。なんとなれば我々の言葉に学校や文書や公的機関における権利を与え、憲法に定められた決定と本質を持つものとするためである」と「e) 我々が民族のため、スロヴェニア愛郷主義を築き、教え、鼓舞し、高めること」の二つは特にこの新聞の方向性を特徴づけるものである。d) にいう「憲法」は序論で扱った「国民の一般的権利に関する国家基本法」第 19 条を指すと考えられ、こうしたスロヴェニア系住民の自治拡大要求は、トリエステに（更にイストリア半島やダルマチアといったアドリア海沿岸地方に）長らく居住してきた多数のイタリア系住民の要求と競合・衝突するものであった。

この状況下で言語的対立を更に複雑にしたのは、1880 年から 10 年毎に 4 回実施された国勢調査の際に実施された日常語調査である。

ハプスブルク君主国における初の国勢調査<sup>63</sup>は人口把握による税の増収を目的にマリア・テレジア時代に行われ（1754 年）、その後いくつかの調査を経て一世紀が経過した 1857 年の全国国勢調査が初めての近代的国勢調査として知られている<sup>64</sup>。ボジェナ・ヴラニエシュ・シヨラン Božena Vranješ-Šoljan によれば、この時の調査は方法論、概念、調査法に多数の問題があり、調査結果は信憑性に欠けるものであったが、蓄積されたノウハウはその後

---

<sup>62</sup> *Edinost*, 08/01/1876.

<sup>63</sup> 史上初の人口に関する国勢調査は 1749 年にスウェーデンで行われた。近代的手法の開発にはその後約一世紀を要し、統計学の発展に多大な貢献を成したアドルフ・ケトラー Lambert Adolphe Jacques Quételet (1796-1874) が主導してベルギーで 1846 年に行われた国勢調査が初めての近代的国勢調査とみなされている。

<sup>64</sup> Božena Vranješ-Šoljan, Prvi opći popis stanovništva u Habsburškoj Monarhiji iz 1857.: Konceptija, metodologija i klasifikacija popisnih obilježja, in: *Časopis za suvremenu povijest*, Vol. 40 No. 2, Listopad 2008, str. 520.

の統計調査で活用され、特に 1880 年からの全国国勢調査で結実することとなった<sup>65</sup>。ハプスブルク君主国の統計学を大きく前進させたのは官僚カール・チェルニツヒ Karl von Czoernig-Czernhausen (1804-1889) であり、1857 年には国勢調査だけでなくウィーンで開催された第三回国際統計会議でも大きな存在感を示し、1863 年には統計中央委員会 Statistische Zentralkommission の委員長となり、オーストリアの統計学の向上に邁進した<sup>66</sup>。これらの経験を踏まえ、オーストリア政府は 1880 年からハプスブルク君主国の崩壊まで 10 年毎に国勢調査を実施した。その一環として日常語 Umgangssprache 調査が実施された。政府は地域住民の言語を調査することで、信頼に足る国内ネーション分布図を作成しようと試みたのであるが<sup>67</sup>、その根拠の一つには全国小学校法がある。これと国家基本法第 19 条第 3 項に基づき、ハプスブルク君主国政府はネーション帰属を調査するための指標として言語調査を導入する必要があったのである<sup>68</sup>。

単一言語話者が多数派ではなかったハプスブルク君主国において、一体「何語」を調査するのかというのは大きな問題であった。というのも、多言語状況にあるということは、一つの言語を排他的にもちいる集団が複数並存していることを意味するわけではない。複数の言語を使用できる人々は、例えば職業や所属するコミュニティの要請に応じて、家庭内とは異なる言語を用いる可能性もある。あるいは親の出身地や婚姻の状況によっては、親から受け継ぐ「母語」と家庭内でもっぱら用いる言語が異なることもあり得た。したがって、国政調査に際しては母語 Muttersprache、家庭語 Haussprache、そして日常語 Umgangssprache のいずれを調査するのかがまず俎上に載せられ、そして議論の結果日常語が調査されることとなった。この調査に際して、住民は日常的に複数の「日常語」を使用していたとしても、無制限に自らの使用する「日常語」を回答できたわけではない。国勢調査の布告には日常語について以下のように規定されていた。

---

<sup>65</sup> Vranješ-Šoljan, Prvi opći popis stanovništva u Habsburškoj Monarhiji iz 1857, 2008.

<sup>66</sup> Nico Randeraad, *States and statistics in the nineteenth century: Europe by numbers*. Manchester and New York: Manchester University Press, 2010, pp. 60-79.

<sup>67</sup> Brix, *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation*, S. 14.

<sup>68</sup> 大津留厚『ハプスブルクの実験』、38-39 頁。無論こうした見方はネーションを考える上での一つの見方であって、当時のハプスブルクの人々が押し並べてネーション＝言語と考えていたというわけではない。

この項目はウィーンの国会に代表を送る諸王国並びに諸領邦に所属する者のみが回答するものである。各個人が日常生活で使用している言語が日常語であり、日常語は次に挙げる言語のうちただ一つのみ回答可能である。即ち、ドイツ語、チェコ・モラヴィア・スロヴァキア語、ポーランド語、ルテニア語、スロヴェニア語、セルビア・クロアチア語、イタリア・ラディン語、ルーマニア語、マジャール語<sup>69</sup>。

この調査の結果は、ハプスブルク君主国がいかに多言語世界であったのかを如実に示している（表 1-2-1、1-2-2 参照）。

表 1-2-1：オーストリアにおける日常語話者数（1880年-1910年、10年毎）<sup>70</sup>

日常語	1880年		1890年		1900年		1910年	
ドイツ語	8,008,864	36.75%	8,461,580	36.05%	9,170,939	35.78%	9,950,266	35.58%
チェコ語	5,180,908	23.77%	5,472,871	23.36%	5,955,397	23.23%	6,435,983	23.02%
ポーランド語	3,238,534	14.86%	3,719,232	15.84%	4,259,152	16.62%	4,967,984	17.77%
ルテニア語	2,792,667	12.81%	3,105,221	13.23%	3,375,576	13.17%	3,518,854	12.58%
スロヴェニア語	1,140,304	5.23%	1,176,672	5.01%	1,192,780	4.65%	1,252,940	4.48%
セルビア・クロアチア語	563,615	2.59%	644,926	2.75%	711,380	2.78%	783,334	2.80%
イタリア語	668,653	3.07%	675,305	2.88%	727,102	2.84%	768,422	2.75%
ルーマニア語	190,799	0.88%	209,110	0.89%	230,963	0.90%	275,115	0.98%
マジャール語	9,887	0.05%	8,139	0.03%	9,516	0.04%	10,974	0.04%
総計	21,794,231		23,473,056		25,632,805		27,963,872	

表 1-2-2：トリエステにおける日常語話者数（1880年-1910年、10年毎）<sup>71</sup>

日常語	1880年		1890年		1900年		1910年	
ドイツ語	5,141	4.27%	7,107	5.25%	8,880	5.88%	11,856	6.21%
チェコ語	92	0.08%	106	0.08%	145	0.10%	565	0.29%
ポーランド語	6	0.00%	24	0.02%	26	0.02%	157	0.08%
ルテニア語	-	-	5	0.00%	3	0.00%	33	0.02%
スロヴェニア語	26,263	21.79%	27,725	20.47%	24,679	16.34%	56,916	29.81%
セルビア・クロアチア語	126	0.10%	404	0.30%	451	0.30%	2,403	1.26%
イタリア語	88,887	73.76%	100,039	73.88%	116,825	77.36%	118,959	62.31%
ルーマニア語	-	-	5	0.00%	1	0.00%	11	0.01%
マジャール語	-	-	-	-	-	-	13	0.01%
総計	120,515		135,415		151,010		190,913	

<sup>69</sup> Verordnung des Ministeriums des Innen vom 6. 8. 1880. RGBl. Nr. 103/1880. 下線は筆者による。

<sup>70</sup> Brix, *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation*, S. 43. チェコ語にはモラヴィア語（現在のチェコ東部のモラヴィア地域の言語）とスロヴァキア語が含まれ、イタリア語にはラディン語（現在のイタリア北東部のドロミティ地方の言語）が含まれている。なおこの調査はオーストリアのみを対象に実施されたものであり、ハンガリーは含まれていない。マジャール語話者が極端に少なく見えるのはこのためである。

<sup>71</sup> Brix, *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation*, S. 442.

1880年から1910年にかけてのトリエステの日常語話者数は、イタリア語話者が約60-70%、スロヴェニア語話者が20-30%、ドイツ語話者が約6%といった内訳であり、オーストリア全体の様相とは異なった多言語空間であったことがわかる（表1-2-1、表1-2-2参照）。この他セルビア・クロアチア語、チェコ語、そして遥かに数は少ないもののポーランド語、ルーマニア語の話者も居住していたことが看取できる。しかし実際の言語状況はこれよりも複雑であった。当時のトリエステにはギリシャ系住民やユダヤ系住民も居住していたのだが、「日常語」として回答できる言語にギリシャ語やイディッシュ語は含まれていなかったからである。上述の日常語の定義通り、同調査では表中の言語からただ一つを選択して回答しなければならなかった。それゆえ仮に他の言語を日常語としていた場合は他のいずれかの言語を選択せねばならなかったのである。

ブリックスはこの調査に際してトリエステでイタリア系住民とスロヴェニア系住民の間で多くの衝突があったことを指摘している<sup>72</sup>。例えばスロヴェニア語で記入された調査用紙の受取が拒否や、スロヴェニア語版調査用紙の配布の拒否の他、回収後に調査用紙の記入内容の改竄や集計時の意図的な歪曲といった事例が見られた。1900年の調査に際してはトリエステ市当局 Magistrat が統計調査委員会にイタリア系のみを招集し、スロヴェニア語版調査用紙の配布を一時拒否するといった事態にまで発展した。しかしこの年の調査結果でスロヴェニア語話者数が1890年度調査よりも3000人以上減少していることは、他の年度の調査結果と比較しても明らかな改竄があったことを窺わせている。こうした状況の中1901年には知事 Leopold Graf von Goëss が知事府と内務省に調査の正当性を質している。これはイタリア系を優遇する市当局（イタリア系が多数派）に対し、公正を図る知事府とイタリア系が過度に優勢になることを危惧するウィーンの中央政府の姿勢の現れとも考えられる。もちろんイタリア系住民の圧迫に対してスロヴェニア系住民側がただ傍観していたわけではなく、例えば上述のスロヴェニア語版調査要旨配布拒否事件はスロヴェニア系政治紙 Edinost の働きで撤回された。君主国議会 Reichsrat のスロヴェニア系議員は、ナショナルリティ Nationalität あるいは母語の調査を求めるチェコ系議員の提案に応じた<sup>73</sup>。結局この要求は実現しなかったが、仮に母語が調査されていた場合、日常語を調査した場合と比べてスロヴェニア語やチェコ語といった非支配的立場にあった言語が日常語調査時よりも多く算出され

---

<sup>72</sup> 以下この日常語調査全体、他の地域での実施状況と結果については Brix, *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation* を参照。

<sup>73</sup> Brix, *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation*, S. 191.

ていたと考えられる。以上のように各回の言語調査には、イタリア系住民とスロヴェニア系住民の軋轢を生み、ナショナルな感情を刺激していった面があった。日常的にイタリア系とスロヴェニア系の住民が衝突する事態にはなっていなかったものの、帝政末期のトリエステでは旧来の調和が綻びを見せ、ネーションの分極化が進んだ面があったのは確かと考えられる。

## 第二節 媒介言語としてのトリエステ方言

帝政末期のトリエステには第一節で述べたような言語的対立の側面があった。しかしそうした語りだけで当時のトリエステの言語状況を語ることはできない。帝政末期トリエステで多数派を占めていたのはイタリア系住民であり、そのためトリエステの日常的なコミュニケーションにおけるリンガ・フランカはトリエステ方言／イタリア語であった。このトリエステ方言によって、多様な背景を持つ人々の間にある種融和的なコミュニケーションが成立していた面もあったのは先行研究の述べるところである<sup>74</sup>。トリエステ生まれの作家アルベルト・スパイーニ Alberto Spaini (1892-1975) は著書『トリエステ人の自画像』 *Autoritratto triestino* で往時のトリエステの言語状況を次のように描写している。

トリエステにはギリシャ人、アルメニア人、トルコ人がいた。シチリア人、マルタ人、ドイツ人、スラヴ人、ハンガリー人がいた（スラヴ人というときにはスロヴェニア人とクロアチア人、そして全く異なる、遠くボヘミアから来たチェコ人の区別をつけねばならなかった）。シチリア人だけでなく、あらゆる地域のイタリア人がいた。イギリス人とエジプト人がいた。誰であろうと、この文章を読むだけでも、東方の街のスーク Suk<sup>75</sup>のように、トリエステでは 20 の言語が飛び交い、そこは音のカペルナウムでありバベルの塔であり、古代とは反対に、数千の異なることばで互いに素晴

---

<sup>74</sup> Marina Cattaruzza, Nationalitätenkonflikte in Triest im Rahmen der Nationalitätenfrage in der Habsburgermonarchie 1850-1914, 1988; Claudio Minca, 'Trieste Nazione' and its geographies of absence, 2009.

<sup>75</sup> スーク سوق。アラビア語で市場の意。

らしくよく理解し合っていたことを思い出す。いやこれは全く事実ではない。みなが  
みな話していたのは、トリエステ語 triestino だったのである<sup>76</sup>。

このスパイニーの描写はリエンツォ・ペッレグリーニ Rienzo Pellegrini が指摘するように  
「神話的オーラ」をまもってはいるものの概ね客観的事実に即しているものであり<sup>77</sup>、ハプ  
スブルク君主国時代のトリエステの姿の一端を伝えている。多様な人々が集う中で様々な言  
語の影響を受けたことばが生まれ、そのことば＝トリエステ方言は多様な背景を持つ人々を  
媒介していた。ではトリエステ方言とは具体的にどのようなことばだったのだろうか。

歴史学の分野ではトリエステ方言という名称こそ登場するものの、その実際の様相につい  
てはほとんど語られていない。しかし言語学の分野では多くの研究の蓄積がなされている。  
例えばマリオ・ドーリア Mario Doria はトリエステ方言の歴史研究を行うとともに辞書を編  
纂し<sup>78</sup>、その成果は後のトリエステ方言研究に活用されている。これに依拠したヴェスナ・  
デジェリン Vesna Deželjin の研究は文学作品におけるトリエステ方言への他言語の影響に  
ついて分析したもので、国内・国外から様々な言語を話す人々が集まっていたトリエステの  
位置付けが、ドイツ語、スロヴェニア語、クロアチア語、イタロ＝ルーマニア語、ラテン  
語、ハンガリー語、更には英語、フランス語、アラビア語からの借用語を含んだ独自の言語  
を創出していたことを明らかにしている<sup>79</sup>。歴史的にはハプスブルク君主国の一部であった  
ことから国内で使用される言語であるドイツ語とハンガリー語が流入した<sup>80</sup>。英語、フラン  
ス語、アラビア語の語彙が入ってきたのは広範囲に渡る貿易の結果である。またスロヴェニ  
ア語の言語境界地域に位置することから、スロヴェニア語の語彙が多く流入した<sup>81</sup>。

「方言」と「独立した言語」の線引きは難しい問題であるが、ルイ＝ジャン・カルヴェ  
Louis-Jean Calvet が述べるところによれば、方言と独立した言語の差異は言語学的なもの

---

<sup>76</sup> Alberto Spaini, *Autoritratto triestino*. Milano: Giordano, 1963, pag. 29.

<sup>77</sup> Rienzo Pellegrini, Per un profilo linguistico, in: *Storia economica e sociale di Trieste*, pag. 293.

<sup>78</sup> Mario Doria, *Storia del dialetto triestino, con una raccolta di 170 testi*. Trieste: Italo Svevo, 1978; Mario Doria, *Grande dizionario del dialetto triestino: storico, etimologico, fraseologico*. Trieste: Il Meridiano, 1987.

<sup>79</sup> Vesna Deželjin, Reflexes of the Habsburg empire multilingualism in some Triestine literary texts, in: *Jezikoslovlje*, 13, 2, Studeni 2012, str. 419-437.

<sup>80</sup> これらの言語は皇帝家や軍事関連の語彙に多く見られる。

<sup>81</sup> スロヴェニア語とクロアチア語は極めて近縁であるため、いずれの由来なのかを特定するのが難しい語もある。Deželjin, Reflexes of the Habsburg empire multilingualism, str. 429.

ではなくそのことばの持つ権力の差でしかない<sup>82</sup>。本稿では日常語調査時における表記、即ち日常語調査のイタリア語の項目にラディン語が含まれていた一方で「トリエステ語」についての表記はなかったこと、またマリオ・ドーリアとジャンニ・ピングエンティーニ Gianni Pinguentini が編纂した辞書<sup>83</sup>が二冊とも『トリエステ方言辞典』*Dizionario del dialetto triestino* と名付けられていることから、「トリエステ方言」で表記する。ドーリアによればトリエステ方言自体にも「純粹トリエステ方言」*triestino patocco* と「強調トリエステ方言」*triestino negron*、そしてその中間といった変種があった<sup>84</sup>とされているが、こうして言語を分け、命名する試みは恣意性を免れないことも指摘しておきたい。

トリエステ方言が標準イタリア語とは大きく異なる言語であることは、例えば 1964 年にリノ・カルピンテル Lino Carpinter とマリアーノ・ファラグナ Mariano Faraguna が出版した『セルビディオラ』*Serbidiòla* に見ることができる。

表 1-3：トリエステ方言と標準イタリア語の差異

【トリエステ方言】	【標準イタリア語】
El Carso xe cambiato e anche a Basovizza no xe gnanca un osmizza: in osteria co' vado xe flipper a manizza, con campanele, suste e babe che se impizza co' le bale va giuste. <sup>85</sup>	Il Carso è cambiato Ed anche a Basovizza non c'è più un'osmizza: Quando vado in osteria Vedo flipper a maniglia con campanelli, molle e signore che si scatenano Quando vanno dentro le palle. <sup>86</sup>

<sup>82</sup> ルイ＝ジャン・カルヴェ『言語学と植民地主義』砂野幸稔（訳）、三元社、2006、66-67頁。

<sup>83</sup> Doria, *Grande dizionario del dialetto triestino*, 1987; Gianni Pinguentini, *Nuovo dizionario del dialetto triestino: storico etimologico fraseologico*. Bologna: Cappelli, 1969.

<sup>84</sup> Doria, *Storia del dialetto triestino, con una raccolta di 170 testi*, pag. 104-107.

<sup>85</sup> Lino Carpinter, Mariano Faraguna, *Serbidiòla*. Trieste: La Cittadella, 1977, pag. 71. カルストは変わり／バソヴィツァにも最早オスミツァはない／オステリアへ行けば／目にするのはフリッパーと鐘とバネと／ボールが落ちると逆上する紳士（バソヴィツァはトリエステ近郊の地名、オスミツァはスロヴェニア語に由来するワイン居酒屋でありオーストリアのホイリゲに相当する。この単語は現在のトリエステでも日常的に使用されている。なおオステリアはイタリアでごく一般に見られる居酒屋風の店を指す。

<sup>86</sup> Gruppo di Ricerca sulle Biblioteche Scolastiche, *Il grillo in biblioteca*. Università degli Studi di Padova, Giugno, 2003 を改変。

同書はハプスブルク君主国瓦解後 46 年を経て、ハプスブルク統治時代を回顧してトリエステ方言で執筆された韻文であり、韻文体で書かれている以上、実際の話し言葉とは多少の差があるものとはいえ、標準イタリア語との差異は明白であろう。題名の *Serbidiòla* とは皇帝賛歌「神よ、皇帝フランツを守り給え」*Gott erhalte Franz den Kaiser* のイタリア語版である「オーストリア国民賛歌」*Inno popolare austriaco* の歌い出し **Serbi Dio l'Austriaco Regno, Guardi il nostro Imperator!**<sup>87</sup>（神よ、オーストリア帝国を守り給え、我らが皇帝を守り給え！）から取られたもので、ハプスブルク君主国統治時代との連関を象徴する名称である<sup>88</sup>。このようにトリエステ方言で韻文を書く試みは『セルビディオラ』が嚆矢というわけではない。例えばジュリオ・ピアッツァ Giulio Piazza は 1920 年に様々な人物のトリエステ方言による詩を収集して詩集『トリエステ方言詩集』*Trieste vernacola* を出版している。同書冒頭でピアッツァは「トリエステ方言による韻文には伝統があるわけではない」と書いているが<sup>89</sup>、同書における最古の作品は『セルビディオラ』より 100 年以上前の 1812 年のロレンツォ・ミニウッシ Lorenzo Miniussi による作品である。

トリエステ方言にはいわゆる標準イタリア語とは形態論的、語彙論的に明確な差異がある。それはトリエステの独自の歴史と環境でなければ生まれなかった言語である。言語にはその言語の話者を結束させ他の言語集団を遠ざける「群居機能」と、異なる言語集団間の橋渡しとなる「媒介機能」が存在する<sup>90</sup>。この媒介機能という視点に立ったとき、トリエステ方言はドイツ語でもスロヴェニア語でも、最も近いイタリア語でもない混成言語として日常生活におけるトリエステ住民の非公式なコミュニケーションを媒介していたといえる。

## 第一章 小括

古代に起源を持つトリエステは、14 世紀以降第一次世界大戦終結までハプスブルク君主国の領地であった。19 世紀以降、特に言語調査や公的機関での言語の扱いの問題を巡ってイタリア系とスロヴェニア系住民の対立が悪化し、帝政末期はトリエステの自由港としての性格がもたらした「コスモポリタンの」調和が綻びを見せた時代であった。一方、ドイツ語でも

<sup>87</sup> Carpinter; Faraguna, *Serbidiòla*, pag. 145.

<sup>88</sup> なおこの国歌には君主国内の他の主要言語の歌詞もそれぞれ用意されていた。

<sup>89</sup> *Trieste vernacola: antologia della poesia dialettale triestina*, a cura di Giulio Piazza, Milano: Casa Editrice Risorgimento, R. Caddeo & C, 1920, pag. V.

<sup>90</sup> ルイ＝ジャン・カルヴェ 『言語戦争と言語政策』砂野幸稔他（訳）、三元社、2010、86-102 頁。

スロヴェニア語でもイタリア語でもない混成言語であるトリエステ方言を「媒介言語」に多様な背景を持つ人々の間に融和的なコミュニケーションが成立していたというのも、当時のトリエステの言語状況の一端を捉えた見方である。

## 第二章 トリエステ国立ギムナジウムの基本的性格と生徒

生徒の言語的背景と言語教育から見た場合、トリエステ国立ギムナジウムの特徴・傾向とは何であろうか。それは他の中等教育機関と比較してどう評価されるだろうか。どのような背景を持つ生徒が通っていたのだろうか。生徒の背景は言語教育とどう関係したのだろうか。様々な背景を持つ生徒が学校内で交流を持つ可能性はあったのだろうか。本章ではこれらの問題を扱う。なお国立ギムナジウムの学年歴は秋に始まり、翌年春／夏に終わっていた。そのため本稿中で例えば「1910/1911 年度」は「1910 年に始まり 1911 年に終了した学年」を指す。

### 第一節 言語面から見るトリエステ国立ギムナジウムの全体的特徴

ハプスブルク君主国の存在していた時代、ドイツ系住民は現在の中東欧の広範囲に渡って居住していた。この各地に存在した「言語島」Enclave の一つがトリエステである。トリエステのドイツ語話者は拡大の一途を辿った。その背景にはハプスブルク君主国内各地からのドイツ系移民の存在があった<sup>91</sup>。トリエステというイタリア語／トリエステ方言を中心的媒介言語とする多言語社会にあって、トリエステ国立ギムナジウムはトリエステ全体とはまた違ったかたちの多言語空間であった。ここでの媒介言語はドイツ語であり、ドイツ語母語話者と非ドイツ語母語話者たちがドイツ語とともに学ぶ場であった。

トリエステ国立ギムナジウムが正式に設立されたのは 1842 年である。その起源は 17 世紀のイエズス会学校に遡る。本稿が対象とする帝政末期、同校は市中心部からほど近い、港近くのリプシア広場 Piazza Lipsia にあった。リプシアはイタリア語でライプツィヒの意であり、ライプツィヒの戦い（1813 年）での連合軍側の勝利を記念して名付けられていた。

他の欧州諸国同様近世までは宗派が教育の主たる担い手であったハプスブルク君主国において、中等教育が国家によって近代化されたのは 1849 年のことである。この背景には 1848 年革命と、そこで求められた「オーストリアにおける諸民族の平等」という理念がある。教育相レオポルト・トゥーン伯 Leopold Graf von Thun und Hohenstein (1811-1888) の時代に教育省参事官であった大学教授フランツ・エクスナー Franz Serafin Exner

---

<sup>91</sup> Attilio Frühbauer, *Cenni sommari sul censimento della popolazione a Trieste al 31 dicembre 1900. Studio di demografia statica*. Trieste: Municipio di Trieste, 1903, pag. 91-92.

(1802-1853) とプロイセンのギムナジウム教授であり 1849 年にウィーン大学教授に招聘されたヘルマン・ボニツ Hermann Bonitz (1814-1888) 他数人の専門家によって「オーストリアにおけるギムナジウム並びに実科学学校の改革構想」*Entwurf der Organisation der Gymnasien und Realschulen in Oesterreich* が作成され、皇帝の目通しを経て同案は 1849 年 9 月 15 日に承認された<sup>92</sup>。

新しいカリキュラムでは必修科目として「言語・歴史科目」（宗教、ラテン語、ギリシャ語、母語、地理、歴史）と「数学・自然科学科目」（数学、博物学<sup>93</sup>、物理学）の二分野による一般教養教育が目指され、その他に「自由科目」として「身体の鍛錬を目的とする諸科目（カリグラフィ、美術、歌唱、体育）」と近代外国語 *moderne Fremdsprache*（「英語、フランス語など」）が教授されることが定められた<sup>94</sup>。後述するトリエステ国立ギムナジウムの 1910 年度の授業科目はほとんどこれと変わっていない。

比較として 1895 年のイギリスのパブリック・スクール、1892 年のドイツのギムナジウム、1890 年のフランスのリセを見てみると、その授業科目は、パブリック・スクールで聖書、ラテン語、ギリシャ語、英語、歴史、数学、フランス語、科学<sup>95</sup>、ギムナジウムで宗教、ラテン語、ギリシャ語、フランス語、地理・歴史、算術・数学、地学、物理・化学基礎・鉱物学、綴り方、図画<sup>96</sup>、リセでラテン語、ギリシャ語、フランス語、近代語、歴史・地理、自然科学、図画、哲学<sup>97</sup>となっており、各国とも大差はない。ただしハプスブルク君主国の授業科目のうち、近代外国語（「英語・フランス語など」）については、イギリスやドイツのギムナジウムでは通常フランス語が必修科目扱いであったのに対し、本稿で扱うハプスブルク君主国内のギムナジウムでは全て自由科目扱いである。国内に多数の言語集団を抱えるハプスブルク君主国では、ドイツ語に加えて当該地域で一般に使用される言語を授業科目に算入すると、フランス語や英語に割く時間的余裕がなかったためと考えられる。

---

<sup>92</sup> Engelbrecht, *Geschichte des österreichischen Bildungswesens*, IV, S. 147.

<sup>93</sup> 博物学 *Naturgeschichte* は自然史ともいい、動物学、植物学、鉱物学を中心に、更に古生物学や地学といった諸学問に跨る学問である。

<sup>94</sup> Engelbrecht, *Geschichte des österreichischen Bildungswesens*, IV, S. 148.

<sup>95</sup> 藤井泰「近代イギリスの教育システム——パブリック・スクールからオックスブリッジへの学歴経路」橋本伸也他『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001、31 頁。

<sup>96</sup> 進藤修一「近代ドイツのエリート教育——『エリート』をめぐる教育改革の 100 年」橋本伸也他『エリート教育』、123 頁。

<sup>97</sup> 渡辺和行「近代フランス中等教育におけるエリートの養成——リセについて」橋本伸也他『エリート教育』、93 頁。

本稿が対象とする 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてトリエステに設置されていた主たる中等教育機関としては以下の学校が挙げられる。まずイタリア語<sup>98</sup>が教授語の学校として、トリエステ市立上級ギムナジウム *Ginnasio Superiore Comunale di Trieste*、トリエステ市立上級実科学学校 *Civica Scuola Reale Superiore di Trieste*、トリエステ市立女学校 *Civico Liceo Femminile di Trieste*、トリエステ国立商業航海学校 *I. R. Accademia di Commercio e di Nautica in Trieste* がある<sup>99</sup>。

一方ドイツ語が教授語の学校としては、本稿の関心の中心であるトリエステ国立ギムナジウム *k. k. Staatsgymnasium in Triest*<sup>100</sup>の他に、トリエステ国立実科学学校 *k. k. Staats-Realschule in Triest* が置かれていた。これらの学校のうち、国立ギムナジウムと市立上級ギムナジウムは大学進学を主眼としたもので、一方の市立上級実科学学校、国立実科学学校、国立商業航海学校は主に就職を目指したもので、市立女学校は女子教育を担ったものであった。ギムナジウムはドイツ語圏に特徴的な中等教育機関であり、大学進学資格の獲得を主眼とするギムナジウムから大学を経て官僚、医師、大学教授、弁護士といった知的専門職への過程はエリートの歩んだ道の典型といえ、ギムナジウムのこうした性格については多くの先行研究の指摘するところである<sup>101</sup>。

このようにドイツ語とイタリア語にはそれぞれの言語を教授語とする中等教育機関が存在していた一方で、スロヴェニア語を主たる教授語とする国公立学校が市内になかったことは注目に値する。当時のトリエステのスロヴェニア語話者はドイツ語話者の約 5 倍、人口の 3 割を占めており、その需要は決して低くなかったからである。「ことばには、人をつなげると同時に人を排除する暴力的な側面も」<sup>102</sup>ある。この状況下では、スロヴェニア語話者のみならず他の非ドイツ語／イタリア語母語話者もトリエステで中等教育を受けようとするならばドイツ語またはイタリア語を習得しなければならなかった。更にハプスブルク君主国国内で大学進学や立身出世を望むのならば、好むと好まざるとにかかわらず、事実上ドイツ語の

---

<sup>98</sup> 以下「イタリア語」はいわゆる標準的なイタリア語を指す。

<sup>99</sup> これらの学校の概略に関しては Caporrella, *Strategie educative dei ceti medi italiani a Triestetra la fine del XIX sec. e il 1914*, pag. 13-60 を参照。

<sup>100</sup> 年度によっては *k. k. Staatsgymnasium zu Triest* と表記されている。

<sup>101</sup> 例えば望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史』ミネルヴァ書房、1998、マルグレット・クラウル『ドイツ・ギムナジウム 200 年史』望田幸男他（訳）ミネルヴァ書房、1986、進藤修一「近代ドイツのエリート教育——『エリート』をめぐる教育改革の 100 年」橋本伸也他『エリート教育』、111-144 頁。

<sup>102</sup> 安田敏朗『「多言語社会」という幻想』、231 頁。

習得が必須であった。つまりドイツ語を習得しなければ、完全ではないにしても社会的成功から遠ざかる可能性が高く、トリエステで大学進学を目指して国立の中等教育機関に進みたければドイツ語の習得が「強制」だったともいえる。同様にトリエステ方言による媒介も実際にはそれを解さない者の排除と表裏一体である。安田敏朗の指摘にあるように、ことばは「そのことばを話さない人を排除する装置にもなる」といえる<sup>103</sup>。

トリエステ国立ギムナジウムはドイツ語で授業を行う以上、十分なドイツ語力を持つことは入学に当たっての前提であった。1880/1881年度の入学規定は次のように定められていた。

本校第一学年に入学を希望する者は、両親乃至その他の親類の同伴のもと来校し、本年中に満10歳以上となる者であることを証明せねばならない。小学校 Volksschule 第4学年を修了した者については成績証明書を提出せねばならない。この他の者については例外なく試験を受験すること。この試験結果が入学可否判断に際し最重要に考慮される。試験ではドイツ語の読解力、作文力、文法基礎知識、一般的正書法の知識、句読法、そして書き取り力が審査される。これに加えて、小学校の四年間で習得可能と考えられる範囲での、全て無名数<sup>104</sup>の四則演算と宗教に関する知識が十分に獲得されているかが審査される。<sup>105</sup>

この規定を字義通り解釈すれば、小学校を出て成績証明書を提出すれば、試験を課されないことになる。1890/1891年度、1900/1901年度についてもこれと同様である<sup>106</sup>。しかし1910/1911年度になると以下のように変更されている。

ギムナジウムまたは実科ギムナジウムの第一学年への入学を希望する者は、1911年に満10歳以上となる者であるとともに、必要な入学試験を受験しなければならない。試験の内容は以下の通りである。

---

<sup>103</sup> 安田敏朗『「多言語社会」という幻想』、231頁。

<sup>104</sup> 単位のついていない数を指す。これに対し対義語の「名数」はkm、g、枚といった単位のついた数を指す。

<sup>105</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1880/1881, S. 123. 下線は筆者による。

<sup>106</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1890/1891, S. 55.

- a) 宗教：小学校 4 年間で獲得できると考えられる範囲の知識
- b) ドイツ語：形態論基礎、単文分析力、正書法規則の理解とその書き取りにおける正しい使用
- c) 計算：整数の四則演算

ドイツ語・計算の試験は口頭・筆記の両方で行われる。<sup>107</sup>

30 年間で隔てたこれらの規定を比較すると、1880/1881 年においては初等教育である小学校を出ていて十分なドイツ語力があれば基本的に無試験で入学が可能であったのに対し、1910/1911 年度には入学希望者全員に試験が課されていたことがわかる<sup>108</sup>。アウスグライヒ直後、1868/1869 年度に 181 名だったトリエステ国立ギムナジウムの在校生徒数は、1880/1881 年度に 291 名、1890/1891 年度に 449 名と年々増加の一途を辿り、そして 1910/1911 年度には 578 名と 42 年間で約 3 倍になっている。入学試験の義務化は生徒の増大を背景とするとともに、同校の高い人気を物語るものである。またトリエステ市立上級ギムナジウムの入学規定はトリエステ国立ギムナジウムの入学規定と類似しており、同じく宗教、計算、そして教授語であるイタリア語の試験が課されていた。

ではこうして入学した生徒は、具体的には何を学んでいたのだろうか。1910/1911 年度のトリエステ国立ギムナジウムの授業科目を見てみると、必修科目は宗教（カトリック、プロテスタント、ユダヤ）、ドイツ語、ラテン語、ギリシャ語、地理、歴史、数学、博物学、物理・化学、哲学入門と示されている<sup>109</sup>。イタリア語とスロヴェニア語は選択科目<sup>110</sup>、フランス語、速記、歌唱、美術、体育は自由科目<sup>111</sup>であった。イタリア語とスロヴェニア語を自由科目として学習することも可能であった（表 2-1 参照）。

---

<sup>107</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1910/1911, S. 73. 下線は筆者による。

<sup>108</sup> 入学希望者全員に試験が導入されたのは 1899/1900 年度からである。 *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1898/1899, S. 126.

<sup>109</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1910/1911, S. 34-39.

<sup>110</sup> 史料中では「条件付き必修」bedingt-obrigatorisch と表記されている。履修するかしないか自体は自由であるが、一旦履修を決定したらその年度は必修科目同様に出席が義務付けられ、成績の扱いも他の必修科目と同様になるものである。本稿では以後「選択科目」と表記する。

<sup>111</sup> 履修は全くの自由であり、選択科目と異なり出席の義務や成績に関して特記事項はない。

表 2-1 : 必修科目授業時間数 (トリエステ国立ギムナジウム、1911/1912 年度) <sup>112</sup>

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	7 年生	8 年生	合計
宗教	2	2	2	2	2	2	2	2	16
ラテン語	8	7	6	6	6	6	5	5	49
ギリシャ語	-	-	5	4	5	5	5	5	29
ドイツ語	4	4	3	3	3	3	3	3	26
イタリア語	4	3	3	2	2	2	2	2	20
スロヴェニア語	4	3	3	2	2	2	2	2	20
地理	2	2	2	2	1	1	-	-	10
歴史	-	2	2	2	3	4	3	4/3	20/19
数学	3	3	3	3	3	3	3	2	23
博物学	2	2	-	3	3	3	-	-	10
物理・化学	-	-	2		-	-	4	3/4	12/13
哲学入門	-	-	-	-	-	-	2	2	4
合計	31	30	32	27	28	29	29	28	224*

注① スラッシュで区切られた時間数は、前が前期の時間数、後ろが後期の時間数を示す。

注② 自由科目は除く。イタリア語とスロヴェニア語はいずれか一つの履修。

注③ 合計時間数はイタリア語とスロヴェニア語を片方分 (20 時間) のみ計上した。

注④ 1910/1911 年度には体育と美術が 1-2 年生で必修科目扱いであった。

この授業時間数が示すように、トリエステ国立ギムナジウムは古典語の学習が重視されたいわゆる古典的ギムナジウムである。配当時間数を見ると全学年を通じてラテン語の授業時間数は最大であり、ドイツ語のほぼ倍であった。古典ギリシャ語は 3 年生から授業が始まり、一貫してラテン語に次ぐか同数の授業時間数を配当されていた。ギムナジウムで 20 世紀に至るまで古典語教育に重点が置かれた背景には、かつての知識人の共通語としてのラテン語の伝統に加え、19 世紀以降も古典文化への造詣は知識人必須の教養であったことと、古典語の複雑な文法の習得が論理的思考の錬成に寄与するとされた考え方がある<sup>113</sup>。オーストリアでは日常的には話されない言葉となっけていても、近代語より重視されていたのである。

<sup>112</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1911/1912, S. 42.* なおここに示したのは 1911/1912 年度の時間数である。1910/1911 年度のトリエステ国立ギムナジウムの『年報』には、言語科目以外の授業時間数について明示的な記載はない。教員一覧の部にその教員の担当科目と担当クラス、週当たりの合計時間数は記されているものの、全クラス・全学年に跨った時間数であり、個々の学年で何時間の授業を行っていたのかの詳細は明らかでないためである。

<sup>113</sup> 若尾祐司、井上茂子 (編著) 『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房、2005、146 頁。

次に比較のため、トリエステ市立上級ギムナジウムの 1910/1911 年度の授業科目・授業時間数を示す（表 2-2 参照）。

表 2-2：授業時間数（トリエステ市立上級ギムナジウム、1910/1911 年度）<sup>114</sup>

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	7 年生	8 年生	合計
宗教	2	2	2	2	2	2	2	2	16
ラテン語	7	7	6	6	6	6	5	5	48
ギリシャ語	-	-	5	4	5	5	4	5	28
ドイツ語	3	3	3	3	3	3	3	3	24
イタリア語	5	4	3	3	3	3	3	3	27
スロヴェニア語	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地理	2	2	2	2	1	1	-	-	10
歴史	-	2	2	2	3	4	3	4/3	20/19
数学	3	3	3	3	3	3	3	2	23
博物学	2	2	-	-	3	2	-	-	9
物理・化学	-	-	2	3	-	-	4	3/4	12/13
哲学入門	-	-	-	-	-	-	2	2	4
美術	2	2	(2)	(2)	-	-	-	-	4(8)
習字	1	-	-	-	-	-	-	-	1
合計	27	27	28*	28*	29	29	29	29	226

注① スラッシュで区切られた時間数は、前が前期の時間数、後ろが後期の時間数を示す。

注② 自由科目は除く。3 年生と 4 年生の線画クラスは自由科目扱いである。それぞれの学年の合計時間数には計上していない。

近代語の扱いを除き、授業科目の面で 2 校に顕著な相違は見られないことがわかる。授業時間数でドイツ語は国立> 市立、イタリア語は市立> 国立であり、主要教授語に準じている。そしてスロヴェニア語は市立の方には設置されていない。上述のようにトリエステにはスロヴェニア語を主要教授語とする国公立中等教育機関がなかったのみならず、イタリア系の主要中等教育機関はいずれもスロヴェニア語の授業を設置していなかった（表 2-3 参照）。

<sup>114</sup> *Annuario del Civico Ginnasio Superiore di Trieste, 1910/1911, pag. 21.*

表 2-3 : 言語科目設置状況 (1910/1911 年度、トリエステ市内の中等教育機関) <sup>115</sup>

	国立	国立実科	市立上級	市立女子	市立上級実科
ドイツ語	必修	必修	必修	必修	必修
イタリア語	選択	選択	必修	必修	必修
スロヴェニア語	選択	-	-	-	-
フランス語	自由	選択	必修 <sup>116</sup>	必修	必修
英語	-	選択	-	-	-
ラテン語	必修	-	必修	-	-
ギリシャ語	必修	-	必修	-	-

注① 必修=必修科目、選択=選択科目、自由=自由選択科目、国立=トリエステ国立ギムナジウム、国立実科=トリエステ国立実科学校、市立上級=トリエステ市立上級ギムナジウム、市立女子=トリエステ市立女子学校、市立上級実科=トリエステ市立上級実科学校

注② 「必修」と「選択」は必修科目または選択科目として開講されている場合に加えて、自由科目としても開講されている場合も含む。「自由」は自由科目としてのみ開講されていることを指す。

このように言語科目の設置状況は、同じトリエステ市内であっても学校によって大きく異なっていた。大学進学を希望するスロヴェニア系の生徒が母語であるスロヴェニア語も中等教育機関で学びたければ、事実上選択肢からイタリア系の学校は排除され、国立ギムナジウムに絞られていたといえる。これは次節で見る各校の母語別生徒数と密接に関連していると考えられる。フランス語はトリエステ国立ギムナジウムでは自由科目扱いである一方、イタリア系3校全てでは重視されていた。詳しくは第三章で扱うが、国立ギムナジウムにおいては必修科目・選択科目と比較して自由科目は授業時間・授業内容が遥かに少なく、この区別の差の持つ意味は大きい。次に他の近隣ギムナジウムにおける言語科目設置状況を見る（表 2-4-1、2-4-2 参照）。

<sup>115</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1910/1911, S. 34-39; AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 776; *Annuario del Ginnasio Superiore Comunale di Trieste*, 1910/1911, pag. 22; *Programma annuale del Civico Liceo Femminile di Trieste*, 1910/1911, pag. 59; *Annuario della Civica Scuola Reale Superiore di Trieste*, 1910/1911, pag. 55; より作成。

<sup>116</sup> ただし全員ではなく一部のクラス。

表 2-4-1 : 言語科目設置状況 (1910/1911 年度、トリエステ市外のギムナジウム) <sup>117</sup>

	リュブ①	リュブ②	リュブ③	マリボル	ツェリエ	ノヴォ・メスト	コベル	プーラ
ドイツ語	必修	必修	必修	必修	必修	必修	必修	必修
イタリア語	自由	-	自由	-	-	-	必修	選択
スロヴェニア語	必修	必修	自由	必修	必修	必修	-	-
クロアチア語	-	-	-	-	-	-	自由	自由
フランス語	自由	-	-	自由	-	-	-	-
ラテン語	必修	必修	必修	必修	必修	必修	必修	必修
ギリシャ語	必修	必修	必修	必修	必修	必修	必修	必修

注 リュブ①=リュブリャーナ第一国立ギムナジウム、リュブ②=リュブリャーナ第二国立ギムナジウム、リュブ③リュブリャーナ国立ドイツギムナジウム、マリボル=マリボル国立ギムナジウム、ツェリエ=ツェリエ国立ギムナジウム、ノヴォ・メスト=ノヴォ・メスト国立ギムナジウム、コベル=コベル国立ギムナジウム、プーラ=プーラ国立ギムナジウム

表 2-4-2 : 話者数の上位 3 言語 (1910 年、2-4-1 の都市) <sup>118</sup>

都市	1	2	3
リュブリャーナ	スロヴェニア語 (98.70%)	ドイツ語 (0.60%)	-
マリボル	ドイツ語 (85.18%)	スロヴェニア語 (14.38%)	-
ツェリエ	ドイツ語 (69.21%)	スロヴェニア語 (30.34%)	-
プーラ	イタリア語 (47.55%)	セルビア・クロアチア語 (35.52%)	ドイツ語 (10.65%)

表 2-4-1 を一見して明らかなように、ドイツ語は全ての学校で必修であり、ここにドイツ語と他の言語との格差を見て取ることができる。しかし他の言語について見ていくと、リュブリャーナ、マリボル、ツェリエとスロヴェニア系住民がある程度居住する地域の国立ギムナジウム (表 2-4-2 参照) ではスロヴェニア語がドイツ語と並んで必修科目であり、イタリア系住民の多いコベルではイタリア語が必修科目とされていた。リュブリャーナにはドイツ

<sup>117</sup> *Jahresbericht des k. k. I. Staatsgymnasium zu Laibach, 1910/1911, S. 30-34; Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani, 1910/1911, str. 29-30; Jahresbericht des k. k. Staatsgymnasiums mit deutscher Unterrichtssprache zu Laibach, 1910/1911, S. 43-45; Jahresbericht des k. k. Staats-Gymnasiums in Marburg A/D, 1910/1911, S. 26-30; Jahresbericht des k. k. Staats-Gymnasiums in Cilli, 1910/1911, S. 42; Jahresbericht des k. k. Obergymnasiums in Rudolfswert, 1910/1911, S. 33; Annuario dell'I. R. Ginnasio Superiore di Capodistria, 1910/1911 pag. 63-64; Programm des k. k. Staatsgymnasium in Pola, 1910/1911, S. 48-51 より作成。*

<sup>118</sup> Die Ergebnisse der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den im Reichsrat vertretenen Königreichen und Ländern, 1/1. Die summarischen Ergebnisse der Volkszählung. Mit 6 Kartogrammen, Wien: 1912, S. 62-4. Spezialortsrepertorium von Krain. Bearbeitet auf Grund der Ergebnisse der Volkszählung vom 31. Dezember 1910, Wien: 1919, S. 106

語ではなくスロヴェニア語を主要教授語とするリュブリャーナ第二国立ギムナジウムもあった。ツェリエ国立ギムナジウムではスロヴェニア系生徒のみスロヴェニア語が必修で、ドイツ系生徒は自由科目として履修することができた。マリボル国立ギムナジウムでは下級学年では授業語としてスロヴェニア語が使用されることが明示されている。フランス語を設置していたのは2校のみで、区分はトリエステ国立ギムナジウムと同様自由科目である。トリエステ国立ギムナジウム他、国立ギムナジウムは全面的なドイツ語偏重ではなく、当該地域における言語状況にある程度は配慮していたといえる。

以上から、トリエステ国立ギムナジウムの言語面での一つの特徴が浮かび上がってくる。トリエステ国立ギムナジウムは近隣の国立ギムナジウムに見られた傾向と同じく、地域の言語状況に対応し、イタリア語とスロヴェニア語の双方を選択科目扱いとしていた。同校ではドイツ語が教授語であり必修科目である一方で、トリエステで主要な2つの言語も選択科目として学ぶこともできた。これは外形的な制度的側面では「コスモポリタン」なトリエステの状況を反映していたということであり、他のトリエステ市内の主要イタリア系学校に較べ明らかに複数言語の共存空間を提供していたといえよう。なおこのような制度が用意された状況で生徒はどのようにイタリア語、スロヴェニア語、フランス語を選択していたのかという問題は、第四章で論じる。

## 第二節 生徒の背景：母語・宗派・出身地・出身家庭・進路

トリエステ国立ギムナジウムに在学した生徒の背景（母語、親の職業、入学意図＝進路）は、学校が提供する授業内容や科目選択といった、教育の運用・実体面に影響を与えた可能性が高い。したがって本節では、生徒の背景、とりわけ言語教育に影響を及ぼし得る条件について検討する。

### 生徒の母語

1910/1911年度、トリエステ国立ギムナジウムは他校と比較して生徒の母語の面で多様であった（表2-5参照）。市全体では少数派のドイツ系がここでは多数派にあり、ドイツ系、イタリア系、スロヴェニア系の三者で93%を占めているが、その他にもセルビア・クロアチア系、ギリシャ系、マジャール系、ルーマニア系と多様性に富んでいる。同じくドイツ語を教授語としている国立実科学校ではスロヴェニア系の割合がやや少ないものの、こちら

もドイツ系、イタリア系、スロヴェニア系で 90%以上を占めている。その一方でトリエステのイタリア系中等教育機関の生徒はイタリア系生徒の独占状態にあった（トリエステ市立上級ギムナジウム 96.7%、トリエステ市立女子学校 97.1%、市立上級実科学校 99.2%）。

**表 2-5 : 母語別生徒数（1910/1911 年度、トリエステ市内のギムナジウム・中等学校）<sup>119</sup>**

	国立	国立実科	市立上級	市立女子	市立上級実科
ドイツ語	191	186	8	15	-
イタリア語	152	218	669	995	241
スロヴェニア語	199	110	4	3	-
セルビア・クロアチア語	18	11	2	2	-
ギリシャ語	9	-	7	6	-
チェコ語	3	1	-	-	-
フランス語	1	1	-	2	1
ルーマニア語	1	-	-	-	-
英語	1	1	2	2	-
マジャール語	2	1	-	-	-
ロシア語	1	-	-	-	-
ポーランド語	-	1			
スペイン語	-	-	-	-	1
合計	578	530	692	1025	243

注 国立 = トリエステ国立ギムナジウム、国立実科 = トリエステ国立実科ギムナジウム、市立上級 = トリエステ市立上級ギムナジウム、市立女子 = トリエステ市立女子学校、市立上級実科 = トリエステ市立上級実科学校

トリエステ市外の近隣ギムナジウムと比較しても、トリエステ国立ギムナジウム（とトリエステ国立実科ギムナジウム）における母語の多様性とドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語母語話者の均衡は明らかであるが、各国立ギムナジウムの生徒の母語話者数は概ね言語科目設置状況（表 2-4 参照）と対応している。トリエステ国立ギムナジウム他、国立ギムナジウムは当該地域で主に使用される言語と生徒の言語を考慮していたといつてよい（表 2-6 参照）。

<sup>119</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 57; AST, Scuole del litorale 1842-1918, b. 776; Annuario del Ginnasio Superiore Comunale di Trieste, 1910/1911, pag. 33; Programma annuale del Civico Liceo Femminile di Trieste, 1910/1911, pag. 108; Annuario della Civica Scuola Reale Superiore di Trieste, 1910/1911, pag. 64* より作成。

表 2-6 : 母語別生徒数 (1910/1911 年度、トリエステ市外のギムナジウム) <sup>120</sup>

	リュブ①	リュブ②	リュブ③	マリボル	ツェリエ	ノヴォ・メスト	コベル	プーラ
ドイツ語	8	1	163	229	244	7	2	81
イタリア語	-	-	2	-	1	-	193	57
スロヴェニア語	628	417	1	322	78	267	*	18
セルビア・クロアチア語	7	3	1	-	-	-	*	14
チェコ語	3	3	1	-	2	2	*	5
ルーマニア語	-	-	1	-	-	-	-	1
マジャール語	-	-	-	-	-	-	-	1
ポーランド語	-	-	1	-	-	-	*	1
ポルトガル語	-	-	-	-	1	-	-	-
合計	646	424	170	551	326	276	199	178

注 リュブ①=リュブリャーナ第一国立ギムナジウム、リュブ②=リュブリャーナ第二国立ギムナジウム、リュブ③リュブリャーナ国立ドイツギムナジウム、マリボル=マリボル国立ギムナジウム、ツェリエ=ツェリエ国立ギムナジウム、ノヴォ・メスト=ノヴォ・メスト国立ギムナジウム、コベル=コベル国立ギムナジウム、プーラ=プーラ国立ギムナジウム

次に生徒数の変遷について見ると、アウスグライヒ体制発足直後の 1868/1869 年度から 1910/1911 年度までの約 40 年間について次の点が明らかになってくる。まずドイツ語を母語とする生徒はいずれの年度においてもほぼ 3 割を維持していた。イタリア語を母語とする生徒とスロヴェニア語を母語とする生徒は対照的である。前者は 1868/1869 年度においてはドイツ語を母語とする生徒と同数であったものの、1890/1891 年度からは全生徒中に占める割合が低下していった。これには 1883 年にイタリア語を主要教授語とするトリエステ市立上級ギムナジウムが開学されたことが影響しているだろう。その反面、1868/1869 年度にはイタリア語・ドイツ語を母語とする生徒の 3 分の 1 であったスロヴェニア語を母語とする生徒は一貫して増加していき、1910/1911 年度には二者を抑えて最大の多数派となるに至っている (表 2-7、2-8 参照)。

<sup>120</sup> *Jahresbericht des k. k. I. Staatsgymnasium zu Laibach*, 1910/1911, S. 49; *Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani*, 1910/1911, str. 51; *Jahresbericht des k. k. Staatsgymnasiums mit deutscher Unterrichtssprache zu Laibach*, 1910/1911, S. 60; *Jahresbericht des k. k. Staats-Gymnasiums in Marburg A/D*, 1910/1911, S. 44; *Jahresbericht des k. k. Staats-Gymnasiums in Cilli*, 1910/1911, S. 67; *Jahresbericht des k. k. Obergymnasiums in Rudolfswert*, 1910/1911, S. 62; *Annualio dell' I. R. Ginnasio Superiore di Capodistria*, 1910/1911, pag. 87; *Programm des k. k. Staatsgymnasium in Pola*, 1910/1911, S. 69.

表 2-7 : 母語別生徒数の変遷<sup>121</sup>

	1868/1869	1880/1881	1890/1891	1900/1901	1910/1911
ドイツ語	76	130	133	118	191
イタリア語	76	95	170	153	152
スロヴェニア語	25	57	90	137	199
セルビア・クロアチア語	-	-	27	29	18
ギリシャ語	4	9	23	7	9
チェコ語 <sup>122</sup>	-	-	2	1	3
フランス語	-	-	-	1	1
ルーマニア語	-	-	-	-	1
英語	-	-	-	-	1
マジャール語	-	-	-	2	2
ロシア語	-	-	-	-	1
オランダ語	-	-	1	-	-
アルメニア語	-	-	3	-	-
合計	181	291	449	448	578

表 2-8 : 母語別生徒数の割合の変遷（上位 5 言語）<sup>123</sup>

	1868/1869	1880/1881	1890/1891	1900/1901	1910/1911
ドイツ語	42.0	44.7	29.6	26.3	33.0
イタリア語	42.0	32.4	37.9	34.2	26.3
スロヴェニア語	13.8	19.6	20.0	30.6	34.2
セルビア・クロアチア語	-	-	6.0	6.5	3.1
ギリシャ語	2.2	3.1	5.1	1.6	1.6

また近隣のスロヴェニア系住民が多く居住する地域のギムナジウムに在籍していた生徒のうち、トリエステあるいはトリエステの含まれる行政区キュステンラント Küstenland からの出身者は、リュブリャーナ校①（ドイツ語が教授語）22 名（全生徒の 3.4%）、リュブリャーナ校②（スロヴェニア語が教授語）20 名（同 4.7%）、ツェリエ校 5 名（同 1.5%）、マリボル校 9 名（同 1.6%）、ノヴォ・メスト校 9 名（同 3.3%）、コペル校（イタリア語

<sup>121</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1868/1869, S. 41; Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1880/1881, S. 122; Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1890/1891, S. 55; 1900/1901, S. 95; Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 57* より作成。

<sup>122</sup> チェコ語は『年報』の発行年、発行校によって「チェコ語」、「チェコスロヴァキア語」、「チェコ語、スロヴァキア語」、「チェコスロヴァキア語」、「ボヘミア語」と表記が一定していない。本稿では特に断りのない限り「チェコ語」で統一して表記する。

<sup>123</sup> 上記表 3-3 より作成。

が教授語) 14名(同7.3%)、プーラ校28名(同15.7%)<sup>124</sup>であった。しかしこれはスロヴェニア系を含む全ての母語の生徒の数値である。国立ギムナジウムに199名(全生徒の34.4%)、国立実科学校に110名(同20.8%)と、計309名のスロヴェニア系生徒がトリエステのドイツ系ギムナジウムに在籍していたことと合わせれば、トリエステから多数のスロヴェニア系生徒が現スロヴェニア地域の国立ギムナジウムに通っていたとはいいがたい。国立ギムナジウムと国立実科学校のドイツ系二校がトリエステのスロヴェニア系生徒の主たる受け皿となっていたと考えられる。

スロヴェニア語を母語とする生徒の一貫した増加は、トリエステ国立ギムナジウムがスロヴェニア系住民にとって魅力を持ち続けたことを意味する。この理由は同校がスロヴェニア語を授業科目として設けていたことだけだろうか。そして母語で教育を受ける機会があるにもかかわらず、イタリア語母語話者がこの学校を選択した理由は何であろうか。家庭環境や入学意図=進路の要素は言語教育の内容のみならずこれらの問題にも影響していると考えられるため、続いてこの2点を考察する<sup>125</sup>。

### 生徒の出身家庭

ここまで『年報』を史料に、主に統計的にトリエステ国立ギムナジウムの生徒について扱ってきたが、『生徒記録簿』からは更に具体的な生徒の姿を窺い知ることができる。『生徒

---

<sup>124</sup> *Jahresbericht des k. k. I. Staatsgymnasium zu Laibach*, 1910/1911, S. 48; *Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani*, 1910/1911, str. 50; *Jahresbericht des k. k. Staats-Gymnasiums in Cilli*, 1910/1911, S. 67; *Jahresbericht des k. k. Staats-Gymnasiums in Marburg A/D*, 1910/1911, S. 44; *Jahresbericht des k. k. Obergymnasiums in Rudolfswert*, 1910/1911, S. 62; *Annualio dell' I. R. Ginnasio Superiore di Capodistria*, 1910/1911, pag. 87; *Jahresbericht in Pola*, S. 68-69より作成。

<sup>125</sup> 生徒が二言語話者、多言語話者である場合、どの言語を母語とするのかは、生徒の特定の言語集団への所属意識と関わる重要な問題である。実際トリエステ国立ギムナジウムの1910年/1911年度8年生の母語について、過年度の「生徒記録簿」と照合すると二人の生徒の記載に揺れがある。13番ハインリヒ・ヨレス Heinrich Jollesは1903年/1904年度から1907年/1908年度、即ち1年生から4年生まで母語はドイツ語と記録されていたが、以降5年生から8年生まではイタリア語と記されている。33番のカール・ヴラチュコ Karl Wračkoは6年生の時の記録のみがドイツ語であり、他はスロヴェニア語になっている。カール・ヴラチュコの場合、出身地がドイツ系の少ないザラであること、ヴラチュコという名字がスラヴ系であること、スロヴェニア語を履修していることから誤記の可能性も否定できない。一方ハインリヒ・ヨレスについては、母語をドイツ語からイタリア語へと変更した以上、少なくともイタリア語とドイツ語の流暢な二言語話者であったとは考えられるものの、確定的なことは述べ難い。しかし逆にいえば当該年度8年生のうちこの二人以外については入学以来母語の記載は不変であった。生徒の自己申告に基づいて、あるいは教員か保護者によって母語の記載が決定されていたにせよ、生徒の母語の認識が頻繁に変更されていたわけではないといえる。

記録簿』は学校側が生徒の管理のために使用していた資料である。そこには生徒の氏名、生年月日、宗派、住所、出生地（都市名と地方名）、親の職業、履修科目とその成績、奨学金受給状況、正規・非正規生の区別、転出入状況、特記事項が記されていた。ここでは1890/1891年度、1900/1901年度、1910/1911年度の8年生について、「生徒記録簿」を史料にその出身家庭を考察する。なお1880/1881年度「生徒記録簿」には母語の記載がないため取り上げない。

表 2-9 : トリエステ国立ギムナジウム八年生生徒名簿 (1910/1911 年度) <sup>126</sup>

	氏名	出生地(都市)	出生地(地方)	宗派	母語	語学	保護者の職業	区分	奨
1	Artur Bonetta	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	郵便副局長	R	有
2	Guido Brunner	トリエステ	キュステンラント	ユダヤ	伊	-	大地主	W	-
3	Guido Cosciancich	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	石炭商	Y	-
4	Alois Folie	シュコーフィ	クライン	カトリック	独	-	知事府会計局長	R	-
5	Karl von Frigyessy	トリエステ	キュステンラント	ユダヤ	独	伊	ラス社取締役	S	-
6	Michael Gabrijelčič	ポドグラート	イストリア	カトリック	スロ	スロ	最高裁判所顧問官	U	-
7	Demetrius Georgacopulo	トリエステ	キュステンラント	正教	伊	伊	-**	Z	-
8	Guido Glavan	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	-**	Z	-
9	Geza Goldberger	グラーツ	シュタイアーマルク	ユダヤ	独	-	飲食店経営	Y	-
10	Danilo Goriup	オブツィナ*	キュステンラント	カトリック	スロ	-	農場主	W	-
11	H. Prinz z. H. Shillingsfürst	ウィーン	下オーストリア	カトリック	独	-	知事	R	-
12	Otto Homann	ラドヴリツァ	クライン	カトリック	独	スロ	商人	Y	-
13	Heinrich Jolles	トリエステ	キュステンラント	ユダヤ	伊	伊	商人	Y	-
14	Paul Kadeřábek	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	-	郵政局監査官(退)	R	-
15	Erich Kagerbauer	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	仏*	海軍局上級技官	R	-
16	Johann Kersevany	パジン	イストリア	カトリック	伊	伊	教授(退)	R	-
17	Karl Koch	ブラハ	ボヘミア	ユダヤ	独	伊	商人	Y	-
18	Karl Kohn	ウィーン	下オーストリア	ユダヤ	独	-	商人	Y	-
19	Viktor Kordan	トリエステ	キュステンラント	カトリック	スロ	スロ	国有鉄道書記官	R	-
20	Mirko Kosić	キキンダ	ハンガリー	正教	セ・ク	-	校長	R	-
21	Wladimir Kuščer	ブーラ	イストリア	カトリック	スロ	スロ	郵便監査員	R	-
22	Ludwig Robert Lirl	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	-	-	Z	-
23	Lorenz Lorenzutti	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊、仏*	建設局長(退)	R	-
24	Theodor Lubez	トリエステ	キュステンラント	カトリック	スロ	-	-	Z	有
25	Franz Malalan	オブツィナ*	キュステンラント	カトリック	スロ	スロ	労働者	Z	-
26	Heinrich Meyer	セラン	ベルギー	カトリック	独	-	クライン産業組合会長	S	-
27	Otto Moll	トリエステ	キュステンラント	ルター派	独	-	商人	Y	-
28	Bruno Peperle	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	ロイド社職員	V	-
29	Franz Rešaver	キロウチェ	クライン	カトリック	スロ	スロ	転轍係員	R	-
30	Anton Sramič	ロツツォル*	キュステンラント	カトリック	スロ	スロ	農夫	X	-
31	Karl Vatovec	コベル	イストリア	カトリック	スロ	-	地主	W	-
32	Anton Vouk	トリエステ	キュステンラント	カトリック	スロ	スロ	南部鉄道臨時職員	Y	-
33	Karl Wračko	ザラ	ダルマチア	カトリック	スロ	スロ	警察顧問官	R	有
34	Guido Zernitz	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	-	Z	-
35	Anton Zobec	スプリト	ダルマチア	カトリック	スロ	スロ	国有鉄道事務官補(退)	R	-

<sup>126</sup> AST, Scuole del litorale 1842-1918, b. 989 より作成。

- 注① 語学 = ドイツ語以外に履修した言語科目、奨 = 奨学金需給の有無、(退) = 退職済み、伊 = イタリア語、独 = ドイツ語、スロ = スロヴェニア語、セ・ク = セルビア・クロアチア語、希 = ギリシャ語、R = 公務員、S = 経営者、T = 医師、U = 法律家、V = 海運業、W = 大土地所有者、X = 農業、Y = 商業、Z = その他の職業を示す（この職業区分については後述）。
- 注② 言語科目のうち、自由選択科目の場合には\*を付した。
- 注③ \*\*は母親である。
- 注④ 病気療養、転学、中退により履修状況が記載されていない者は除く。
- 注⑤ 鉄道関係者については、オーストリア国有鉄道ではなく株式会社南部鉄道が経営する南部鉄道の職員であることが明示されている者は Y に、それ以外は R に算入した（これら 5 点は以下の表でも同様）
- 注⑥ 25 番 Franz Malalan の保護者は労働者 Arbeiter と記されており、港湾関係労働者の可能性もあるが、詳細が不明なため Z に区分した。

表 2-10 : トリエステ国立ギムナジウム 8 年生生徒名簿 (1900/1901 年度) <sup>127</sup>

	氏名	出生地 (都市)	出生地 (地方)	宗派	母語	語学	保護者の職業	区分	奨
1	Karl Bufler	ブーラ	イストリア	カトリック	伊	伊	海軍軍人(退)	R	-
2	Johann Economo	トリエステ	キュステンラント	正教	希	-	大工場主	S	-
3	Leo Fels	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	伊*、仏*	化学者	Z	-
4	Samson Gentilomo	トリエステ	キュステンラント	ユダヤ	伊	伊	信用銀行支店長	Y	-
5	Josef Ghersinich	トリエステ	キュステンラント	カトリック	セ・ク	スロ	警察官	R	-
6	Rudolf Goldschmied	トリエステ	キュステンラント	ユダヤ	独	伊	商人	Y	-
7	Florian Gregorić	*	クライン	カトリック	スロ	スロ	収税吏	R	-
8	Otto von Grisogono	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	ロイド社船長	V	有
9	Karl Guggenberger	パジン	イストリア	カトリック	独	伊	ギムナジウム教授	R	-
10	Johann Kern	ウィーン	下オーストリア	カトリック	独	伊*	税関副局長(退)	R	有
11	Otto Ritter v. Kindinger	インスブルック	ティロール	カトリック	独	-	上級地方裁判所副裁判長	U	-
12	Rudolf Mallner	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	-	郵便監査員	R	-
13	Alfons Martin	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	-	会社員	Y	有
14	Gaston Mecozzi	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	-	ロイド社船長	V	-
15	Arthur Miani	アキレイア	キュステンラント	カトリック	伊	伊	郵便局長	R	-
16	Karl Motka	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	-	商人	Y	-
17	Silvius Polatsek	トリエステ	キュステンラント	ユダヤ	伊	伊	仲買人	Y	-
18	Adolf Pollak	*	ティロール	ユダヤ	独	伊	会計係	Y	-
19	Narcissus Toniatti	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	行商人	Y	有
20	Alois Vlah	トリエステ	キュステンラント	カトリック	セ・ク	-	郵便局員	R	-
21	Eduard Zobel	トリエステ	バイエルン	ルター派	独	-	商人	Y	-
22	Johann Zupančić	ロンジェラ*	キュステンラント	カトリック	スロ	スロ	地主	W	-
23	Josef Žiberna	トマイ	キュステンラント	カトリック	スロ	スロ	地主	W	有

<sup>127</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 979 より作成。

注① 7番 Florian Gregorić の出身都市はコスタニェヴィツァ・ナ・クルキ、18番 Adolf Pollak の出身都市はサンクト・アントン・アム・アールベルクである。

注② ロンジェラは現在トリエステの一部となっている。

注③ 21番 Eduard Zobel の出身地方はバイエルンと表記されているが、『年報』の生徒の出身地のデータ中ではドイツではなくキュステンラント出身者として算定されている。

注④ 23番 Josef Žiberna は1911年4月16日に疾病により中退しているが、スロヴェニア語を履修していたことが分かるため表に記載した。

表 2-11 : トリエステ国立ギムナジウム 8 年生生徒名簿 (1890/1891 年度) <sup>128</sup>

	氏名	出生地 (都市)	出生地 (地方)	宗派	母語	語学	親の職業	区分	奨
1	Diego Arich	バジン	イストリア	カトリック	伊	伊	地主**	W	-
2	Josef Bellen	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	ロイド社船長	V	-
3	Johann Benedik	ブレッド	クライン	カトリック	スロ	スロ	地主**	W	-
4	Ludwig Ćiković	ユルダニ	イストリア	カトリック	セ・ク	スロ	農夫	X	有
5	Georg Costi	トリエステ	キュステンラント	正教	希	-	商人	Y	-
6	Milan Dolenc	ロシュ	クライン	カトリック	スロ	スロ	市議会書記官	R	-
7	Rudolf Dovgan	トリエステ	キュステンラント	カトリック	スロ	スロ	南部鉄道職員	Y	-
8	Heinrich Ferrari	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	伊、スロ*	-**	Z	-
9	Leo Fillinich	ツレス	イストリア	カトリック	伊	伊	収税吏(退)	R	有
10	Oscar Hofmann	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	伊、スロ*	督学官/校長	R	有
11	Jakob Kogej	ヴォイスコ	クライン	カトリック	スロ	スロ	農婦**	X	-
12	Andreas Korenčan	ホリュル	クライン	カトリック	スロ	伊*、スロ	農夫	X	-
13	Christian Kreiner	リンド	ケルンデン	カトリック	独	-	地区医師	T	-
14	Ferdinand Kunej	シエント・ペテル	シュタイアーマルク	カトリック	スロ	スロ	地主	W	-
15	Heinrich Lang	ウィーン	下オーストリア	カトリック	独	-	海軍軍人	R	-
16	Johann Lange	リュブリャーナ	クライン	カトリック	独	スロ*	車掌	R	-
17	Karl Lapajne	イドリヤ	クライン	カトリック	スロ	スロ	-**	Z	-
18	Friedrich Martinuzzi	トリエステ	キュステンラント	カトリック	スロ	-	庭師	Z	-
19	Sigmund Meth	グラーツ	シュタイアーマルク	ユダヤ	独	-	医学博士	T	-
20	Baron Alfred Morpurgo	ヴェローナ	イタリア	ユダヤ	伊	-	ロイド社会長	S	-
21	Marius Podbernic	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	-	商人	Y	-
22	Camillus Poliak	ゴリツィア	キュステンラント	カトリック	伊	-	上級地方裁顧問	U	-
23	Johann Pošćić	ヴォロスコ	イストリア	カトリック	セ・ク	スロ	-	Z	-
24	Josef Požar	ゴチェ	クライン	カトリック	スロ	スロ	農夫	X	有
25	Karl Raspottnig	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	郵便局職員	R	有
26	Karl Renner <sup>129</sup>	トリエステ	キュステンラント	ルター派	独	-	年金生活者	Z	-
27	Franz Schmutz	バルコラ*	キュステンラント	カトリック	スロ	スロ	線路巡回員	R	-
28	Max Schuh	ロハティン	ガリツィア	カトリック	独	スロ*	御用厩舎獣医	R	-
29	F. S. de Semse	トリエステ	キュステンラント	カトリック	独	-	定期船船長	V	-
30	Theodor Stegù	ポストイナ	クライン	カトリック	スロ	スロ	鉄道職員	R	有
31	Ivan Teodorovich	トリエステ	キュステンラント	正教	セ・ク	-	-**	Z	-

<sup>128</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 969 より作成。史料中で都市名はドイツ名で書かれているが、現在の慣習と所属国の表記に沿って改めた。地方名の表記はドイツ語と慣習に準じている。

<sup>129</sup> 同名ではあるが後のオーストリア共和国首相とは別人である。

32	Johann Terca	トリエステ	キュステンラント	カトリック	伊	伊	商人	Y	-
33	Johann Thomitz	リュブリャーナ	クライン	カトリック	スロ	伊*、スロ	鉄道医	T	
34	Albert Tomicich	クルク	イストリア	カトリック	伊	-	控訴審裁顧問	U	
35	Johann Valentin	トリエステ	キュステンラント	カトリック	スロ	-	家政婦**	Z	-
36	Nikolaus Zevelekis	トリエステ	キュステンラント	正教	希	伊	商人	Y	-

上記に生徒の親の就いていた代表的な職業を公務員、経営者、医師、法律家、海運業、大土地所有者、農業、商業、その他と9種に分類した。R=公務員、S=経営者、T=医師、U=法律家、V=海運業、W=大土地所有者、X=農業、Y=商業、Z=その他と表記している。無論国家に奉職している法律家も公務員の一部であり、海運関係者は商業関係者でもあるが、前者はいわゆるエリート性の強い専門職であり、後者はトリエステに特徴的な産業であるため、区別して記載した。

1910年度の8年生（進路について扱う関係上本稿では最高学年である8年生を中心に扱う）についていえば、YとRの家庭、つまり商人や公務員の家庭の子弟が多数派であった（表2-9参照）。トリエステに本社を置く海運会社であるロイド社の関係者が見られる点、公務員と区分した中に南部鉄道関係者が多く見られる点にはトリエステの特性がよく表れている。

トリエステ国立ギムナジウムにおける地域の名士の子弟の存在は特筆すべきものである。1880/1881年度の10番オスカー・ホフマン Oscar Hofmann の父ゲオルグ Georg はこの年にトリエステ国立ギムナジウムの校長を務めており、20番アルフレッド・モルプルゴ Baron Alfred Morpurgo はトリエステのユダヤ系の名門モルプルゴ家の出身であり、父はロイド社の取締役であった。1900/1901年度の2番ヨハン・エコノモ Johann Economo はトリエステの大工場主として知られるエコノモ家の出身である。1910/1911年度の5番カール・フォン・フリギエッシ Karl von Frigjessy の父アドルフはラス社 Ras: Riunione Adriatica di Sicurtà の取締役であった<sup>130</sup>。同社は1838年にトリエステで創立された保険会社で、Karlの2歳年上の兄アルノルド Arnoldo も後に取締役に就任し、トリエステ経済に多大な影響力を持つこととなる<sup>131</sup>。イタリア風には Frigessi di Rattalma と書かれるフリギエッシ一族はハンガリーのユダヤ系名家で、元来は Frigjessy von Racz-Almási と称した。

<sup>130</sup> RAS社の社史については A cura della Riunione Adriatica di Sicurtà, *Nel primo Centenario della Riunione Adriatica di Sicurtà (1838-1938). Volume commemorativo pubblicato in occasione dell'approvazione del 100° bilancio sociale*. Trieste: Novara, 1939 を参照。

<sup>131</sup> Adolf の伝記としては Anna Millo, *Trieste, le assicurazioni, l'Europa : Arnoldo Frigessi di Rattalma e la Ras*. Milano: Franco Angeli Storia, 2004 がある。

また同年度の 11 番フバート・ホーエンローエ・シリングヒュルスト Hubert Prinz zu Hohenlohe Schillingsfürst の父コンラート Konrad は 1904 年から 1915 年までキュステンラント州知事を務めていた。親子はドイツ出身の貴族ホーエンローエ家の一員であり、コンラートは 1894 年から 1900 年までドイツ帝国宰相であったクロートヴィヒ Chlodwig の甥である。また Hubert の 4 歳年下の妹フランツィスカ Franziska はマクシミリアン・オイゲン大公 Maximilian Eugen von Österreich と結婚した。このためフランツィスカは最後のオーストリア皇帝であるカール一世の義理の妹であり、フバート自身はカール一世の 2 歳年上の義理の兄であるともいえる。

これらの生徒の他、経営者、医師、法律家、地主の子弟は 3 年度の生徒の合計 94 名中 18 名と 19%を占めている。ここまでに挙げた名士の子弟の存在は、イタリア語を教授語とする市立ギムナジウムがある中でイタリア語を母語とする生徒が国立ギムナジウムに通う利点は何であったのかという疑問に対する一つの答えと考えられる。イタリア語ではなくドイツ語を教授語とする学校でドイツ語への一層の習熟を図り、地元のみならずオーストリア国内全体に影響を持った名士の子弟たちとの人脈作りをしておくことは、後の人生において大きな財産となったに違いない。これはイタリア語母語話者以外についても同様である。長い時間をともにするギムナジウムで、将来トリエステ社会を動かしていく可能性のある友人たちと親交を深められる利点は大きかったであろう

また、以上のように非ドイツ系の生徒の保護者にトリエステにおける有力者たちが存在したことは、イタリア語とスロヴェニア語の授業の扱いに少なからぬ影響を与えていたのではないだろうか。少なくともこうした人々の意向を全く無視した、ドイツ系生徒・ドイツ語偏重のカリキュラムを組むことは困難だったと考えられる。

一方、同じ学年には転轍係員や南部鉄道臨時職員、農夫といった、決して富裕ではないと推定される家庭の子弟も在籍していた。また商人とはいってもその規模は様々であり、零細商人から大商人までの幅があったと考えられる<sup>132</sup>。農業関係者についても、1910/1911 年度 10 番ダニロ・ゴリウプ Danilo Goriup のようにトリエステ郊外の農場主が存在していた一方で、単に農夫 Bauer と記載された家庭の生徒が存在していた。全体としてトリエステ国立ギムナジウムは、トリエステと近郊地域の富裕層にエリート再生産の場をもたらしていただけでなく、一般労働者や農夫といった層に社会的上昇の可能性を提供していた側面が浮か

---

<sup>132</sup> 職業について、史料中では非常に簡潔に記載されている。例えば表中で「商人」と訳出したものは Kaufmann と記されているのみであり、どれほどの規模の事業を行っていたのかは判然としない。

び上がる。これを裏付けるのは授業料免除者数のデータである。トリエステ国立ギムナジウムの1910/1911年度の年間授業料は80クローネで、前期・後期それぞれ初めの6週間以内に40クローネずつ分納することと規定されていた<sup>133</sup>。この他教材費として3クローネ、入学金として4.2クローネが必要であった<sup>134</sup>。しかしトリエステ国立ギムナジウムには授業料免除（全額免除・半額免除）の制度があり、延べ人数では半数の生徒が何らかのかたちで授業料免除を適用されていた（表2-12参照）。

表 2-12：授業料免除者数（1910/1911年度）<sup>135</sup>

	1年				2年			3年		4年		5年		6年	7年	8年	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B	A	B				
免除無し(前)	28	14	16	22	23	12	18	24	9	23	8	16	4	17	20	16	270
免除無し(後)	20	11	12	19	28	14	20	29	13	26	16	18	7	23	25	17	298
半額免除(前)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2
半額免除(後)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2
全額免除(前)	10	30	23	20	23	34	17	18	30	10	24	11	19	31	26	19	345
全額免除(後)	15	31	25	23	16	29	14	9	23	7	15	9	16	21	20	19	292

半額免除者は極めて少数であるが、全額免除者は延べ人数で免除無しの生徒よりも多い。この年度の生徒の総数は578名であり、前期・後期で延べ637名が全額免除者であったことから、実に55.1%と半数を超える生徒が授業料免除を適用されていたことになる。20年前の1890/1891年度についても同様である。こちらは『年報』で全学年の合計数のみを記載している。それによると全額免除者は前期247名・後期212、半額免除者は前期15名・後期19名、免除無しの者は前期213名、後期219名である<sup>136</sup>。この年度も延べ人数では

<sup>133</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 73.*

<sup>134</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 73.* なお1910年度の『年報』が発行された1911年7月、トリエステで発行されていたスロヴェニア語新聞『エディノスト』*Edinost*の年間購読料は24クローネであった。ハプスブルク君主国は1892年に財務大臣シャールドル・ヴェケルレ Sándor Wekerleのもとで金本位制に移行したのにもない、通貨単位はそれまでのグルデン Gulden からクローネ Krone に改定され（1 Krone = 0.5 Gulden）、補助単位はヘラー Heller と定められた（1 Krone = 100 Heller であり、一方グルデンの補助単位はクロイツァー Kreuzer だった）。物価の換算は困難な問題であるが、1892年7月、トリエステで発行されていた新聞 *Edinost* の年間購読料は6グルデン = 12クローネであった（*Edinost, 02/07/1892*）。であったことから、購読料は18年のうちに倍増しているといえる。一方1891/1892年度の年間授業料は40グルデン = 80クローネ、1892/1893年度の年間授業料も同額であり、授業料は1910年に至るまで額面上は値上がりしていないことになる。

<sup>135</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 59.*

<sup>136</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1890/1891, S. 56.*

46.0%の生徒が全額免除の適用を受けていた。帝政末期のトリエステ国立ギムナジウムでは多くの生徒が授業料免除の恩恵を享受していたといえる。このような制度もトリエステ国立ギムナジウムが多くの生徒を集め続けられた要因の一つであろう。

## 進路

トリエステ国立ギムナジウムの1910/1911年度8年生の進路は『年報』、「生徒記録簿」とともに網羅的には示していない。卒業試験の箇所に進路についての言及があるものの、それは「法学15名、医学3名、哲学4名、神学5名、農学3名、工学2名、公務員2名、商業3名」<sup>137</sup>と頗る定量的である。しかし1909/1910年度までの『年報』には卒業試験合格者一覧に個人の進路が記載されている。よってここでは数値化したデータではなく、生徒の具体的情報とともに進路を示す。

表 2-13 : トリエステ国立ギムナジウム卒業生進路 (1900/1901 年度) <sup>138</sup>

	氏名	進路	親の職業	区分	出生地	宗派	母語	語学
1	Karl Bufler	海軍	海軍軍人(退)	R	ブーラ	カトリック	伊	伊
2	Johann Economo	法学部	大工場主	S	トリエステ	正教	希	-
3	Leo Fels	哲学部	化学者	Z	トリエステ	カトリック	独	伊*
4	Samson Gentilomo	医学部	信用銀行支店長	Y	トリエステ	ユダヤ	伊	伊
5	Josef Ghersinich	法学部	警察官	R	トリエステ	カトリック	セ・ク	スロ
6	Rudolf Goldschmied	法学部	商人	Y	トリエステ	ユダヤ	独	伊
7	Florian Gregorić	法学部	収税吏	R	*	カトリック	スロ	スロ
8	Otto von Grisogono	法学部	ロイド社船長	V	トリエステ	カトリック	伊	伊
9	Karl Guggenberger	哲学部	ギムナジウム教	R	バジン	カトリック	独	伊
10	Johann Kern	法学部	税関副局長(退)	R	ウィーン	カトリック	独	伊*
11	Otto Ritter v. Kindinger	法学部	上級地方裁判所副裁	U	インスブルック	カトリック	独	-
12	Rudolf Mallner	法学部	郵便監査員	R	トリエステ	カトリック	独	-
13	Alfons Martin	法学部	会社員	Y	トリエステ	カトリック	独	-
14	Gaston Mecozzi	法学部	ロイド社船長	V	トリエステ	カトリック	伊	-
15	Arthur Miani	-	郵便局長	R	アキレイア	カトリック	伊	伊
16	Karl Motka	法学部	商人	Y	トリエステ	カトリック	伊	-
17	Silvius Polatsek	法学部	仲買人	Y	トリエステ	ユダヤ	伊	伊
18	Adolf Pollak	工学部	会計係	Y	*	ユダヤ	独	伊
19	Narcissus Toniatti	医学部	行商人	Y	トリエステ	カトリック	伊	伊
20	Alois Vlah	法学部	郵便局員	R	トリエステ	カトリック	セ・ク	-
21	Eduard Zobel	-	商人	Y	トリエステ	ルター派	独	-
22	Johann Zupančić	-	地主	W	ロンジェラ*	カトリック	スロ	スロ
23	Josef Žiberna	-	地主	W	トマイ	カトリック	スロ	スロ

<sup>137</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 63.

<sup>138</sup> AST, Scuole del litorale 1842-1918, b. 979; Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1901-1902, S. 67 より作成。

注① 7番 Florian Gregorić の出身都市はコスタニェヴィツァ・ナ・クルキ、18番 Adolf Pollak の出身都市はサンクト・アントン・アム・アールベルクである。

注② ロンジェラは現在トリエステの一部となっている。

注④ 23番 Josef Žiberna は1911年4月16日に疾病により中退しているが、スロヴェニア語を履修していたことが分かるため表に記載した。

表 2-14 : トリエステ国立ギムナジウム卒業生進路 (1890/1891 年度) <sup>139</sup>

	氏名	進路	親の職業	区	出生地	宗派	母語	語学
1	Diego Arich	神学部	地主**	W	バジン	カトリック	伊	伊
2	Josef Bellen	医学部	ロイド社船長	V	トリエステ	カトリック	伊	伊
3	Johann Benedik	神学部	地主**	W	ブレッド	カトリック	スロ	スロ
4	Ludwig Čiković	神学部	農夫	X	ユルダニ	カトリック	セ・ク	スロ
5	Georg Costi	-	商人	Y	トリエステ	正教	希	-
6	Milan Dolenc	法学部	市議会書記官	R	ロシュ	カトリック	スロ	スロ
7	Rudolf Dovgan	軍人	南部鉄道職員	Y	トリエステ	カトリック	スロ	スロ
8	Heinrich Ferrari	医学部	-**	Z	トリエステ	カトリック	独	伊、スロ
9	Leo Fillinich	法学部	収税吏(退)	R	ツレス	カトリック	伊	伊
10	Oscar Hofmann	軍人	督学官/校長	R	トリエステ	カトリック	独	伊、スロ
11	Jakob Kogej	鉱山大学	農婦**	X	ヴォイスコ	カトリック	スロ	スロ
12	Andreas Korenčan	郵便局	農夫	X	ホリュル	カトリック	スロ	伊*、ス
13	Christian Kreiner	医学部	地区医師	T	リンド	カトリック	独	-
14	Ferdinand Kunej	医学部	地主	W	シェント・ペテル	カトリック	スロ	スロ
15	Heinrich Lang	海事局	海軍軍人	R	ウィーン	カトリック	独	-
16	Johann Lange	金融業	車掌	R	リュブリャーナ	カトリック	独	スロ*
17	Karl Lapajne	-	-**	Z	イドリヤ	カトリック	スロ	スロ
18	Friedrich Martinuzzi	-	庭師	Z	トリエステ	カトリック	スロ	-
19	Sigmund Meth	医学部	医学博士	T	グラーツ	ユダヤ	独	-
20	Baron Alfred Morpurgo	農学部	ロイド社会長	S	ヴェローナ	ユダヤ	伊	-
21	Marius Podbernik	法学部	商人	Y	トリエステ	カトリック	独	-
22	Camillus Poliak	医学部	上級地方裁願	U	ゴリツィア	カトリック	伊	-
23	Johann Poščić	法学部	-	Z	ヴォロスコ	カトリック	セ・ク	スロ
24	Josef Požar	軍人	農夫	X	ゴチェ	カトリック	スロ	スロ
25	Karl Raspotnig	法学部	郵便局職員	R	トリエステ	カトリック	伊	伊
26	Karl Renner <sup>140</sup>	法学部	年金生活者	Z	トリエステ	ルター派	独	-
27	Franz Schmutz	郵便局	線路巡回員	R	バルコラ*	カトリック	スロ	スロ
28	Max Schuh	農学部	御用厩舎獣医	R	ロハティン	カトリック	独	スロ*
29	F. S. de Semse	-	定期船船長	V	トリエステ	カトリック	独	-
30	Theodor Stegù	医学部	鉄道職員	R	ポストイナ	カトリック	スロ	スロ
31	Ivan Teodorovich	-	-**	Z	トリエステ	正教	セ・ク	-
32	Johann Terca	法学部	商人	Y	トリエステ	カトリック	伊	伊
33	Johann Thomitz	法学部	鉄道医	T	リュブリャーナ	カトリック	スロ	伊*、ス
34	Albert Tomicich	法学部	控訴審裁顧問	U	クルク	カトリック	伊	-

<sup>139</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 969; *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1891/1892, S. 68 より作成。

<sup>140</sup> 同名ではあるが後のオーストリア共和国首相とは別人である。

35	Johann Valentin	神学部	家政婦**	Z	トリエステ	カトリック	スロ	-
36	Nikolaus Zevelekis	商業	商人	Y	トリエステ	正教	希	伊

いずれの年度にも共通しているのは、大学進学率の高さである。トリエステ国立ギムナジウムに入学する主目的の一つが、上述の人脈作りだけでなく大学進学だったのは明らかといえる。特にトリエステのドイツ語母語話者とスロヴェニア語母語話者にとって、この学校は高等教育への窓口であった。

では生徒たちはどこの大学に進学していたのだろうか。トリエステ国立ギムナジウムの史料に記載はないが、ここではトリエステ市立上級ギムナジウムの進路が参考になる。同校では『年報』の50周年記念号にそれまでの卒業生の進路が名前・進学／就職先都市名・専攻分野／職業というかたちで記載されている。次に1910/1911年度の進路先を示す。

表 2-15：トリエステ市立上級ギムナジウム卒業生進路（1910/1911年度）<sup>141</sup>

	氏名	出身地	進学先都市	専攻	備考
1	Pio Amodeo	トリエステ	ウィーン	獣医学	
2	Fabio Carniel	トリエステ	グラーツ	法学	
3	Giuseppe Colombis	ツレス	グラーツ	法学	
4	Gino Costantini	トリエステ	ローマ	ロマンス語学	
5	Alberto Cosulich	トリエステ	ライプツィヒ	商学	上級商業アカデミー
6	Carlo Curto	プーラ	グラーツ	古典言語学	
7	Oliviero Delzotto	トリエステ	ウィーン	言語学	
8	conte Gian Vincenzo de Domini	リエカ	ウィーン	法学	
9	conte Guido de Ferra	トリエステ	グラーツ	法学	
10	Alfredo Fölkel	ウィーン	グラーツ	法学	
11	Carlo Fölkel	ヴェネツィア	グラーツ	工学	
12	Aldo Fonda	トリエステ	ウィーン	医学	
13	Ida Furlani	トリエステ	ウィーン	医学	
14	Gabrielli Franco	トリエステ	グラーツ	法学	
15	Pietro Gerin	トリエステ	グラーツ	法学	
16	Giorgio Giurco	ピラン	-	-	就職：市公務員
17	Giorgio Gortan	トリエステ	ウィーン	医学	
18	Mario Gorup	トリエステ	グラーツ	法学	
19	Vitaliano Gregoris	トリエステ	ウィーン	言語学	
20	Irene Iacchia	トリエステ	ウィーン	-	②
21	Giuseppe Ielussig	トリエステ	グラーツ	法学	
22	Carlo Kosher	トリエステ	-	造船学	工業学校
23	Federico Levi	トリエステ	ウィーン	言語学	
24	Bruno Lion	パジン	ウィーン	商学	
25	Luciano Marni	コルモンズ	ミラノ	工学	
26	Giorgio Marsich	トリエステ	グラーツ	法学	
27	Girolamo Muzzati	トリエステ	トリノ	-	トリノ士官学校
28	Giovanni Nasso	トリエステ	プラハ	医学	

<sup>141</sup> *Annuario del Ginnasio Superiore Comunale di Trieste 1863-1913*, 1913, pag. 113-115.

29	Augusto Nordio	トリエステ	ブラハ	医学	
30	Maria Novak	トリエステ	ウィーン	ロマンス語学	
31	Guido Piazza	トリエステ	グラーツ	医学	
32	Giuseppe Pincherle	トリエステ	ウィーン	医学	
33	Vittorio Pissach	モトヴン	リンツ	-	就職：会社員
34	Bruno Polonio	トリエステ	グラーツ	法学	
35	Paolo Porzia	トリエステ	グラーツ	医学	
36	Luiqi Schoberl	ヴィスコ	グラーツ	法学	
37	Antonio Streinz	マリンスカ	ウィーン	数学・物理学	
38	Guido Suppan	プーラ	ウィーン	言語学	
39	Vittorio Tamaro	トリエステ	グラーツ	法学	
40	Plinio Vascotto	パレンツォ	グラーツ	法学	
41	Giuseppe Venezian	トリエステ	グラーツ	法学	
42	Dante Vorano	①	グラーツ	法学	
43	Mario Vouk	トリエステ	グラーツ	法学	
44	Ugo Wohl	トリエステ	ウィーン	法学	
45	Vittorio Zampieri	ロヴィニ	-	-	就職：郵便局職員
46	Oscarre Zebochin	トリエステ	ウィーン	神学	
47	Guido Zulmin	トリエステ	グラーツ	法学	

注① スヴェトヴィンチェント

注② 言語学士、ウィーン大で地歴の教授資格有り

これによると、進学する生徒たちのほとんどはイタリア語圏ではなくハプスブルク君主国のドイツ語圏に進学している。トリエステからであれば近隣のパドヴァ大学のようなイタリアの名門校への選択肢も考えられた中で、このウィーンとグラーツへの集中（進学者 44 名中 37 名、84%がこのいずれかを選択）は大変興味深い。隣国イタリア王国のイタリア語を教授語とする大学よりも国内でのキャリアが選ばれていたことを示すものである。トリエステ国立ギムナジウム卒業生も同様にウィーン、グラーツ、ブラハ等、ドイツ語圏の大学へ進学していたと考えるのが妥当である。

トリエステ市立上級ギムナジウム卒業生の多くが進んだウィーン、ブラハ、グラーツにはそれぞれウィーン大学（1365 年設立）、ブラハ・カレル大学（同 1348 年）、グラーツ大学（同 1585 年）と現在でも続く名門校があった。しかしトリエステへの大学設置は 1924 年を待たねばならなかった。リュブリャーナにはナポレオン帝政下のイリュリア州時代にリュブリャーナ大学が設置された（1810 年）が、ハプスブルク君主国が同地を取り戻すと閉鎖され、再度開学したのは 1919 年であった。ブラハは古くからドイツ語とチェコ語の混在する都市であり、19 世紀にはブラハ大学にチェコ語を教授語とする部局が併設されているが、ハプスブルク君主国時代のチェコにおいてドイツ語の占めていた地位は依然強大であった。ブラハに限らず当時のハプスブルク君主国内のビジネスや政治の場で活躍するための道

具としてドイツ語の十分な運用能力は必須であり、トリエステの二つのドイツ系学校にイタリア系生徒が多数在籍していたことから、習得への意識は総じて高かったと考えられる。

田中克彦はローマ帝国、清、フランス帝国においてそれぞれの「帝国言語」、即ち帝国の拡大とともに普及していく言語は「支配・被支配の関係の外に立つ、公平な知的世界を作り出す解放の技術となる」と指摘している<sup>142</sup>。ハプスブルク君主国の事実上の公用語であるドイツ語は、田中の論にある帝国言語同様に「民族語やローカルな言語が持ち得ない圧倒的な力」を持つものであり、それを習得した人々は「全帝国規模の、そしてやがては『グローバル』な活動に参加」<sup>143</sup>していくことが可能になったといえるだろう。安田敏朗はこの田中の指摘に対し近代帝国日本の事例から「公平な知的世界」や帝国公用語の「普遍性」への疑問を提示する一方で、帝国の公用語の習得によって帝国の諸制度が利用可能になり、新たな世界への参与は可能になると述べている<sup>144</sup>。オーストリア政府の意図への注意は必要であるが、トリエステのイタリア系、スロヴェニア系、その他の言語を母語とする子供たちも、ドイツ語の習得によってより広い世界での活躍が可能になったのは確かであろう。

### 第三節 生徒とクラス編制

本節ではトリエステ国立ギムナジウムのクラス編制を考察する。学校全体として多様な生徒が在籍していても、特定の属性を持つ生徒が偏在しては生徒間の交流は望みにくい。クラス編制は多様な背景を持つ生徒が接触する機会を増減する重要な要素であり、この学校における多言語話者の共存を考える上ではこの要素の考察が必須である。

前節では8年生のクラスを扱い、同じクラス内に多様な背景（母語・出身家庭・母語）の生徒が混在し、例えばドイツ語母語話者の生徒だけを対象としたクラスのように生徒を属性で明示的に分けるような体制ではなかったことが確認できた。では他の学年についてはどうだったのだろうか。複数クラスが存在する学年についてはどのようにクラスが編制され、生徒の多様性の混在はどこまで見られたのだろうか。以下 1910/1911 年度のクラス編制について、年齢、宗派、母語、出身地、履修言語科目の5点から検討する。

---

<sup>142</sup> 田中克彦「言語と民族は切り離し得るという、言語帝国主義を支える言語理論」三浦信孝、糟谷啓介編著『言語帝国主義とは何か』藤原書店、2000、43頁。

<sup>143</sup> 田中克彦「言語と民族は切り離し得るという、言語帝国主義を支える言語理論」、43頁。

<sup>144</sup> 安田敏朗『統合原理としての国語』三元社、2006、111頁。

## 母語とクラス編制

トリエステ国立ギムナジウムには様々な母語の生徒が混在していた。1910/1911 年度は 11 の言語が見られる（表 2-16 参照、またセルビア語とクロアチア語、チェコ語とスロヴァキア語を区別すれば更に 2 つ増える可能性がある）。

表 2-16 : トリエステ国立ギムナジウムにおける母語別生徒数<sup>145</sup>

	1868/1869	1880/1881	1890/1891	1900/1901	1910/1911
ドイツ語	76	130	133	118	191
イタリア語	76	95	170	153	152
スロヴェニア語	25	57	90	137	199
セルビア・クロアチア語	-	-	27	29	18
ギリシャ語	4	9	23	7	9
チェコ語	-	-	2	1	3
フランス語	-	-	-	1	1
ルーマニア語	-	-	-	-	1
英語	-	-	-	-	1
マジャール語	-	-	-	2	2
ロシア語	-	-	-	-	1
オランダ語	-	-	1	-	-
アルメニア語	-	-	3	-	-
合計	181	291	449	448	578

しかし学校全体として多様な母語の生徒が在籍していても、母語ごとに峻別されたクラス分けがなされていないのは、むしろ言語的分離への力がはたらいっていたといえる。よって以下にトリエステ国立ギムナジウム 1910/1911 年度 1 年生から 8 年生の、各学年・クラスにおける母語別生徒数を見る（表 2-17 参照）。

表 2-17 : 各クラスの母語別生徒数 (1910/1911 年度)<sup>146</sup>

	1 年				2 年			3 年		4 年		5 年		6 年	7 年	8 年	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B						
ドイツ語	11	5	7	16	21	7	19	20	5	13	11	11	6	13	13	13	191
イタリア語	11	14	9	11	7	12	8	5	6	10	6	9	3	16	15	10	152
スロヴェニア語	8	21	20	12	13	21	6	9	23	6	12	3	14	7	12	12	199
セルビア・クロアチア語	-	1	-	2	1	2	1	1	1	1	2	-	-	3	2	1	18
ギリシャ語	2	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	3	-	-	1	-	9
チェコ語	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	3
フランス語	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
英語	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1

<sup>145</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1868/1869, S. 41; 1880/1881, S. 122; 1890/1891, S. 55; 1900/1901, S. 95; 1910/1911, S. 57.

<sup>146</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1910/1911, S. 57.

マジャール語	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ロシア語	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ルーマニア語	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
合計	35	41	36	41	43	42	34	38	35	31	32	26	23	41	44	36	578

更に上位 3 言語であるドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語を母語とする生徒数を百分率で示す（表 2-18 参照）。

表 2-18 : 各クラスの母語別生徒数の割合（1910/1911 年度）<sup>147</sup>

	1 年				2 年			3 年		4 年		5 年		6 年	7 年	8 年	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B	A	B				
独	31.4	12.2	19.4	39.0	48.8	16.7	55.9	52.6	14.3	41.9	34.4	42.3	26.1	31.7	29.5	36.1	33.1
伊	31.4	34.1	25.0	26.8	16.3	28.6	23.5	13.2	17.1	32.3	18.8	34.6	13.0	39.0	34.1	27.8	26.3
スロ	22.9	51.2	55.6	29.3	30.2	50.0	17.6	23.7	65.7	19.4	37.5	11.5	60.9	17.1	27.3	33.3	34.4

注 単位は%（以下割合を示す表では同様）。独＝ドイツ語、伊＝イタリア語、スロ＝スロヴェニア語

ここから次の点が明らかとなってくる。第 1 に、特定のクラスにドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語のいずれかを母語とする生徒が極端に固められたクラス編制（例えば「ドイツ語母語話者の生徒だけで構成されたクラス」を設けること）は行われていなかった。これら代表的 3 言語話者は混交状態にあったのである。

第 2 に、複数クラスが存在する学年においては、2-C、3-A、5-A のように「ドイツ語母語話者が 4 割から 5 割を占め、かつスロヴェニア語母語話者が他と比較して少数」であったクラスと、その一方で同学年中に 2-B、3-B、5-B のように「スロヴェニア語母語話者の生徒が 5 割から 6 割を占め、かつドイツ語母語話者が他と比較して少数」であったクラスが存在した。しかしこの場合でも、全てのクラスにドイツ語話者とスロヴェニア語話者が在籍しており、両言語の話者が接触を持たない編制にはなっていない。なおイタリア語母語話者の生徒については、各クラスともドイツ語、スロヴェニア語話者の生徒ほどの差は見られない。

第 3 に、セルビア・クロアチア語を母語とする生徒は 1 クラスに固められず、複数クラスに渡って振り分けられていた。

<sup>147</sup> 上記表 2-20 から筆者作成。

第4に、セルビア・クロアチア語を母語とする生徒よりも一層少数であるギリシャ語を母語とする生徒については、複数クラスがある場合でも各学年とも1つのクラスに固められていた（2人あるいは3人）。これにより他のいずれの言語とも遠いギリシャ語を母語とする生徒も、母語でのコミュニケーションが可能だったといえる。次に1900/1901年度、1890/1891年度について見ていく。

表 2-19-1 : 各クラスの母語別生徒数 (1900/1901 年度) <sup>148</sup>

	1年			2年		3年		4年		5年	6年	7年	8年	合計
	A	B	C	A	B	A	B	A	B					
ドイツ語	11	8	10	17	7	10	8	11	4	8	8	7	9	118
イタリア語	13	12	10	16	13	10	14	10	15	7	16	9	8	153
スロヴェニア語	7	11	8	9	24	13	13	4	7	11	11	16	3	137
セルビア・クロアチア語	-	2	2	2	1	2	1	4	2	6	2	3	2	29
ギリシャ語	1	-	-	2	-	-	-	2	-	1	-	-	1	7
チェコ語	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マジャール語	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
フランス語	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
合計	33	33	30	48	45	35	36	31	29	33	37	35	23	448

表 2-19-2 : 各クラスの母語別生徒数の割合 (1900/1901 年度) <sup>149</sup>

	1年			2年		3年		4年		5年	6年	7年	8年	合計
	A	B	C	A	B	A	B	A	B					
ドイツ語	33.3	24.2	33.3	35.4	15.6	28.6	22.2	35.5	13.8	24.2	21.6	20.0	39.1	26.3
イタリア語	39.4	36.4	33.3	33.3	28.9	28.6	38.9	32.3	51.7	21.2	43.2	25.7	34.8	34.2
スロヴェニア語	21.2	33.3	24.2	18.8	53.3	37.1	36.1	12.9	24.1	33.3	29.7	45.7	13.0	30.6

1900/1901年度については、上述した1910/1911年度の4点と同様のことがいえる。全体的にはドイツ語母語話者の生徒が1910/1911年度よりも少なく、イタリア語とスロヴェニア語に続くかたちとなっている。次に1890/1891年度を見る。

表 2-20-1 : 各クラスの母語別生徒数 (1890/1891 年度) <sup>150</sup>

	1年		2年		3年		4年		5年		6年	7年	8年	合計
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B				
ドイツ語	18	5	17	6	11	4	11	2	10	5	18	12	14	133
イタリア語	18	21	14	13	13	10	13	21	10	4	14	11	8	160
スロヴェニア語	7	16	1	13	4	11	2	6	2	6	5	8	9	90

<sup>148</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1900/1901, S. 95.*

<sup>149</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1900/1901, S. 95.*

<sup>150</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1890/1891, S. 55.*

セルビア・クロアチア語	-	2	-	2	-	4	-	2	-	9	4	1	3	27
ギリシャ語	4	-	2	-	1	-	5	-	-	-	6	3	2	23
フランス語	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	3	-	5
オランダ語	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アルメニア語	-	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	3
合計	47	44	36	35	29	29	32	32	23	24	47	38	36	442

注 史料中ではフランス語を母語とする生徒数の合計が2名と誤って表記されているほか、1-B、2-B、7年生の合計人数と全体の合計人数が同じ『年報』中の年齢、出身地、宗派の箇所の数値と一致していないが、ここでは史料通り示した。下段の合計数は筆者がこの表の数値に基づいて計算した。

表 2-20-2 : 各クラスの母語別生徒数の割合 (1890/1891 年度) <sup>151</sup>

	1年		2年		3年		4年		5年		6年	7年	8年	合計
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B				
ドイツ語	38.3	11.4	47.2	17.1	37.9	13.8	34.4	6.3	43.5	20.8	38.3	31.6	38.9	30.1
イタリア語	38.3	47.2	38.9	37.1	44.8	34.5	40.6	65.6	43.5	16.7	29.8	28.9	22.2	36.2
スロヴェニア語	14.9	36.4	2.8	37.1	13.8	37.9	6.3	18.8	8.7	25.0	10.6	21.1	25.0	20.4

1890/1891 年度は上記 2 年度と異なる傾向にある。まず全体としてこの年度はスロヴェニア語を母語とする生徒が他の 2 年度よりも少なく、その反面セルビア・クロアチア語とギリシャ語を母語とする生徒が多く在籍していた。クラス編制においては、2 クラスある学年については 5-B を例外として軒並み「ドイツ語母語話者が多数でスロヴェニア語母語話者が少数のクラス」と、反対に「スロヴェニア語母語話者が多数でドイツ語母語話者が少数のクラス」と明確に分けられる。イタリア語母語話者については上記 2 年度と同様、全体として均等に分散していた。

以上、ここに挙げたいずれの年度とも、クラス編制に際して母語が考慮されていたのは明らかである。ドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語それぞれを母語とする生徒は、各クラス内で他の言語を母語とする生徒と日常的に接する状態にあり、そこではドイツ語を中心に多言語話者間でのコミュニケーションが行われていたといえる。次に出身地の観点からクラス編制を考察する。

<sup>151</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1890/1891, S. 55.*

## 出身地

生徒の出身地から見ると、上位4つのトリエステ、キュステンラント、クライン、その他オーストリア出身者は顕著な偏在が見られず、全体的に均衡が取られていることがわかる。またそれ以外の、ハンガリーやボスニア・ヘルツェゴヴィナ出身者のように同学年中に多くても2名しか在籍していなかった生徒たちは各クラスに散在している（表2-21参照）。

表2-21：各クラスの出身地別生徒数（1910/1911年度）<sup>152</sup>

	1年				2年			3年		4年		5年		6年	7年	8年	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B	A	B				
トリエステ*	23	25	30	28	26	29	22	26	22	24	21	14	16	28	29	21	384
キュステンラント*	3	9	1	3	10	6	2	5	8	1	4	3	3	10	5	4	77
クライン	2	1	2	3	1	2	1	2	3	1	1	1	1	-	2	3	26
その他オーストリア	5	5	1	5	4	5	8	4	2	4	5	7	3	1	6	6	71
ハンガリー	1		1		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4
ボ・ヘ*	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3
ドイツ	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3
イタリア	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ルーマニア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
セルビア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2
トルコ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	-	3
ベルギー	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
ブラジル	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
合計	35	41	36	41	43	42	34	38	35	31	32	26	23	41	44	36	578

注① トリエステには周辺部が含まれる。

注② キュステンラントはトリエステを除くゲルツ＝グラディスカとイストリア

注③ ボ・ヘ＝ボスニア・ヘルツェゴヴィナ

同じことが1900/1901年度のクラス編制についてもいえる（表2-22参照）。上位4つのトリエステ、キュステンラント、クライン、その他オーストリア出身者の数はいずれのクラスとも大きな偏りがない。

表2-22：各クラスの出身地別生徒数（1900/1901年度）<sup>153</sup>

	1年			2年		3年		4年		5年	6年	7年	8年	合計
	A	B	C	A	B	A	B	A	B					
トリエステ*	26	23	22	33	26	23	24	19	14	16	26	22	15	289
キュステンラント*	2	7	4	5	14	6	9	3	11	15	8	12	4	100
クライン	-	-	1	1	-	1	-	-	2	2	-	-	-	7
その他オーストリア	3	3	2	7	1	4	3	7			2	1	4	37
ハンガリー	1	-	-	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	5
ボ・ヘ	1	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3

<sup>152</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 56.

<sup>153</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1900/1901, S. 94.

ドイツ	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2
イタリア	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	3
ブルガリア	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
エジプト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
合計	33	33	30	48	45	35	36	31	29	33	37	35	23	448

注① トリエステには周辺部が含まれる。

注② キュステンラントはトリエステを除くゲルツ＝グラディスカとイストリア

1890/1891 年度についても同様である（表 2-23 参照）。また 3 つの年度を通じて、各年度ともハプスブルク君主国国外出身者が 10-15 名程度在籍していることがわかる。

表 2-23 : 各クラスの出身地別生徒数（1890/1891 年度）<sup>154</sup>

	1 年		2 年		3 年		4 年		5 年		6 年	7 年	8 年	合計
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B				
トリエステ*	36	29	25	21	19	13	19	19	15	6	28	17	13	260
キュステンラント*	4	13	2	9	7	8	4	6	3	12	11	11	5	95
クライン	-	-	1	1	1	4	2	2	2	-	2	2	9	26
その他オーストリア	3	2	7	2	1	2	7	4	1	4	2	3	8	46
ハンガリー	2	-	-	1	-	2	-	1	-	1	-	1	-	8
ドイツ	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イタリア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
ギリシャ	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ルーマニア	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	3
トルコ	1	1	1	-	-	-	-	-	1	1	2	1	-	8
合計	47	45	36	34	29	29	32	32	23	24	47	35	36	449

注① トリエステには周辺部が含まれる。

注② キュステンラントはトリエステを除くゲルツ＝グラディスカとイストリア

以上のように、トリエステ国立ギムナジウムの在籍者はトリエステ出身者のみならず広く君主国内・外国に出自を持つ者であり、そうした生徒たちが同じクラスで接点を持っていたことが明らかとなった。次に見る宗派とクラス編制の関係は異なった傾向を見せている。

#### 宗派とクラス編制

表 2-24-1 : 各クラスの宗派別生徒数（1910/1911 年度）<sup>155</sup>

	1 年				2 年			3 年		4 年		5 年		6 年	7 年	8 年	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B	A	B				
カトリック	20	41	36	33	30	42	24	26	35	18	31	17	23	34	35	26	471

<sup>154</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1890/1891, S. 55.

<sup>155</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 57.

正教	2	-	-	3	2	-	1	2	-	1	1	3	-	1	4	2	22
ルター派	2	-	-	1	5	-	1	4	-	3	-	2	-	3	1	1	23
カルヴァン派	1	-	-	2	-	-	2	1	-	2	-	-	-	-	1	1	10
ユダヤ	9	-	-	2	5	-	6	5	-	7	-	4	-	3	3	6	51
英国国教会	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
合計	35	41	36	41	43	42	34	38	35	31	32	26	23	41	44	36	578

カトリック以外に属する生徒が存在し、かつクラスが複数である学年の場合、それら少数派は1クラスか2クラスに集中して配分されているのは明らかといえる（1-A、1-D、2-A、2-C、3-A、4-A、5-A）。これは過年度についても同様である。

表 2-24-2 : 各クラスの宗派別生徒数 (1900/1901 年度) <sup>156</sup>

	1年			2年		3年		4年		5年	6年	7年	8年	合計
	A	B	C	A	B	A	B	A	B					
カトリック	22	33	30	33	45	30	36	19	29	29	30	29	17	382
正教	3	-	-	2	-	-	-	5	-	1	1	-	1	13
ルター派	2	-	-	3	-	-	-	1	-	-	1	2	1	10
カルヴァン派	-	-	-	3	-	3	-	1	-	1	2	2	-	12
ユダヤ	6	-	-	7	-	2	-	5	-	2	3	2	4	31
合計	33	33	30	48	45	35	36	31	29	33	37	35	23	448

表 2-24-3 : 各クラスの宗派別生徒数 (1890/1891 年度) <sup>157</sup>

	1年		2年		3年		4年		5年		6年	7年	8年	合計
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B				
カトリック	37	45	28	34	24	29	22	32	19	24	36	28	30	388
ルター派	2	-	2	-	1	-	1	-	1	-	3	-	1	11
カルヴァン派	2	-	2	-	1	-	2	-	-	-	-	1	-	8
正教	4	-	2	-	1	-	6	-	2	-	7	4	3	29
ユダヤ	2	-	2	-	2	-	1	-	1	-	1	2	2	13
合計	47	45	36	34	29	29	32	32	23	24	47	35	36	449

このように 1900/1901 年度、1890/1891 年度でも、1910/1911 年度同様、少数派の生徒は各学年で 1 クラスに集中される傾向にあった。しかしこの状況は、学校内で宗派による分断があったと見なすよりも、少数派の宗派の授業（全学年に渡って宗教は必修科目であった）を少ない教員で円滑に効率よく実施するためであったと捉える方が適切ではないだろうか。また複数の宗派の生徒が在籍するクラスも多く存在することから、全体として多様な宗派の生徒がともに学ぶ環境にあったのは明らかである。

<sup>156</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1900/1901, S. 95.

<sup>157</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1890/1891, S. 55.

## 年齢・言語科目選択とクラス編制

最後に、年齢、言語科目履修とクラス編制について述べる。以下に示すようにこの二つの要素はクラス編制を行う上で考慮されていたことは読み取れるものの、「多様性の混在／交流」という視点ではあまり重要ではないため、詳細には扱わない。

ハプスブルク君主国における中等教育機関である国立ギムナジウムには、初等教育を終えた10歳の生徒を始めに、20歳程度までの生徒が中心に在籍していた。全ての生徒が順調に進級・卒業していくことができたわけではなく、上級学年には時として20歳を超えた生徒も在籍していた（表 2-25 参照）。

表 2-25 : 各クラスの年齢別生徒数 (1910/1911 年度) <sup>158</sup>

	1年				2年			3年		4年		5年		6年	7年	8年	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B	A	B				
10歳	8	4	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17
11歳	16	10	14	18	7	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	66
12歳	6	13	11	14	13	10	17	7	-	-	-	-	-	-	-	-	91
13歳	3	9	5	3	11	16	8	17	12	1	2	-	-	-	-	-	87
14歳	2	5	5	2	6	11	7	7	8	15	8	6	2	-	-	-	84
15歳	-	-	-	-	5	4	1	5	9	6	10	11	5	4	-	-	60
16歳	-	-	-	-	1	1	-	2	3	6	6	5	5	16	4	-	49
17歳	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	6	3	7	13	17	5	57
18歳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	4	12	18	39
19歳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	9	6	19
20歳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	6	8
34歳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
合計	35	41	36	41	43	42	34	38	35	31	32	26	23	41	44	36	578

各学年とも生徒の年齢には4歳から6歳の幅がある（8年生の34歳の生徒は除く）。複数クラスがある学年においてはこれら年齢差のある生徒が各クラスに分散されており、特定のクラスに年長／年少の生徒が偏在してはいなかった。表には示さないがこの傾向は1900/1901年度、1891年度においても同様である。

イタリア語とスロヴェニア語の履修がクラス編制を決定する要因の一つになるのは自明であろう。1年生、2年生では選択科目のイタリア語とスロヴェニア語を履修していない生徒が1つのクラス（1-D、2-C）に集められているのが明らかである（表 2-26 参照）。

<sup>158</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S.

表 2-26 : 言語科目履修者数 (1910/1911 年度) <sup>159</sup>

	1年				2年			3年		4年		5年		6年	7年	8年	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B	A	B				
イタリア語 (選択)	13	12	14	-	22	15	-	18	10	15	5	11	5	21	12	11	184
イタリア語 (自由)	履修不可											3	3	4	-	-	10
スロヴェニア語 (選択)	8	19	18	-	11	19	-	9	23	5	10	4	10	9	9	10	164
スロヴェニア語 (自由)	履修不可											1	1	1	2	-	5
フランス語 (レベル 1)	履修不可											5	7	2	1	-	15
フランス語 (レベル 2)	履修不可											-	-	5	5	2	12

以上、トリエステ国立ギムナジウムの各クラスでは国内・国外の多彩な出身者の交流が可能であったことが明らかとなった。各クラスは母語、宗派、年齢といった要素が周到に調整されたことを窺わせる編制となっていた。その労力のためか、基本的に2年次以降クラス数が減る時を除き「クラス替え」は行われていない。だが結果として、各クラスでは多様な背景を持つ生徒間の交流が可能となっていた。例えば「ドイツ語母語話者のみ」や「有産階級の子弟のみ」を集めたクラスを設けるような排他的編制ではなかったのである。

## 第二章 小括

トリエステ国立ギムナジウムは 1842 年に設立された古典的ギムナジウムである。1910/1911 年度の授業科目は必修科目として宗教、ドイツ語、ラテン語、ギリシャ語、地理、歴史、数学、博物学、物理・化学、哲学入門があり、イタリア語とスロヴェニア語は選択科目、フランス語、速記、歌唱、美術、体育は自由科目であった。ドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語の配当時間数は比較的多いもので、特にスロヴェニア語の授業を設けていた点はトリエステ市内の主要イタリア系中等教育機関には見られない特徴である。また近隣の国立ギムナジウムはその地域の言語状況に対応したかたちで言語科目を設けており、非ドイツ語母語話者が一面的にドイツ語だけの習得を課されていたわけではなかったことも明らかとなった。

トリエステ国立ギムナジウムの生徒数はドイツ語母語話者、イタリア語母語話者、スロヴェニア語母語話者が拮抗していた。これはイタリア系学校がいずれもイタリア語話者の独占状態であったのとは対照的である。出身家庭は公務員が最多で、それに商業関係者、大土地所有者が続いていた。非ドイツ系の生徒の保護者にはトリエステの有力者が存在し、それは

<sup>159</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 59.*

トリエステ国立ギムナジウムがドイツ語偏重ではなくイタリア語とスロヴェニア語の授業にも配慮していたことと無関係ではなかったと考えられる。同じクラスの中には富裕層と一般家庭の子弟がともに在席していた。生徒の進路は大学進学が大半であり、これはこのギムナジウムに入学する主要目的の一つであった可能性がある。そしてここではエリート再生産と同時に社会階層間の移動が発生し、充実した授業料免除制度がこれを後押ししていた。授業科目設置状況、中等教育機関における母語別話者数と合わせると、トリエステ国立ギムナジウムは特にスロヴェニア系住民の受け皿であり、更に高等教育への窓口となっていたことが明らかになった。

トリエステ国立ギムナジウムのクラス編制は特定の属性（母語や出身家庭、宗派）の生徒を別待遇ないし優遇するようなものではなく、各クラス内で多様な背景を持った生徒の接触・交流が可能となっていた。偏在のない緻密な編制は、学校側の周到な調整をうかがわせた。第二節の考察結果と合わせると、トリエステ国立ギムナジウムは他のイタリア系中等教育機関よりも「多様性の共存」という視点では上回っていたといえる。

トリエステ国立ギムナジウムの生徒のうち、とりわけドイツ語を母語としない生徒たちは、母語以外にドイツ語やイタリア語、ないしスロヴェニア語に日常的に触れる状態にあり、それは多言語状態 multilingualism、即ち社会の中に複数の言語が存在している状況であり必ずしも個々人が複数言語を使用しているわけではない状態というよりも、むしろ複言語状態 plurilingualism、即ち「ある人間が、一つ以上の言語に、たとえ部分的とはいえ開かれて、ある程度の複合的な能力を持ち、コミュニケーションのための言語を自分の第一言語だけに限定しない価値観を有している」<sup>160</sup>状態にあったといえる。

---

<sup>160</sup> 柳瀬陽介「複言語主義 (plurilingualism) 批評の試み」『中国地区英語教育学会研究紀要』第 37 号、2007、62 頁。柳瀬は多言語主義と複言語主義が混同されやすいことを述べつつ、「多言語主義は国家の社会的制度を語るために、複言語主義は個々人の教育を語るためにそれぞれ有効な用語といえるだろう」（同 62 頁）と指摘している。

### 第三章 トリエステ国立ギムナジウムの言語教育体系

前章第一節で検討したように、トリエステ国立ギムナジウムはドイツ語を教授語・必修科目とする一方、トリエステの主要言語であるイタリア語とスロヴェニア語の授業も選択科目という形で提供しており、トリエステ内の他の中等教育機関には見られない複数言語の共存空間が作り出されていたといえる。しかし、そうした制度整備がもった言語間の対等、共存といった基本姿勢は、現場で実際に行われた教育の内容に対していかなる影響を及ぼしたといえるのだろうか。そこで本章ではトリエステ国立ギムナジウムにおける言語教育の特色を明らかにする。明らかにすべきは次の点である。①トリエステ国立ギムナジウムの言語教育では、ドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語、フランス語はどこまでの教育が目指されたか。②学校全体の共通語であるドイツ語と、他の言語の間にはどのような差があったのか。③イタリア語母語話者、スロヴェニア母語話者は自らの母語を満足に学べていたといえるのか。まず第一節では①と②を検討する。続いて第二節では③を考察するため、トリエステ市立ギムナジウムにおけるイタリア語教育とリュブリャナ第二ギムナジウムにおけるスロヴェニア語教育を検討する。最後に第四節では成績を扱い、生徒がどこまで各科目に習熟していたのか、科目間の成績評価に不平等はあったのか、また母語による成績の不均衡が見られたのかを明らかにする。

#### 第一節 1910/1911 年度の言語教育

ここでは1910/1911年度のドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語の教育内容について、それぞれを比較しながら考察していく。フランス語は自由科目（履修可能なのは5年生以上）で授業時間数が大幅に少なく、授業内容も他の言語と比較すると薄かったため、本節の最後に別途述べるものとする。ドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語の授業に関しては、まず大きな前提として必修／選択の違い、授業時間と教授語の問題がある（表3-1参照）。

表3-1：授業時間数と教授語（1910/1911年度）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	合計	教授語
ドイツ語	4	4	3	3	3	3	3	3	26	全学年でドイツ語
イタリア語	4	3	3	2	2	2	2	2	20	1-2年生はドイツ語、他はイタリア語
スロヴェニア語	4	3	3	2	2	2	2	2	20	全学年でスロヴェニア語

ドイツ語以外の2言語は選択科目であり、その位置付けの差はまず授業時間数に現れているといえる。ただしイタリア語とスロヴェニア語の8年間での合計配当時間数は宗教、地理、歴史、博物学、物理・科学、哲学入門よりも多いものであり、その点ではいずれの言語科目とも重視された科目であった。ドイツ語の優位性は、イタリア語の授業が1-2年生ではドイツ語で行われていた点にも見て取れる。そしてこの2学年以外では、いずれの科目とも当該言語で授業が行われていたことは、高い水準での言語能力の養成が目指されていたことをうかがわせるものである。次に教材、授業内容、作文テーマを見ていく。

表 3-2：言語科目の教材（1910/1911 年度）<sup>161</sup>

### ドイツ語

文法教材	教材名	何語で書かれているか
全学年共通	『ドイツ語正書法規則』	ドイツ語
1-2年生	『ドイツ語文法』	ドイツ語
3-4年生	『オーストリア中等学校用ドイツ語文法』	ドイツ語
<b>講読・文学史教材</b>		
1-8年生	『オーストリア中等学校用ドイツ語読本』(1)-(8)	ドイツ語
6年生	『ドイツ文学史入門』	ドイツ語

### イタリア語

文法教材	教材名	何語で書かれているか
1-2年生	『イタリア語文法』	ドイツ語
3-4年生	『イタリア語文法』	イタリア語
<b>講読・文学史教材</b>		
1-4年生	『新・中等学校低学年生用イタリア語読本』(1)-(4)	イタリア語
5年生	『イタリア文学入門：起源と14世紀』	イタリア語
5-8年生	『中等学校用イタリア文学史入門』	イタリア語
6-8年生	『イタリア語詩・散文選集』(2)-(4)	イタリア語

### スロヴェニア語

文法教材	教材名	何語で書かれているか
1-4年生	『ヤネジッチスロヴェニア語文法』	スロヴェニア語
7年生	『古スロヴェニア語読本』	スロヴェニア語
<b>講読・文学史教材</b>		
1-6年生	『スロヴェニア語読本』(1)-(6)	スロヴェニア語
7-8年生	『スロヴェニア語文学読本』	スロヴェニア語

<sup>161</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1909/1910, S. 42-3. ここに示した教科書については、前年度である1909/1910年度の『年報』に該当クラス、書名、版、価格が記載されている。前年度『年報』で告知しておくことにより、新学期が始まるまでに、生徒は予め購入・予習することができたと考えられる。該当する全ての教科書を授業までに購入しておくことは義務であった。

文法と講読という構成について、3言語間に大差はない。しかし1年生のイタリア語文法教材『イタリア語文法』 *Italienische Gramatik* はドイツ語で書かれた教材である。これはドイツ語母語話者の生徒が優遇されていたことを示唆するが、その他の言語を母語とする生徒の受講も想定できる以上、全員が理解するドイツ語を用いるのは合理的ともいえる。一方のスロヴェニア語は1年生からスロヴェニア語の教材を使用しており、次に見る教授語の問題と合わせると、この授業は非スロヴェニア語母語話者の受講をあまり想定していないものだったと捉えることもできる。次に授業内容を見る（表3-3参照）

表3-3：言語科目の授業内容（1910/1911年度）<sup>162</sup>

### ドイツ語

学年	授業内容	教授語
1-4年生	記載なし	ドイツ語
6年生	レッシング『エミーリア・ガロッチィ』、同『ミンナ・フォン・バルンヘルム』、シラー『群盗』、同『たくらみと恋』、シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』、アイヒェンドルフ『怠け者の日記』	ドイツ語
7年生	ゲーテ『鉄の手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』、同『エグモント』、同『タウリス島のイフィゲーニエ』、シラー『群盗』、同『フィエスコの反乱』、同『たくらみと恋』、同『スペイン王子ドン・カルロス』、同『ヴァレンシュタイン』、同『マリア・ステュワート』、同『オルレアン少女』、同『ヴィルヘルム・テル』	ドイツ語
8年生	シラー『ヴァレンシュタイン』、同『メアリー・ステュアート』、同『オルレアン少女』、同『メッシーナの花嫁』、同『ヴィルヘルム・テル』、ゲーテ『ヘルマンとドロテア』、クライスト『公子フリードリヒ・フォン・ホンブルク』、グリルパルツァー『祖先の女』、同『サッフォー』、同『オトカル王の栄華と最期』、レッシング『ラオコーン』	ドイツ語

### イタリア語

学年	授業内容	教授語
1年生	形態論。助動詞と規則動詞。詩と短い文章の読解と暗唱 Auswendiglernen。前期・後期とも課題は学校で6回、家庭で3回。	ドイツ語
2年生	形態論。動詞の受動態。再帰動詞と不規則動詞。配語法[文の内部における語順についての規則]についても多少扱う。文法と内容に関する検討を加えながらの講読。詩と散文の小品の暗唱。作文課題 schriftliche Arbeiten については1年生と同様。	ドイツ語
3年生	形態論の復習。最重要の統語論的特徴。文法と内容に関する検討を加えながらの講読。詩と散文の小品の暗唱。前期・後期とも課題は学校で4回、家庭で2回。	イタリア語
4年生	統語論。比喩と文彩。韻律法 Metrik。読解教材の講読。詩と散文の小品の暗唱。課題については3年生と同様。	イタリア語
5年生	文学史入門：13、14世紀。ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオの生涯と作品を詳細に。指定の選集から関連する部分の講読。マンゾーニ『婚約者』。前期・後期とも課題は学校で4回、家庭で3回。	イタリア語
6年生	[文学史の継続]15、16世紀。重要な作家を特に重視。歴史文学、叙事詩、教訓的詩。指定の選集から関連する部分の講読（第3部）。ダンテ『神曲』より。課題については5年生と同様。	イタリア語

<sup>162</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 34-8.

7年生	[文学史の継続]16、17世紀。重要な作家を特に重視：タッソーニ、レディ、キアブレラ、フィリカ イア、バルトーリ、ダヴィラ、ベンティヴォリオ、セニエーリ、ガリレイ、マキャヴェリ、グイチャ ルディーニ、ダヴァンツァーティ、アリオスト、カロ、ベルニ。歴史文学、叙事詩、教訓的詩。指定 の選集から関連する部分の講読（第3部）。ダンテ『神曲』より。課題については5年生と同様。	イタリア語
8年生	[文学史の継続：]13・14世紀。ダンテ、ペトルルカ、ボッカチオの生涯と作品について詳細に。指 定の選集から関連する部分の講読（第4部）：ダンテ『神曲』を特に重視。一部教材の復習。課題に ついては5年生と同様。	イタリア語

### スロヴェニア語

学年	授業内容	教授語
1年生	語音論概論。語形変化を持つ品詞についての形態論。単文。スケット『スロヴェニア語読本(1)』 から詩と散文の小品の講読、暗唱、朗読。前期、後期とも[作文]課題は学校で6回、家庭で3回。	スロヴェニア語
2年生	動詞、不変化詞。重文。スケット『スロヴェニア語読本(2)』より一般的な重文。詩と散文の小品 の暗唱と朗読。作文課題については1年生と同様。	スロヴェニア語
3年生	造語論、格変化。重文と複文。暗唱と朗読。スケット『スロヴェニア語読本(3)』の講読。前期、 後期とも作文課題は学校で4回、家庭で2回。	スロヴェニア語
4年生	品詞。動詞の変化形。プロソディ Prosodie と韻律法についても少々。暗唱と朗読。スケット『スロ ヴェニア語読本(4)』の講読。作文課題については3年生と同様。	スロヴェニア語
5年生	スケット『中等学校5、6年生のためのスロヴェニア語読本』 <i>Slovenska čitanka za peti in šesti razred srednjih šol</i> を、文法と内容に関する検討を加えながら講読。朗読。前期、後期とも作文課 題は5回、そのうち学校では3回。	スロヴェニア語
6年生	5年生と同じくスケット『中等学校5・6年生のためのスロヴェニア語読本』の講読、特に個々の技 法による技巧詩 <i>Kunstpoesie</i> の読解。現代散文の講読、朗読。作文課題については5年生と同様。	スロヴェニア語
7年生	キュリロスとメトディオスの時代の文学史。スケット『古スロヴェニア語読本』の講読。近代スロヴ ェニア語文学(1765年まで)。作文課題については5年生と同様。	スロヴェニア語
8年生	指定した選集読解とともに近代スロヴェニア文学史についての授業の継続。朗読。作文課題につい ては5年生と同様。	スロヴェニア語

まず教授語の問題に着目する。1908/1909年度『年報』まで、イタリア語の3年生の授  
業内容の箇所には「当学年以降授業はイタリア語のみで行う」との明記があり、1年生と2  
年生の授業での教授語はドイツ語であったと考えられる。1910/1911年度については明示  
がないものの、全てイタリア語で行うという記述もなく、それまで同様に1、2年生につ  
いてはドイツ語で授業を実施していたと考えるのが妥当である。この点ではドイツ語母語話者  
が配慮されていたといえる。一方、スロヴェニア語の授業の教授語が全学年でスロヴェニア  
語であることは、1905/1906年度『年報』まで例年明記されている。こちらも1910/1911  
年度『年報』には記載がないが、1905/1906年度以降の『年報』に変化についての記述は  
見当たらないことから、1910/1911年度でも全学を通じてスロヴェニア語で授業を実施し  
ていたと考えられる。教材の問題と合わせると、イタリア語の方が非母語話者でも履修を始

めやすい環境にあったといえる。しかしこの背景の更なる考察には履修者の母語の問題を考える必要がある（次章）。

次に授業内容であるが、まず3言語の共通点として、いずれも上級学年では本格的な講読が実施されていたことが挙げられる。ドイツ語ではシラー、ゲーテ、イタリア語ではダンテ、ペトラルカ、ボッカチオ、そしてここに具体的に記載こそされていないものの、作文テーマの項目からはスロヴェニア語の授業でプレシェーレンやヴォドニクといったスロヴェニア文学史上の著名な作家が扱われていたことがわかる。下級学年のイタリア語とスロヴェニア語の内容は、初学者に配慮した基礎からの授業であった点で共通している。形態論 Formenlehre (Morphologie)とは語形変化や語の構成について研究する言語学の分野の1つであるが、ここでいうところの形態論は、特に活用 Konjugation (動詞の人称、性、数、法による語形変化)と曲用 Deklination (名詞、代名詞、形容詞、冠詞の人称、性、数、法による語形変化)について学ぶことを指す。1年生では規則動詞の活用から始まり、2年生で不規則動詞や再帰動詞と、段階を踏んで学習が進められていったことがわかる。特にスロヴェニア語は曲用の著しい言語であり、1年生の「語形変化を持つ品詞についての形態論」は、規範的なスロヴェニア語を読み書きする上で欠かせない内容である。ただしイタリア語には3年生で統語論を扱うことが明示されているが、スロヴェニア語の方にはない。これはスロヴェニア語が複雑な格変化を持ち語順の自由度が高いことに起因するか、格変化=形態論を扱うことに多くの時間を割かねばならなかったことによるものであろう。

暗唱・朗読の扱いはスロヴェニア語のみ異なっている。イタリア語でも1-4年生までは暗唱が明記されているが、スロヴェニア語では1-4年生での暗唱に加えて1-6年生と8年生に朗読が指定されている。更に4年生ではプロソディ<sup>163</sup>と韻律法も学んでいることから、スロヴェニア語を正しくかつ美しく読み上げられる能力の養成が重視されていたことがわかる。この背景には、学校でスロヴェニア語を話す機会はドイツ語と比較すれば少なかったこと、スロヴェニア語の規範の発展状況や文学史の状況がドイツ語・イタリア語とは異なるものであったことが影響していると考えられる。

---

<sup>163</sup> プロソディ Prosodie は言語学では主に①韻律、②韻律論、③韻律素の意味で用いられる語であるが、ここでは①韻律、即ち「個々の音固有の性質ではなく、その音に対して語や文のレベルから『かぶせられる』付加的な性質」についてであろう。つまりアクセント Akzent、イントネーション Intonation、音の長さ Länge、音質 Qualität、休止 Pause、発話速度 Sprechtempo の総体であり、韻律的特徴 prosodisches Merkmal と同義である(川島淳夫他(編)『ドイツ言語学辞典』、763頁)。ある言語を「自然に」話すためにはその言語のプロソディの獲得が不可欠である。

スロヴェニア語は地域差の大きな言語であり、現在でも「方言」の数は数十に上る。トリエステのスロヴェニア語と規範的なリュブリャーナのスロヴェニア語は異なるものであった。読み方と形態論が重視された理由はここにあるだろう。また文学史の状況は、長い伝統を持つドイツ語とイタリア語とは全く異なっていた。そもそも「スロヴェニア語」という名称が定まったのは19世紀の初め、イェルネイ・コピタル Jernej Kopitar (1789-1844) が『クライン、ケルンテン、シュタイアーマルクにおけるスロヴェニア語文法』 *Grammatik der slavischen Sprache in Krain, Kärnten und Steyermark* を出版した頃であり、現在スロヴェニア語と呼ばれるその言語には、それまでクライン語、ケルンテン語、シュタイアーマルク語、ヴィンド語といった様々な名称がつけられていた<sup>164</sup>。これはつまり統一された名称のない曖昧性を持った言語であったということでもあり、文法、辞書、正書法の確立が急務であった。それゆえ19世紀後半はむしろスロヴェニア語文学史が作られていく時代であり、必然的に分量は他の2言語よりも少ないものであったため、暗唱や朗読に時間を割く余裕があったと考えられる。次に作文テーマを見る（表3-4参照）。

表3-4：言語科目の作文テーマ（1910/1911年度）<sup>165</sup>

#### ドイツ語

<b>8年生</b>	「文化と文明の違い」、「スポーツ：心身の鍛錬の方法、自然への架け橋、健康とカへの我々の時代の憧憬の表現」、「ヴァレンシュタインの成長と性格」、「ドイツの叙事詩『ヘルマンとドロテア』」、「シラー『オルレアン少女』におけるプロローグの意義」、「シラー『メッシーナの花嫁』の場面前状況説明について」、「大事な祖国の味方になってくれ！[シラー『ヴィルヘルム・テル』の一節]」、「授業で取り扱われた劇作品の一つについて、その導入部における芸術性を証明せよ」、「グリルパルツァー『オトカル王の栄光と最期』におけるオトカル王の性格」、「友は私にとって大切であるが、敵も役に立つ。友は私に何ができるのかを教えてくれ、敵は私が何をすべきかを教えてくれる[シラー『友と敵』の一節]」
------------	---

#### イタリア語

<b>8年生</b>	「エルサレム、アテネ、ローマ」、「空の征服」、「人生とは“愛と献身”という言葉に縮約される一連の義務である <sup>166</sup> 」、「魂たちとダンテの夢」、「ソークラテースにクリトーンが勧めたことと、法が断念させたこと」、「笑い」、「神々が愛する者は天逝する（メナンドロス）」、「古代ゲルマン人の歓待」、「『神曲』概観」、「過去の弟子となることにより、未来の主となることができる」
------------	---

<sup>164</sup> Peter Herryty, *Slovene: A comprehensive grammar*. London; New york: Routledge, 2000, p. 2.

<sup>165</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1910/1911, S. 41-43.

<sup>166</sup> Cristoforo Negri, *Discorso del comm. Negri Cristoforo presidente della Società geografica italiana all'adunanza generale dei membri della medesima il 15 dicembre 1867*. Firenze: Stabilimento Civelli, 1867, pag. 31からの引用。

## スロヴェニア語

8年生	「我々の時代の英雄」、「自由論題」、「ヴルバ! 幸せな、愛しい我が故郷よ (プレシェーレン)」、「なぜヴォドニクは初めての民族的詩人なのか」、「束縛された生における義務と許容」、「プレシェーレンとその友人」、「勝者の大義は神を喜ばせ、敗者の大義はカトーを喜ばせた (ルカヌス)」、「オーストリア国民、特にスロヴェニアの国家的・社会的・文化的生 活に対する 1866 年の重要性」
-----	--

まず共通点として、いずれの言語でも本格的なテーマが課され、8年生では高い水準での言語運用力が要請されていたことが読み取れる。この点で3言語の間に差はない。続いて具テーマの特徴を見ていくと、まずドイツ語ではほとんどが講読で扱った教材に関する文学的テーマであり、シラー関連のテーマが目立っている。イタリア語の作文テーマはギリシャ・ローマに関するものが多いが、ドイツ語のテーマの統一感と比較するとやや雑駁である。

これら2言語のテーマと対照的に、スロヴェニア語の作文テーマにはナショナルな性格のものが目立つ点が顕著である。ヴァレンティン・ヴォドニク Valentin Vodnik (1758-1819) はスロヴェニア語の普及に尽力し、またスロヴェニア語による初の新聞を発行した人物として有名である。フランツェ・プレシェーレン France Prešeren (1800-1849) はスロヴェニアで最も著名な詩人の一人であり、作品の『乾杯の歌』*Zdravljica* は現在のスロヴェニア国歌として使用され、リュブリャーナの中心広場の一つはプレシェーレン広場と名づけられている。1866年はハプスブルク君主国が普墺戦争に完敗し国家体制の大きな転換、つまり非ドイツ系ネーションの権利拡大を迫られた年であり、これは翌年のアウスグライヒに直結している。また普墺戦争の結果、ハプスブルク君主国領であったヴェネト地方<sup>167</sup>はイタリアに割譲されている。ドイツ語とイタリア語の作文のテーマが政治色の薄いものであったのに対し、スロヴェニア語ではこうしたテーマが挙がっているのは重要である。なぜなら序論で述べたようにこの時期のトリエステのイタリア系住民とスロヴェニア系住民は時に権利を巡って対立することがあり、その点ではこのテーマは一步踏み込んだ内容であったからである。しかしドイツ語母語話者にとってゲーテ、シラーが重要であり、イタリア語母語話者にとってダンテ、ペトルルカ、ボッカチオが重要であるように、スロヴェニア語母語話者にとってプレシェーレンやヴォドニクはスロヴェニア語を学ぶ上で不可欠な人物であった。トリエステ国立ギムナジウムの1910/1911年度『年報』中にスロヴェニア語の講読作品は明示されていないが、同じ教科書を使用していたリュブリャーナ第二ギムナジウムの授業内容を見る

<sup>167</sup> ウィーン会議でハプスブルク君主国領となったロンバルド=ヴェネト王国のうち、ロンバルディアは第二次イタリア統一戦争でサルディニアに占領され、1861年にイタリア王国領として既に独立していた。

と（後述）、プレシェーレン他具体的な作家の名前を確認できる。このように3言語ともに「民族的」作家が取り上げられている点では共通しており、この点では言語間に「差別」はなかったといえる。

以上のように、全体としてトリエステ国立ギムナジウムにおけるドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語の教育はいずれも高度な言語能力の涵養を目指したものであり、ドイツ語と他2言語の間に際立った扱いの差はなかったことが明らかとなった。ただし、「全員が理解できる言語」としての面があったとはいえ、教材と教授言語の面ではドイツ語・ドイツ語母語話者が比較的優位な立場にあった。これは自由科目の指定教材でも裏付けられる。

1910/1911年度の自由科目の教材はイタリア語で『ドイツ人学習者用注釈付きイタリア語詩・散文集』*Raccolta di poesie e prose italiane. Annotate ad uso dei tedeschi*、スロヴェニア語で『中等学校・師範学校用スロヴェニア語入門』*Slowenisches Elementarbuch für Mittelschulen und Lehrerbildungsanstalten*、『中等学校・師範学校ドイツ人学生用スロヴェニア語読本』*Slowenisches Lesebuch für Deutsche an Mittelschulen und Lehrerbildungsanstalten*、『スロヴェニア語辞典』*Slowenisches Wörterbuch*、フランス語で『ギムナジウム用フランス語教程（1）』*Lehrgang der französischen Sprache für Gymnasien, I*と、いずれもドイツ語が理解できることを前提とした教材であった<sup>168</sup>。

本節の最後にフランス語の授業について述べる。フランス語は自由科目であり、他の言語とは扱いが異なっていた。

#### フランス語の授業時間、教材、授業内容（1910/1911年度）<sup>169</sup>

##### 授業時間

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	合計	教授語
フランス語	-	-	-	-	2	2	2	2	8	全学年でドイツ語

##### 教材

レベル	教材名	何語で書かれているか
1-2	ファイヒティンガー『ギムナジウム用フランス語教程（1）』	ドイツ語

##### 授業内容

レベル	授業内容	教授語
1	講読、形態論、統語論基礎、会話練習	ドイツ語

<sup>168</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1909/1910, S. 43-4, 46.

<sup>169</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1909/1910, S. 39.

2	形態論の完成。統語論原理、会話練習。講読：スクリーブ『水のガラス』、ドーデ『撞球』、同『写真家』、モーパッサン『ソヴァージュばあさん』、トゥリエ『聖ニコラ』	ドイツ語
---	--	------

5年生以上が履修可能であった自由科目のため、授業時間数では他の言語と大差がついている。教材と教授語はドイツ語となっている。多少の講読はあるものの作文は課されず、高度な読解力や作文力の獲得が目指されたものではなかったといえる。しかし会話練習はいずれのレベルでも設けられていることから、コミュニケーションのためのフランス語を学ぶ側面も強かったと考えられる。このようにトリエステ国立ギムナジウムにおいてフランス語は比較的重視されていなかった一方で、トリエステ市内のイタリア系中等教育機関ではフランス語はいずれの学校でも重視されていた(表2-3参照)。前述の通り、こちらの学校ではスロヴェニア語は授業科目自体が設置されていない。このフランス語とスロヴェニア語の扱いの差異の原因は2点想定できる。1つはスロヴェニア系住民にとってのトリエステ国立ギムナジウムの重要性和、イタリア系中等教育機関におけるスロヴェニア系住民の「冷遇」を端的に反映したものではないだろうかということである。そしてもう1つは、トリエステ国立ギムナジウムはイタリア語とスロヴェニア語を選択科目として設けていたために、フランス語を必修科目ないし選択科目とする時間的余裕がなかったという現実的要請である。

次節ではこれまで検討してきたトリエステ国立ギムナジウムのスロヴェニア語教育、イタリア語教育について、近隣校における授業時間や教育内容と比較することで、相対的な評価を試みることにする。まずはスロヴェニア語について検討する。ここで比較対象にはリュブリャーナ第二国立ギムナジウムを選択する。現スロヴェニア地域の主要都市であるリュブリャーナ、ツェリエ、マリボル、ノヴォ・メストには国立ギムナジウムが置かれ、リュブリャーナには第一ギムナジウムから第三ギムナジウムまで設置されていた。このうち最もスロヴェニア語教育が充実していたと考えられるのは、教授語がスロヴェニア語であり、かつスロヴェニア系生徒が多数派を占めていたリュブリャーナ第二国立ギムナジウムである。

## 第二節 リュブリャーナ第二国立ギムナジウムのスロヴェニア語教育との比較

現在スロヴェニア共和国の首都となっているリュブリャーナはクラインの中心都市の一つであり、スロヴェニア系住民の拠点でもあった。リュブリャーナ第二国立ギムナジウムでの教授語については、1900年8月4日の教育省令第22102号、1908年9月22日の同

27245号、同年12月14日の同40914号、1909年の39330号を合わせ、1910/1911年度には以下のように実施することが定められていた。

- ①下級4学年においてはドイツ語の授業以外教授語は全てスロヴェニア語とする。
- ②第5学年においては宗教、スロヴェニア語、数学、博物学の授業ではスロヴェニア語を教授語とし、それ以外の授業ではドイツ語を教授語とする。
- ③第6学年、第7学年、第8学年においてはスロヴェニア語の授業を除きすべての授業でドイツ語を教授語とするが、第6学年では宗教と博物学の授業ではスロヴェニア語が教授語として維持されることが教育相との交渉により決定した。<sup>170</sup>

つまりトリエステ国立ギムナジウムとは異なり、リュブリャーナ第二ギムナジウムはスロヴェニア語による教育を主体とする学校であった。リュブリャーナの位置するクラインはスロヴェニア語話者が圧倒的多数を占める地域であり、1910年のドイツ語話者は僅か5.36%に過ぎなかった（表3-5参照）。

表3-5：クラインにおける日常語話者数（1880年-1910年、10年毎）<sup>171</sup>

日常語	1880年		1890年		1900年		1910年	
ドイツ語	29,392	6.15%	28,033	5.66%	28,177	5.29%	27,915	5.36%
チェコ語	244	0.05%	336	0.07%	390	0.08%	750	0.15%
ポーランド語	21	-	27	-	25	-	89	0.02%
ルテニア語	-	-	11	-	3	-	19	-
スロヴェニア語	447,366	93.67%	466,269	94.07%	475,302	94.25%	490,978	94.36%
セルビア・クロアチア語	266	0.06%	659	0.13%	175	0.03%	205	0.04%
イタリア語	317	0.07%	319	0.07%	259	0.05%	369	0.07%
ルーマニア語	1	-	-	-	-	-	-	-
マジャール語	-	-	-	-	-	-	2	-
総計	477,607		495,654		504,332		520,327	

この状況を反映し、リュブリャーナ第二国立ギムナジウムではスロヴェニア語母語話者が98.34%とほぼ独占状態にあった（表3-6参照）<sup>172</sup>。

<sup>170</sup> Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani, 1910/1911, Str. 29.

<sup>171</sup> Brix, Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation, S. 441.

<sup>172</sup> もっとも、リュブリャーナにはドイツ語を主要教授語とするリュブリャーナ国立ドイツギムナジウムがあり、そこはドイツ語母語話者が95.88%を占め、ほぼ独占状態にあった。

表 3-6 : 母語別生徒数 (1910/1911 年年度) <sup>173</sup>

	リュブリャーナ第二国立ギムナジウム	トリエステ国立ギムナジウム
ドイツ語	1	191
イタリア語	-	152
スロヴェニア語	417	199
セルビア・クロアチア語	3	18
ギリシャ語	-	9
チェコ語	3	3
フランス語	-	1
ルーマニア語	-	1
英語	-	1
マジャール語	-	2
ロシア語	-	1
合計	424	578

以下リュブリャーナ第二国立ギムナジウムのスロヴェニア語の教育内容を検討していく。  
 まず必修/選択についていえば、リュブリャーナ第二国立ギムナジウムではスロヴェニア語は必修科目obvezni predmetiの一つであり、生徒全員が履修する科目であった。しかし週当たり授業時間数は1年生で3時間、他が2時間の合計18時間で、ドイツ語（同30時間）を下回るのみならず、トリエステ国立ギムナジウムの週当たり授業時間数（同20時間）も下回っている。実際には上述の通り授業の主要教授語がスロヴェニア語であるため、無論リュブリャーナ第二国立ギムナジウムの生徒の方がスロヴェニア語と接する時間は多いとはいえ、トリエステ国立ギムナジウムのスロヴェニア語の授業は時間数では十分に配慮されていたことがわかる。次に教材を比較する（表3-7参照）。

表 3-7 : スロヴェニア語の教材比較<sup>174</sup>

リュブリャーナ第二国立ギムナジウム		トリエステ国立ギムナジウム	
文法教材	教材名	文法教材	教材名
1-8 年生	『ヤネジッチスロヴェニア語文法』	1-4 年生	『ヤネジッチスロヴェニア語文法』
		7 年生	『古スロヴェニア語読本』
講読・文学史教		講読・文学史教材	
1-6 年生	『スロヴェニア語読本』(1)-(6)	1-6 年生	『スロヴェニア語読本』(1)-(6)
7-8 年生	『スロヴェニア語文学読本』	7-8 年生	『スロヴェニア語文学読本』

両校の教材がほぼ一致しているのは一見して明らかであり、むしろトリエステ国立ギムナ

<sup>173</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 57; Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani, 1910/1911, str. 51 より作成。

<sup>174</sup> Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani, 1910/1911, str. 48-49.

ジウムの方が7年生で『古スロヴェニア語読本』を加えている程である。教材面でトリエステ国立ギムナジウムのスロヴェニア語教育は全く劣らないものだったといえる。続いて授業内容を見る（表3-8参照）

表3-8：スロヴェニア語の授業内容<sup>175</sup>

学年	授業内容	教授語
1-4年生	記載なし	スロヴェニア語
5年生	叙事詩。指定した講読教材。〈暗唱〉『美女ヴィダ』、『ムテツ・オソイスキー』、『サムイル皇帝の死』、『エフタの誓い』、『逃亡の王』、デテラ『ペガムとラムベルガル』	スロヴェニア語
6年生	『サヴィツァの洗礼』、『ヴルフのマルティン・クルパン』、特にプレシェーレンの詩から叙情詩的・教訓的作品。〈クロアチア語の講読〉ノヴァコヴィッチ『コソヴォ』〈家庭学習〉【口述練習】に同じ。	スロヴェニア語
7年生	『フライジング文書』、ポフリンまでの文学史。〈クロアチア語講読〉マジュラニッチ『スマイル・アガ・チェンギッチの死』〈家庭学習〉デテラ『ペガンとラムベルガル』（その他は【口述練習】に同じ）	スロヴェニア語
8年生	プレシェーレン『詩集』、レウスティクとストウリタルの作品のいくつかと、指定した教材の講読。	スロヴェニア語

1-4年生についての記述はないので、高学年についてのみ比較する。講読についてはトリエステ国立ギムナジウムの『年報』には記載がなかった具体的な作品名が詳述されている<sup>176</sup>。しかし両校とも教材には『スロヴェニア語読本』(1)-(6)と『スロヴェニア語文学読

<sup>175</sup> *Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani*, 1910/1911, str. 34-35.

<sup>176</sup> 5年生の暗唱に挙げられているのはいずれも民話や歴史に題材を求めた作品となっている。史料中では作者名が省略されているので補うと、プレシェーレン『美女ヴィダ』、アシュケルツ Anton Aškerc 『ムテツ・オソイスキー』、ヴィクトル・シヨンツ Viktor Šonc (1877-1964) 『逃亡の王』はいずれもスロヴェニアの民話・伝説で、ヨシブ・パリアルッチ Josip Pagliaruzzi (1859-1885) の『サムイル皇帝の死』は東ローマ帝国のバシレイオス二世と争った第一次ブルガリア帝国皇帝サムイル Самуил (958-1014) を描いている。シモン・グレゴルチッチ Simon Gregorčič (1844-1906) 『エフタの誓い』は旧約聖書の士師記を題材としている。最後のフラン・デテラ Fran Detela (1850-1926) 『ペガムとラムベルガル』はチェコのヤン・ヴィトヴェツ Jan Vitovec とスロヴェニアのクリシュトフ・ラムベルガル Krištof Lambergar の戦いを描いたスロヴェニア民話である。6年生のプレシェーレン『サヴィツァの洗礼』もスロヴェニア民族の祖先のキリスト教化の時代を舞台とした叙事・叙情詩である。7年生に挙げられている『フライジング文書』は1803年、ドイツのフライジング Freising で発見された羊皮紙手稿で、成立は10世紀末から11世紀と推定され、現存する最古の古代スラヴ語文献の写本と同時期である。金指久美子によれば、この文書の研究に際しては「スラヴ諸国の研究者の中に愛国主義的ともいえるべきバイアスがかかってしまうことは珍しくなく、チェコ人研究者、スロヴァキア人研究者、スロヴェニア人研究者は各々チェコ語史、スロヴァキア語史、スロヴェニア語史の中にこの文献を位置づけようと取り組んできた。現代に至るまで統一された結論は出ておらず、この文書を古代スラヴ語の唯一のスロヴェニア・ヴァージョンとしてよいのか、それとも最古のスロヴェニア語文献とすべきなのかは断定できない。（金指久美子「古代スラヴ語研究史における『フライジング文書』」東京外国語大学『東京外国語大学論集』第86号、2013、1-18頁参照。）8年生の授業内容でプレシェーレン『詩集』«Poezije»と記されているのは、1847年に『フランツ・プレシェーレン博

本』が指定されているので、実際のところ同様の作品群を扱っていたと考えられる。

相違点は2つ挙げられる。一つ目は、リュブリャーナ第二国立ギムナジウムでは6年生と7年生でクロアチア語の作品の講読が組み込まれていた点である<sup>177</sup>。クロアチア語母語話者はこの年度3名しか在籍しておらず、その上1-B、3-A、5年生に一人ずつであり、6年生のクラスには非スロヴェニア母語話者はチェコ語母語話者が1名いるのみであった（表3-6参照）。このためこの授業は純粋にスロヴェニア語母語話者の生徒を対象にしたものといえる。もう一つの相違点として、リュブリャーナ第二国立ギムナジウムのスロヴェニア語の授業には「口述練習」という項目が設けられていた点が挙げられる（表3-9参照）。

表 3-9 : スロヴェニア語の「口述練習」<sup>178</sup>

学年	授業内容	教授語
5年生	A・ガブロウシエク「トルストイ」、J・ガブロウシエク「15世紀スロヴェニアにおけるトルコ戦争」、グロバツキ「音楽について」、コザク「ピリンスキ『モロク』」と「トルストイの記憶（訃報に接して）」、プリウシエク「スロヴェニア農民の社会闘争と改革」、ジュヴォケリ「カルテルとトラスト」	スロヴェニア語

「口述練習」はリュブリャーナ第二国立ギムナジウムのドイツ語の授業でも同様に設けられている。この背景には、リュブリャーナ第二国立ギムナジウムにおける生徒の母語の比率と教授語の問題があると考えられる。リュブリャーナの位置するクラインはスロヴェニア語話者が人口の94%を占める圧倒的なスロヴェニア語優勢地域であり（上記表3-8参照）、

士詩集』Poezije dr. Franceta Prešernaとして発表された詩集と考えられる。またレウスティクとストウリタルはそれぞれフラン・レウスティク Fran Levstik (1831-1887)とヨシブ・ストウリタル Josip Stritar (1836-1923)を指すと考えるのが妥当であろう。

<sup>177</sup> 『スマイル・アガ・チェンギッチの死』はボスニアに実在したオスマン帝国将軍スマイル・アガ・チェンギッチ Smail-aga Čengić (1780-1840)を描いた作品で、作者イヴァン・マジュラニッチ Ivan Mažuranić (1814-1890)はクロアチアの作家、言語学者で、1873-1880年にはクロアチア・スラヴォニア総督 ban を務めていた。『コソヴォ』を書いたストヤン・ノヴァコヴィッチ Stojan Novaković (1842-1915)は作家、歴史家、政治家と多才な人物であり、1895-1896年、1909年にはセルビア王国首相も務めた。

<sup>178</sup> *Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani*, 1910/1911, str. 36. ここで目立って取り上げられているトルストイは1910年11月20日（グレゴリオ暦）に没しており、A・ガブロウシエクが「トルストイ」、コザクが「トルストイの記憶（訃報に接して）」と題して発表しているのはそれを受けてのものであろう。他にも5年生のドイツ語クラスで「レオ・トルストイ」、6年生のスロヴェニア語クラスで「レフ・トルストイ」、「トルストイ『幸せな家庭』」と合計5件の発表があった。ピリンスキは現ウクライナ・リシアンカ生まれでハプスブルク君主国のみならずドイツとアメリカでも活躍したレオ・ピリンスキ Leo Birinski (1884-1951)を指す。

このギムナジウムでは 1910/1911 年度、全生徒 424 名のうち 417 名がスロヴェニア語を母語としていた。これはドイツ語話者・イタリア語話者・スロヴェニア語話者がほぼ拮抗していたトリエステ国立ギムナジウムの状況とは明確に異なるものである。トリエステ国立ギムナジウムの場合、母語の異なる生徒同士は学校内外でドイツ語を用いてコミュニケーションを取っていたと見るのが妥当であるが、スロヴェニア語を母語とする生徒が大多数を占めるリュブリャーナ第二国立ギムナジウムでは、生徒が日常的にドイツ語を話す機会は遥かに乏しかったのである。このようにドイツ語の授業で「口述練習」が設けられていた理由は推察できなくもないが、スロヴェニア語の授業でも設けられていたのが何のためであったのかは判然としない。しかしいずれにせよ、この項目によって生徒の口頭での表現力に磨きがかけられていたのは確かであろう。最後に作文テーマを見る（表 3-10 参照）。

**表 3-10 : スロヴェニア語の作文テーマ (1910/1911 年度)** <sup>179</sup>

8 年生	<家庭学習> 「人生は天命を求める。母は息子が無慈悲に立ち去るのを無力に見つめるのみである (ジュパンチッチ)」、「窓」、「私の地域のフランス帝国イリュリア州の記憶」。<授業> 「ジュパンチッチの『ドゥマ』」、「ツォイス：スロヴェニア人と外来文化の仲介者」、「我々の精神的な生活における山」、卒業試験。
------	---

トリエステ国立ギムナジウムとは異なり、取り立てて目を引くテーマは挙げられていない。内容としてはいずれも高いスロヴェニア語力が求められるものであり、その点では両校とも一致している。

以上に考察したように、トリエステ国立ギムナジウムにおけるスロヴェニア語教育は、スロヴェニア語優勢地域であるリュブリャーナの国立ギムナジウムにおける教育に決して引けを取らないものであったことが明らかとなった。授業時間数ではむしろトリエステ国立ギムナジウムが上回っており、こちらのスロヴェニア語母語話者の生徒も十分に母語の能力を高めることができたと考えられる。ただしリュブリャーナ第二国立ギムナジウムでは【口述練習】の項目が設けられ口頭でのスロヴェニア語力に磨きがかけられていた点と、クロアチア語の講読を設けていた点で異なっていることも明らかとなった。

<sup>179</sup> *Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani*, 1910/1911, str. 38. 『ドゥマ』はウクライナ起源の弾き語り叙事詩であり、多数の作家・詩人が作品を残している。ジュパンチッチの『ドゥマ』はその中でも著名なものの一つに数えられる。ツォイスはトリエステ生まれのスロヴェニア系貴族であり自然科学で功績を上げたジグムント・ツォイス Sigmund Zois von Edelstein (1747-1819)を指すと考えられる。

### 第三節 トリエステ市立上級ギムナジウムのイタリア語教育との比較

一連の比較の最後に、イタリア語を教授語としていたトリエステ市立上級ギムナジウムにおけるイタリア語教育を考察する。生徒の母語で比較すると、この学校は 96.7%がイタリア語を母語とする生徒で占められていた（表 3-11 参照）。

表 3-11 : 母語別生徒数 (1910/1911 年度)<sup>180</sup>

	トリエステ市立上級ギムナジウム	トリエステ国立ギムナジウム
ドイツ語	8	191
イタリア語	669	152
スロヴェニア語	4	199
セルビア・クロアチア語	2	18
ギリシャ語	7	9
チェコ語	-	3
フランス語	-	1
ルーマニア語	-	1
英語	2	1
マジャール語	-	2
ロシア語	-	1
合計	692	578

イタリア語の授業の教授語は、トリエステ国立ギムナジウムでは 1-2 年生ではドイツ語だったのに対し、こちらのギムナジウムでは 1 年生からイタリア語であった。科目の区分は選択科目ではなく必修科目である。週当たり授業時間数は 1 年生で 5 時間、2 年生は 4 時間、他が 3 時間の合計 27 時間で、トリエステ国立ギムナジウムの全学年の週当たり授業時間数（合計 20 時間）を上回っていた。次に教材を見る（表 3-12 参照）。

表 3-12 : イタリア語の教材 (1910/1911 年度)<sup>181</sup>

トリエステ市立上級ギムナジウム		トリエステ国立ギムナジウム	
文法教材	教材名	文法教材	教材名
1-4 年生	『オーストリア=ハンガリー帝国中等学校用 イタリア語文法』	1-2 年生	『イタリア語文法』*ドイツ語で記述
		3-4 年生	『イタリア語文法』*イタリア語で記述
講読・文学史教材		講読・文学史教材	

<sup>180</sup> *Annuario del Ginnasio Superiore Comunale di Trieste*, 1910/1911, pag. 33; *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1910/1911, S. 57 より作成。

<sup>181</sup> *Annuario del Ginnasio Superiore Comunale di Trieste*, 1910/1911, pag. 78.

1-4 年生	『新・中等学校低学年生用イタリア語読本』(1)-(4)	1-4 年生	『新・中等学校低学年生用イタリア語読本』(1)-(4)
5 年生	『イタリア語詩・文学選集』『文学概論』	5 年生	『イタリア文学入門：起源と 14 世紀』
6 年生	『近代作家散文選集』	5-8 年生	『中等学校用イタリア文学史入門』
7-8 年生	『イタリア語詩・散文選集』(3)-(4)	6-8 年生	『イタリア語詩・散文選集』(2)-(4)

トリエステ国立ギムナジウムとの相違点として、まず 1-4 年生で使用する文法書がイタリア語で書かれた『オーストリア=ハンガリー帝国中等学校用イタリア語文法』*Grammatica italiana, ad uso delle scuole medie della monarchia austro-ungarica* であったことが挙げられる（前者は 1-2 年生ではドイツ語で書かれた『イタリア語文法』を使用。もっともイタリア語母語話者が圧倒的多数を占めるこの学校でドイツ語教材を用いてイタリア語の授業をすることに合理性はない）。他の学年の教材も一部は異なっているものの、上級学年になるにつれて講読が重視され、最終的には両校とも『イタリア語詩・散文選集』*Antologia di poesia e prosa italiana* を用いている点では一致している。次に具体的な授業内容を見る。

表 3-13：イタリア語の授業内容（1910/1911 年度）<sup>182</sup>

学年	授業内容	教授語
1 年生	<文法> 品詞。形態論の基礎概念。単文・複雑な文 <i>proposizione complessa</i> についての統語論。等位関係と従属関係の説明と練習問題。正書法の規則と練習問題。<講読> 教科書から様々な詩・散文の説明と復習。一部は暗唱と朗読。	ドイツ語
2 年生	<文法> 形態論の規則的な事項の復習と完成。曲用、性、活用における最重要の不規則な事項。1 年生で扱わなかった代名詞と数詞、副詞、文、接続詞、間投詞。対格、不定法、絶対奪格 <i>ablativo assoluto</i> <sup>183</sup> 、その他統語論に関する重要事項。<講読と翻訳> 指定した教材に基づく。	ドイツ語
3 年生	<文法> 複雑な文 <i>proposizione complessa</i> と読点に関する統語論。論理的分析練習。<講読> 指定した教材の分析と解説。特に思考の順番と連続性、言語学的特性に着目。扱った作家に関する簡単な説明。暗唱と朗読。	イタリア語
4 年生	<文法> 時制と法。文彩と比喻。文体に関して。プロソディと韻律論の初歩。<講読> 指定した教材の詩・散文の読解と解説、一部は暗唱。扱った作家に関する簡単な説明。マンゾーニ『婚約者』	イタリア語
5 年生	<講読> 13、14 世紀の主要な作家の詩・散文の講読。アリオスト『狂えるオルランド』。学習した作家の伝記。	イタリア語
6 年生	<講読> 15、16 世紀。指定した教材の読解。アルベルティ、プルチ、ポイアルド、ロレンツォ・デ・メディチ、ポリツィアーノ、サンナツァロ、ブルーニ、サヴォナローラ、レオナルド、マキャヴェッリ、ベンボ、アリオスト、カスティリオーネ、グイチャルディーニ、ベルニ、チェッリーニ、ヴァサリ、タッソ、他少々。扱った作家の伝記。イタリアにおける演劇の発展と騎士道物語風の詩に関	イタリア語

<sup>182</sup> *Annuario del Ginnasio Superiore Comunale di Trieste*, 1910/1911, pag. 7-18.

<sup>183</sup> ラテン語の *ablativus absolutus*、英語の分詞構文に相当する事項を指す。

	する概論。前期・後期とも毎週1時間ダンテ『神曲』「地獄篇」の講読。〈家庭学習〉タッソ『解放されたエルサレム』〈練習〉暗唱と朗読。	
7年生	〈講読〉16、17世紀。この2世紀の作家の作品をキオプリス『イタリア語詩・散文選集(3)』で講読。マキャヴェッリ『君主論』、チェッリーニ『自伝』、アリオスト『狂えるオルランド』、タッソ『解放されたエルサレム』の講読。毎週1時間ダンテ『神曲』の講読。「地獄篇」を読み切り、「煉獄篇」の一部まで。暗唱と朗読の練習。	イタリア語
8年生	〈講読〉キオプリス『イタリア語詩・散文選集(4)』の講読。イタリア語とイタリア文学の起源。14、15世紀。マンゾーニの死までの文学史を復習。〈ダンテ〉「煉獄篇」終盤と「天国篇」序盤。〈レポート〉家庭学習で読んだ作品について。	イタリア語

全体としてトリエステ国立ギムナジウムの内容と一致している。ほぼ全員がイタリア語母語話者の生徒を対象としていながらも、低学年では文法の基礎が重視され、着実にイタリア語を学んでいた様子が見て取れる。第一章で述べたようにトリエステの「イタリア語」は標準イタリア語と差異が大きかった。丁寧な授業構成は規範的なイタリア語の習得が重視されていた証左である。上級学年で扱われている作家の傾向と、ダンテが最重要視されている点はトリエステ国立ギムナジウムと同様である。次に作文テーマを見る(表3-14参照)。

表3-14：作文テーマ(1910/1911年度)<sup>184</sup>

8年生	〈授業〉[それぞれ3つの中から選択]1. 「民衆に語りかけるデモステネス」、2. 「ソークラテース」、3. 「聖フランチェスコと社会的平和」；1. 「鉄の文明」、2. 「音と色」、3. 「家族」；1. 「少人数の思考、多数の行為」、2. 「田園詩」、3. 「力」；1. 「理性の力」、2. 「民族の詩」、3. 「光と生」；1. 「芸術は歴史の証人」、2. 「古典」、3. 「幸福な孤独よ、ただ幸福だけが！Beata solitudo, sola beatitudo」〈家庭学習〉「労働賛美」、「取り返しのつかない時間(アリオスト『狂えるオルランド』XXXIV, 76とレオパルディ『祭りの日の宵』を参考に)」、「カルロ・ゴルドーニの喜劇」 <sup>185</sup>
-----	--

トリエステ国立ギムナジウムと同じく、あまり統一感のないテーマが並んでいる。しかしこれは、当時のトリエステがリソルジメントやイッレデンティズモを背景としながらも、トリエステ国立ギムナジウムのスロヴェニア語の作文テーマに見られたような政治的テーマはほぼ挙がっておらず、そうした問題を積極的に考えさせる意図ははたらいていなかったこと

<sup>184</sup> *Annuario del Ginnasio Superiore Comunale di Trieste, 1910/1911, pag. 25. 8-A、8-Bと2クラスあるが本稿では8-Aだけを扱う。*

<sup>185</sup> カルロ・ゴルドーニ Carlo Goldoni (1707-1793) は今もトリエステにゴルドーニ広場 Piazza Goldoniの名を残す、ヴェネツィア生まれの著名な劇作家である。

を意味する。次に示すレポートのテーマを見ても、この傾向は同様である（表 3-15 参照）。レポートは 6 年生、7 年生に課されていた。

表 3-15 : レポート (1910/1911 年度)<sup>186</sup>

<b>7 年生</b>	[ ( ) 内は書いた生徒を指す ] 「フィレンツェ包圍」(ケニヒ)、「ラファエロ : その投影」(アポッロ一ニオ)、「歴史家とマキャヴェッリ」(アンジェリ)、「16 世紀の劇場」(ヒルティ)、「ミケランジェロ : その投影」、「テオフィロ『バルドゥス』」(デヴェスコヴィ)、「16 世紀の叙情詩人」(ジェス)、「『トルカート・タッソー』と苦しみ」(コチェアンチヒ)
-------------	---

このように広く「イタリア」の歴史に因んだテーマで占められているが、ナショナルな感覚を刺激するもの、即ち近代史やリソルジメント、イッレデンティズモに強く関係するものはなく、作文テーマ同様、「反オーストリア的」なテーマで占められるような内容ではない。

以上のように、トリエステ市立上級ギムナジウムのイタリア語教育は高い水準のイタリア語力の養成を目指したものであった。一方、トリエステ国立ギムナジウムのイタリア語教育は授業時間数で及ばず、1-2 年生ではドイツ語で授業が実施されていた。しかし全体としては、教材、講読、作文の内容から判断するに、トリエステ市立上級ギムナジウムのイタリア語教育と十分に比肩するものであったことが明らかとなった。まず教材については、少なくとも 3-4 年ではイタリア語で書かれた教科書を用いており、さらに高学年で用いられる講読の教科書はトリエステ国立ギムナジウムも市立上級ギムナジウムと同種のものを用いていたことから、最終的に到達が期待される水準に遜色がないことが分かる。また作文のテーマに関しても大きな相違は見られず、政治色は薄く、ギリシア・ラテン文学を意識したようなものが見られ、両校が目指した水準が同程度のものであったことが推察できよう。したがって、トリエステ国立ギムナジウムのイタリア語母語話者の生徒は、自らの母語を十分に涵養できる可能性を十分に持っていたといえる。

ここまで、トリエステ国立ギムナジウムの言語科目はいずれも高い水準の運用力を目指したものであり、学校の制度面としては言語間の平等・均衡が配慮されていたことを明らかにしてきた。次節では生徒の成績を考察し、各言語科目における実際の到達度を検証する。また言語科目以外の教科の成績を見ることにより、非ドイツ語母語話者とドイツ語母語話者母語との間に学力格差があったのかどうかも明らかにできる。

<sup>186</sup> *Annuario del Ginnasio Superiore Comunale di Trieste, 1910/1911, pag. 54.* 括弧内は書いた生徒の名前。

#### 第四節 成績と生徒の背景

本節ではトリエステ国立ギムナジウムの生徒について、まず言語科目の成績の状況を見る（表 3-16-1 参照）。1910/1911 年度の成績評価は優 sehr gut、良 gut、可 genügend、不可 nicht genügend の 4 段階である。

表 3-16-1 : 言語科目の成績の変遷（1910/1911 年度 8 年生、6 年次から 8 年次まで）

187

氏名	親の職業	母語	6 年				7 年				8 年			
			独	伊	スロ	自由	独	伊	スロ	自由	独	伊	スロ	自由
Artur Bonetta	郵便副局長	伊	優	良	-	-	良	優	-	-	良	優	-	-
Guido Brunner	大地主	伊	可	-	-	-	可	-	-	-	可	-	-	-
Guido Cosciancich	石炭商	伊	可	可	-	可(仏)	可	可	-	-	可	良	-	-
Alois Folie	知事府会計局長	独	可	-	-	-	良	-	-	-	良	-	-	-
Karl von Frigyesy	ラス社取締役	独	優	優	-	-	優	優	-	-	優	優	-	-
Michael Gabrijelčič	最高裁判所顧問官	スロ	可	良	-	-	-	-	-	-	可	-	良	-
Demetrius Georgacopulo	-.**	伊	可	可	-	-	可	良	-	-	可	可	-	-
Guido Glavan	-.**	伊	可	可	-	-	良	良	-	-	可	良	-	-
Geza Goldberger	飲食店経営	独	良	-	-	-	可	-	-	可(仏)	可	-	-	-
Danilo Goriup	農場主	スロ	良	-	-	-	可	-	-	-	可	-	-	-
H. Prinz z. Hohenlohe S.	知事	独	良	-	-	-	可	-	-	-	可	-	-	-
Otto Homann	商人	独	良	-	可	良(伊)	良	-	可	-	良	-	良	-
Heinrich Jolles	商人	伊	可	良	-	良(仏)	可	可	-	良(仏)	可	良	-	-
Paul Kadeřábek	郵政局監査官(退)	独	良	-	-	優(仏)	可	-	-	優(仏)	可	-	-	-
Erich Kagerbauer	海事局上級技官	独	-	-	-	-	良	-	-	良(仏伊)	可	-	-	良(仏)
Johann Kersevany	教授(退)	伊	可	可	-	-	可	良	-	-	可	良	-	-
Karl Koch	商人	独	可	可	-	-	可	良	-	-	良	優	-	-
Karl Kohn	商人	独	可	-	-	優(仏)	良	-	-	-	良	-	-	-
Viktor Kordan	国有鉄道書記官	スロ	優	-	優	-	良	-	良	-	良	-	優	-
Mirko Kosić	校長	セ・ク	-	-	-	-	良	-	-	優(スロ)	可	-	-	-
Wladimir Kuščer	郵便監査員	スロ	優	-	優	優(仏)	可	-	優	-	良	-	優	-
Ludwig Robert Lixl	-	独	良	-	-	-	可	-	-	-	可	-	-	-
Lorenz Lorenzutti	建設局長(退)	伊	可	可	-	-	可	可	-	良(仏)	可	可	-	可(仏)
Theodor Lubez	-	スロ	良	-	-	可(伊)	可	-	-	良(仏)	可	-	-	-
Franz Malalan	労働者	スロ	可	-	可	-	可	-	可	-	可	-	良	-
Heinrich Meyer	クライン産業組合会長	独	可	-	-	可(仏)	可	-	-	可(仏)	可	-	-	-
Otto Moll	商人	独	可	-	-	-	可	-	-	-	可	-	-	-
Bruno Peperle	ロイド社職員	伊	可	良	-	-	良	良	-	-	可	良	-	-
Franz Rešaver	転轍係員	スロ	可	-	良	-	可	-	良	-	可	-	良	-
Anton Slamič	農夫	スロ	良	-	優	-	優	-	優	-	良	-	優	-
Karl Vatovec	地主	スロ	可	-	-	可(仏)	可	-	-	-	可	-	-	-
Anton Vouk	南部鉄道臨時職員	スロ	良	-	良	良(仏)	可	-	良	良(仏)	可	-	良	-
Karl Wračko	警察顧問官	スロ	良	-	良	-	可	-	可	-	可	-	良	-
Guido Zernitz	-	伊	-	-	-	-	-	-	-	-	可	良	-	-

187 AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 982-989 より作成。

Anton Zobec	国有鉄道事務官補	スロ	良	-	良	-	可	-	可	-	可	-	良	-
-------------	----------	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

上記に 1910/1911 年度 8 年生の、6-8 年次における言語科目の成績を示した。1-5 年次については記載・考察が困難になるため除外した<sup>188</sup>。これをドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語それぞれの成績について科目別にまとめると次の表になる（表 3-16-2 参照）。

表 3-16-2 : 言語科目成績（1910/1911 年度 8 年生、6 年次から 8 年次まで）<sup>189</sup>

#### ドイツ語（必修）

	ドイツ語母語話者	イタリア語母語話者	スロヴェニア語母語話者
優	3	1	3
良	13	4	10
可	19	23	22

#### イタリア語（選択）

	ドイツ語母語話者	イタリア語母語話者	スロヴェニア語母語話者
優	4	2	-
良	-	13	1
可	1	10	-

#### スロヴェニア語（選択）

	ドイツ語母語話者	イタリア語母語話者	スロヴェニア語母語話者
優	-	-	8
良	1	-	12
可	2	-	4

\*3 年間の延べ人数

ここから読み取れるのは次の点である。まず、各言語科目ともに母語話者が圧倒的に優位にあったわけではなく、非母語話者でも優が獲得できた上、母語話者であっても可を取る可能性は十分にあったこと。特に必修のドイツ語について見ると、成績の分布はドイツ語母語話者とスロヴェニア語母語話者で酷似している。次に、選択科目のイタリア語とスロヴェニア語は一部生徒の得点源となっていたことである。表を見ると、イタリア語母語話者とスロヴェニア語母語話者のうち、ドイツ語の成績よりも自らの母語であるイタリア語ないしスロヴェニア語の成績が良い生徒は多数見受けられる。これは言語科目の選択が母語と一致する傾向にあったことの一つの理由と考えられる。そして最後に、このギムナジウムの生徒たちは母語を問わず高いドイツ語の運用力が養成されていたことが裏付けられる。表中にドイツ語

<sup>188</sup> 成績が前期・後期の二つに分けて記入され、更に表記法も異なっているため。

<sup>189</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 982-989 より作成。

で不可（評定に不可が存在すること自体は「生徒記録簿」の他の学年や年度のもので確認できる）を取った生徒はおらず、非ドイツ語母語話者であっても優・良を修めた生徒は十分に存在している。

以上から、全体として教員はあくまで相対評価で成績を付けており、例えばイタリア語、あるいはスロヴェニア語の方が高得点になり易いというような傾向はなかったといえる。また他言語を母語とする者が履修している場合、それが決定的な不利になっている様子も見られない。よって、運営側は言語間の平等に配慮して教育を施していた可能性が推察できる。

これに合わせ、ドイツ語の習熟度と母語話者間の学力差異を検証するため、最後に1910/1911年度8年生の全科目における成績を検討する（表3-17参照）。

表3-17：母語別8年次成績（1910/1911年度8年生）<sup>190</sup>

ドイツ語母語話者

	宗	独	羅	希	歴	数	物	哲	伊	ス
優	5	1	-	-	2	1	3	3	1	-
良	5	4	4	6	5	2	2	9	-	-
可	2	7	8	6	5	9	7	-	-	-

イタリア語母語話者

	宗	独	羅	希	歴	数	物	哲	伊	ス
優	2	-	-	1	1	-	1	1	1	-
良	6	1	3	1	5	2	1	3	6	-
可	2	9	7	8	4	8	8	6	2	-

スロヴェニア語母語話者

	宗	独	羅	希	歴	数	物	哲	伊	ス
優	5	-	1	2	-	-	1	-	-	3
良	5	3	4	2	8	2	3	7	-	6
可	2	9	7	8	4	10	8	5	-	-

宗=宗教、独=ドイツ語、羅=ラテン語、希=ギリシャ語、歴=歴史、数=数学、物=物理化学、哲=哲学入門、伊=イタリア語、ス=スロヴェニア語

哲学入門を除き、3言語の母語話者の成績はほぼ拮抗していることが読み取れる。生徒たちは最終学年である8年生の授業内容をドイツ語で十分に理解していたといえ、これはこの学年までに高度なドイツ語力が養成されていたことを重ねて裏付けるものであり、ドイツ語母語話者と非ドイツ語母語話者の間に著しい学力差異はなかったことを示すものである。

<sup>190</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 982-989 より作成。

### 第三章 小括

本章ではまず 1910/1911 年度のトリエステ国立ギムナジウムの言語教育内容を検討した。必修・選択科目であるドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語は、3 言語とも文法、講読、作文を中心に授業が組み立てられていた点で共通しており、高い水準での読解力の養成が目指されていた。講読・作文テーマの内容からは、いずれの言語の母語話者も十分に自らの母語を学び豊かな文学に触れることができる授業となっていたことが浮かび上がった。授業時間数、教授語、教材の一部にはドイツ語の若干の優位性が見られたが、全体としては 3 言語の教育内容に大きな格差はなかったといえる。トリエステ市内の主要イタリア系中等教育機関ではフランス語は必修科目扱いであったのに対し、トリエステ国立ギムナジウムでは自由科目として扱われ、その内容は他の 3 言語と比較すると遥かに「薄い」ものであった。これは一つにはスロヴェニア系住民にとってのトリエステ国立ギムナジウムの重要性と、イタリア系中等教育機関におけるスロヴェニア系住民の「冷遇」を示唆するものである。同時にまた一方では、トリエステ国立ギムナジウムはイタリア語とスロヴェニア語を選択科目として設けていたために、フランス語を必修科目ないし選択科目とする時間的余裕がなかったという現実的要請も原因として考えられる。

次にトリエステ国立ギムナジウムのイタリア語とスロヴェニア語の教育内容を、それぞれリュブリャーナ第二国立ギムナジウムのスロヴェニア語教育とトリエステ市立上級ギムナジウムのイタリア語教育と比較した。トリエステ国立ギムナジウムのイタリア語・スロヴェニア語教育は、各々の比較対象に遜色のないものだったことが明らかとなった。授業時間数、口述練習の有無、教材構成に若干の差異こそあれ、トリエステ国立ギムナジウムのイタリア語母語話者とスロヴェニア語母語話者は、母語の力を十分に涵養できたといえる。

続いて第四節では次の 3 点である。①各言語科目ともに母語話者が圧倒的に優位にあったわけではなく、非母語話者も健闘していた。また特定の言語科目が他の言語科目より明らかに高い成績を得られるものであったという事実はなかった。②選択科目は一部生徒の得点源となっており、これは次節で詳細に検討する言語科目選択で母語と一致するものが好まれる傾向にあったことの理由の一つと考えられる。③生徒たちは母語を問わず高いドイツ語の運用力が養成されていた。ほとんどの授業科目で 3 言語の母語話者の成績はほぼ拮抗していた。全体として見ると、トリエステ国立ギムナジウムでは高度なドイツ語力が養成され、ドイツ語母語話者と非ドイツ語母語話者の間に著しい学力差異はなかったといえる。

## 第四章 トリエステ国立ギムナジウムにおける言語科目選択

第二章、第三章ではトリエステ国立ギムナジウムの生徒たちの言語的・社会的背景と、現場である学校側が提供した教育内容を考察した。第三章では学校側の視点から言語教育体系を考察したのに引き続き、本章では生徒側の視点から考察していく。生徒たちはどのように言語科目を選択しており、それは生徒の背景とどのような関係を持っていたのだろうか。本章第一節では生徒の選択言語科目履修状況・8年間での言語科目履修の変化を考察する。第二節では言語科目選択の背景を、母語・出身家庭・進路の面から考える。この作業により、多言語的背景を持つ生徒が現実にとどのように対応していたのかが明らかとなる。

### 第一節 言語科目履修状況と入学から卒業までの言語科目選択

教授語であるドイツ語と異なり、イタリア語とスロヴェニア語は必修科目ではなかった。1880/1881年度には履修について以下のように規定されていた（以降も1910/1911年度までは同様である）。

生徒の両親またはその代理人は、生徒がイタリア語乃至スロヴェニア語の授業の履修を希望するの否かを年度初めに表明しなければならない。履修を希望する場合、生徒は選択した言語の授業に年間を通じて規則的に出席する義務を負う。またこれら言語科目の成績は、他の必須科目の成績同様、成績証明書に重大な影響を及ぼすものである。<sup>191</sup>

この規定を見ると、イタリア語とスロヴェニア語の履修は生徒の自主性に全面的に委ねられていたのではなく、保護者の意向が多少なりとも反映されていたと考えられる。ただしイタリア語とスロヴェニア語の履修が必修でなかったのはまさしく1910/1911年度までであり、1911/1912年度からは、1911年4月20日付教育省令第11162号と1911年4月27日付キュステンラント州知事府令VII. 3611/20-11号により、それぞれの言語を母語とする生徒は自身の母語を履修することを義務付けられることとなった。

---

<sup>191</sup> *Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1880/1881, S. 123.

1911/1912 年度より、国立ギムナジウムのイタリア語を母語とする生徒、また特にスロヴェニア語を母語とする生徒の全ては、各々イタリア語、特にスロヴェニア語を無条件必修科目として例外なく履修せねばならない。これら州言語 Landessprache の必修科目としての授業には、他の言語を母語とする生徒であっても、当該言語の語学力を有し、当該州言語による授業において実りある成果を上げるために必要な能力を受講資格試験で示した者であれば参加可能である<sup>192</sup>。

ここからは 1911/1912 年度からイタリア語とスロヴェニア語の授業はそれぞれの母語話者のための授業としての側面が強くなっていたことが読み取れる。教授語も「当該州言語による授業」Unterricht in dieser Landessprache とあり、イタリア語・スロヴェニア語で行われていたことがわかる。しかしそれ以外の言語を母語とする生徒に門戸が閉ざされたのではない。イタリア語とスロヴェニア語は自由科目としても開講されており、それについては次のように述べられていた。

これら州言語[イタリア語とスロヴェニア語を指す]の授業に参加を希望する生徒は、当該言語の民族に所属する者である義務はなく、特にこれら州言語の必修科目としての授業についていくことが困難である生徒は、イタリア語またはスロヴェニア語の自由科目としての授業に参加して当該言語を学ぶことが可能である<sup>193</sup>。

1910/1911 年度はこの「必修化」の直前であり、この年度までは生徒と保護者の意向が働いた状態での言語科目選択の様子を考察することができる。1910/1911 年度における言語科目履修状況は学校全体として次のようになっていた（表 4-1 参照）。

表 4-1 : 言語科目履修者数 (1910/1911 年度)<sup>194</sup>

	1年				2年			3年		4年		5年		6年	7年	8年	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B						
イタリア語 (選択)	13	12	14	-	22	15	-	18	10	15	5	11	5	21	12	11	184
イタリア語 (自由)	履修不可											3	3	4	-	-	10
スロヴェニア語 (選択)	8	19	18	-	11	19	-	9	23	5	10	4	10	9	9	10	164

<sup>192</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 72.

<sup>193</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 72.

<sup>194</sup> Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest, 1910/1911, S. 59.

スロヴェニア語（自由）	履修不可	1	1	1	2	-	5
フランス語（レベル1）	履修不可	5	7	2	1	-	15
フランス語（レベル2）	履修不可	-	-	5	5	2	12

注 自由科目としての言語科目の履修は5年生以上から可能であった。

ここから各学年における各学年における言語科目履修者の割合を百分率にすると次のようになる（表4-2参照）。

表4-2：言語科目履修者数の割合（1910/1911年度）<sup>195</sup>

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	合計
イタリア語（選択）	25.5	31.1	38.4	31.7	32.7	51.2	27.3	30.6	31.8
イタリア語（自由）	履修不可				12.2	9.8	-	-	5.9
スロヴェニア語（選択）	29.4	25.2	43.8	23.8	28.6	22.0	20.5	27.8	28.4
スロヴェニア語（自由）	履修不可				4.1	2.4	4.5	-	2.9
フランス語（レベル1）	履修不可				24.5	4.9	2.3	-	8.8
フランス語（レベル2）	履修不可				-	12.2	11.4	-	7.1

注 「合計」欄の自由科目とフランス語については履修可能であった5-8年生について計算。

つまり全学年において、イタリア語、スロヴェニア語ともに、選択科目として約3分の1の生徒が履修していたことになる。選択科目としてイタリア語とスロヴェニア語を同時に履修することはできなかったため、それぞれの学年では全体として約3分の2の生徒がイタリア語あるいはスロヴェニア語の授業を履修していたといえる。これは決して低い数字ではなく、両言語の授業がごく一部の生徒のみに開かれたものではなかったこと、あるいはごく一部の生徒のみに支持されるような内容のものではなかったことを示唆している。

一方で自由科目としての履修者はごく一部であり、イタリア語で5.9%、スロヴェニア語では2.9%であった。この数値はフランス語の履修者を下回るものである。第三章で述べたように、イタリア語とスロヴェニア語の自由科目の授業内容は基礎からの積み上げ式ではなかったために途中からの履修も容易であったといえるが、反対に全くの初学者を対象としていたとはいえない内容であった。これは両言語の自由科目履修者が少なかった要因の一つと考えられる。

では生徒たちは入学から卒業まで、毎年同様に言語科目を履修していったのだろうか。本節では次に1910/1911年度8年生35名について、入学から卒業まで（1903/1904年度から1910/1911年度まで）の言語科目選択を辿る（表4-3参照）。

<sup>195</sup> 上記表4-1より作成。

表 4-3：入学から卒業までの言語科目選択（1910/1911 年度 8 年生）<sup>196</sup>

	氏名	親の職業	母語	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	7 年	8 年
1	Artur Bonetta	郵便副局長	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊
2	Guido Brunner	大地主	伊	無	無	無	無	無	無	無	無
3	Guido Cosciancich	石炭商	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊、仏*	伊	伊
4	Alois Folie	知事府会計局長	独	伊	伊	伊	無	無	無	無	無
5	Karl von Frigyesy	ラス社取締役	独	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊
6	Michael Gabrijelčič	最高裁判所顧問官	スロ	-	-	-	スロ	スロ	スロ	-	スロ
7	Demetrius Georgacopulo	-**	伊	-	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊
8	Guido Glavan	-**	伊	伊	伊	伊	伊	伊、スロ*	伊	伊	伊
9	Geza Goldberger	飲食店経営	独	-	-	無	無	無	無	仏*	無
10	Danilo Goriup	農場主	スロ	-	-	無	無	無	無	無	無
11	H. Prinz z. Hohenlohe S.	知事	独	-	無	無	無	無	無	無	無
12	Otto Homann	商人	独	スロ	スロ	スロ	スロ	伊*	スロ、伊*	スロ	スロ
13	Heinrich Jolles	商人	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊、仏*	伊、仏*	伊
14	Paul Kadeřábek	郵政局監査官(退)	独	伊	伊	伊	伊	伊	仏*	仏*	無
15	Erich Kagerbauer	海事局上級技官	独	-	-	-	-	-	-	伊*、仏*	仏*
16	Johann Kersevany	教授(退)	伊	-	-	伊	伊	伊	伊	伊	伊
17	Karl Koch	商人	独	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊
18	Karl Kohn	商人	独	-	無	無	無	伊*	仏*	無	無
19	Viktor Kordan	国有鉄道書記官	スロ	-	-	-	-	-	スロ	スロ	スロ
20	Mirko Kosić	校長	セ・ク	-	-	-	-	-	-	スロ*	無
21	Wladimir Kuščer	郵便監査員	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ、伊*	スロ、仏*	スロ	スロ
22	Ludwig Robert Lixl	-	独	無	無	無	無	無	無	無	無
23	Lorenz Lorenzutti	建設局長(退)	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊	伊、仏*	伊、仏*
24	Theodor Lubez	-	スロ		スロ	スロ	スロ	スロ	伊*	仏*	無
25	Franz Malalan	労働者	スロ	-	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ
26	Heinrich Meyer	クライン産業組合会長	独	伊	無	無	無	無	仏*	仏*	無
27	Otto Moll	商人	独	伊	無	無	無	無	無	無	無
28	Bruno Peperle	ロイド社職員	伊	-	-	伊	伊	伊	伊	伊	伊
29	Franz Rešaver	転轍係員	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ
30	Anton Slamič	農夫	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ
31	Karl Vatovec	地主	スロ	-	-	-	-	無	仏*	無	無
32	Anton Vouk	南部鉄道臨時職員	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ	スロ、仏*	スロ、仏*	スロ
33	Karl Wračko	警察顧問官	スロ	-	-	-	-	-	スロ	スロ	スロ
34	Guido Zernitz	-	伊	-	-	-	-	-	-	-	伊
35	Anton Zobec	国有鉄道事務官補	スロ	-	-	-	スロ	スロ、伊*	スロ	スロ	スロ

注① \*は自由科目としての履修であることを示す。\*\*は母親である。伊=イタリア語、スロ=スロヴェニア語、仏=フランス語、セ・ク=セルビア・クロアチア語（母語欄のみであり、履修科目としては存在せず）、無=言語科目の履修無し

<sup>196</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 982-989 より作成。

注② ハイフンはその年次に在籍していなかったことを示す。6番ミハエル・ガブリエッチ Michael Gabrijelčič は7年生の一年間ウィーンの国立ギムナジウムで学んでおり、その後再びトリエステ国立ギムナジウムに戻った。

1910年度8年生の入学から卒業までの年度ごとに言語科目の履修状況は、生徒たちが基本的に入学時に選択した言語を8年間履修する傾向にあったことを示している。トリエステ国立ギムナジウムに1年しか在学していなかった34番グイド・ツェルニッツ Guido Zernitzを除く34名のうち、最初に履修した言語科目と最終学年で履修した言語科目が一致している者は、イタリア語履修者とスロヴェニア語履修者それぞれ10名であり（ただし12番オットー・ホマン Otto Homann は5年次のみスロヴェニア語を履修せず、代わりにイタリア語の自由科目を履修している）、途中で履修しなくなった者がイタリア語履修者で3名、スロヴェニア語履修者で2名である。23番のロレンツ・ロレンツッティ Lorenz Lorenzuttiのように高学年になってイタリア語に加えてフランス語を履修した生徒や、4番アロイス・フォリエ Alois Folie と26番ハインリヒ・マイヤー Heinrich Meyer、27番オットー・モール Otto Mollのように在学中に言語科目の履修を打ち切った生徒はいるものの、入学時に言語科目を取らなかった生徒が後になってイタリア語あるいはスロヴェニア語を継続して履修した例はなく、また途中で別の言語に完全に転向した例はない。

この継続率の高さ、逆にいえば「新規参入」の難しさは、一つにはトリエステ国立ギムナジウムにおけるイタリア語とスロヴェニア語の教育体系に起因していると考えられる。第四章で考察したように、トリエステ国立ギムナジウムにおけるイタリア語・スロヴェニア語教育は正しく「積み上げ型」であった。1年生クラスでは初歩から丁寧に教えるものの、学年が上がるに従って内容は着実に高度化していった。これにより学年が上がってから新しく言語科目を始めたり、あるいは転向したりすることが困難になっていたのである。中途からの履修、あるいは短期間の履修を希望する生徒は自由科目を履修することとなっていた。

フランス語は自由科目としてのみ開講されていたが履修者は多かった。フランス語を在学中に一度でも履修した生徒は12人であり、これは全体（35名）の約3分の1に相当する。同じくイタリア語を在学中に一度でも履修した生徒は21名、スロヴェニア語は13名である。イタリア語が一步抜きんでそれにフランス語とスロヴェニア語が続くかたちとなり、三言語とも3分の1以上の生徒が履修者していたことになるが、母語から見るとまた別の像が浮かび上がる（表4-4参照）。

表 4-4 : 在学中一度でも当該言語科目を履修した生徒（母語別、1910/1911 年度 8 年生）

197

	イタリア語	スロヴェニア語	フランス語	在学中履修無し
母語がドイツ語（12名）	9	1	5	2
母語がイタリア語（10名）	9	1	3	1
母語がスロヴェニア語（12名）	3	10	4	1
母語がセルビア・クロアチア語(1名)	-	1	-	-
合計	21	13	12	4

注 複数言語を履修している生徒が存在するため延べ人数となっている。

母語にかかわらず、在学中一度も言語科目を履修しないという例は少数であった（35名中4名）。ドイツ語を母語とする生徒に好まれたのはイタリア語（12名中9名）、次いでフランス語（同5名）であった。ただしこれには18番カール・コーン Karl Kohn、26番ハインリヒ・マイヤー Heinrich Meyer、27番オットー・モール Otto Moll のようにごく短期間のみの履修であった生徒も含まれている。しかしドイツ語母語話者の生徒の中で、8年間継続して第二言語を履修し続けたのは5番カール・フォン・フリギエッシ Karl von Frigyesy と17番カール・コッホ Karl Koch のみで、双方ともイタリア語を履修していた。

一方、イタリア語を母語とする生徒は10人中9人が一度はイタリア語を履修している。これにスロヴェニア語を母語とする生徒の12名中10名が一度はスロヴェニア語を履修していたことを踏まえると、非ドイツ語母語話者の生徒たちは自らの母語を学ぶことに熱心であったといえる。

第一章で述べたように、当時のトリエステはイタリア語話者が優勢な土地ではあっても、そこで話されていた「イタリア語」はトリエステ方言であった。それは規範的な「標準イタリア語」とは文法・語彙の点で大きく異なる言語であった。イタリア系の中等教育機関ではなく国立ギムナジウムに進学したイタリア語母語話者は前者に進学した生徒と比較して自身の母語で学ぶ機会が遥かに限定されていた。「正しい」イタリア語で書き、話す力を修得することは、長い歴史を持つイタリア文学や同時代のイタリア語による書物が正確性を持って読めるようになり、他地域のイタリア語話者とのコミュニケーションが円滑となるという点で、トリエステのイタリア系住民にとって多大な意味のあることであった。

<sup>197</sup> 上記表 4-3 から筆者作成。

同様のことはスロヴェニア語話者にもいえる。トリエステにスロヴェニア語を主たる教授語とする中等教育機関がなく、イタリア系中等教育機関ではスロヴェニア語の授業が開講されていない状況下で、トリエステ国立ギムナジウムにおけるスロヴェニア語の授業は、母語の力を養う貴重な機会であった。更にスロヴェニア語は、その話者数、言語圏と比較して地域差が非常に大きい言語である。現在でもスロヴェニア語は8つの主要集団に分けられ、更にそれぞれが下位集団を抱え、全体では50の方言を持ち、その偏差は時に意思の疎通が不可能なほどである<sup>198</sup>。イタリア系生徒同様、自らの母語の規範を学び、スロヴェニア文学や同時代の文書が読めるようになり、いわゆる標準語で他の地域のスロヴェニア語話者と意思の疎通を容易に行えるようにすることは重大な意義を持つことであった。またこれは同時に、生徒に「スロヴェニア人」としての意識を持たせる作用も併せ持っていたと考えられる。

ドイツ語母語話者とイタリア語母語話者の生徒のスロヴェニア語履修率は著しく低い。履修者数はイタリア語に遥か及ばないどころか、自由科目でしかなかったフランス語にすら大きく差をつけられている。ドイツ語母語話者とイタリア語母語話者にとって、スロヴェニア語の需要はそもそも高かったとはいえない。トリエステでこそ3割を占めたとはいえ、スロヴェニア語話者はオーストリア全体では人口の5%以下であった。その反面ドイツ語は大学以上のキャリアで必須であり、イタリア語はトリエステのリンガ・フランカであるとともに隣国に数千万人の話者を持っていた。イタリア語母語話者、ドイツ語母語話者の生徒たちが、スロヴェニア語よりも実利面で勝る国際的な言語であるフランス語を選択する傾向にあった背景の一つにはこうした事情がある。

ではこのような言語科目選択は、各生徒の背景とどのような関係を持っていたのだろうか。次節では1910/1911年度、1900/1901年度、1890/1891年度の8年生について、母語、出身家庭、進路の面から言語科目選択の要因を考える。

## 第二節 言語科目選択の背景

### 母語と言語科目選択

まずは母語による履修状況を見してみる（表4-5、4-6、4-7参照）。ここでは選択科目または自由科目としての履修の区別はつけませんが、イタリア語とスロヴェニア語を双方とも選

---

<sup>198</sup> Herryty, *Slovene*, p. 1.

択科目として学ぶことはできなかったため、2つの言語を学んでいる場合はいずれかが自由科目である。

表 4-5 : 母語別言語科目履修 (1910/1911 年度) <sup>199</sup>

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
ドイツ語	2	1	-	1	-	8
イタリア語	8	-	-	-	1	1
スロヴェニア語	-	9	-	-	-	3
セルビア・クロアチア語	-	-	-	-	-	1
ギリシャ語	-	-	-	-	-	-
合計	10	10	-	1	1	13

表 4-6 : 母語別言語科目履修 (1900/1901 年度) <sup>200</sup>

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
ドイツ語	5	-	-	-	1	4
イタリア語	6	-	-	-	-	2
スロヴェニア語	-	3	-	-	-	-
セルビア・クロアチア語	-	1	-	-	-	1
ギリシャ語	-	-	-	-	-	1
合計	11	4	-	-	1	8

表 4-7 : 母語別言語科目履修 (1890/1891 年度) <sup>201</sup>

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
ドイツ語	-	2	2	-	-	6
イタリア語	5	-	-	-	-	3
スロヴェニア語	-	9	2	-	-	2
セルビア・クロアチア語	-	2	-	-	-	1
ギリシャ語	1	-	-	-	-	1
合計	6	13	4	-	-	13

注 左の縦欄は生徒の母語を示す。伊語＝イタリア語のみ履修、スロヴェニア語＝スロヴェニア語のみ履修、伊語とスロヴェニア語＝イタリア語とスロヴェニア語の両言語を履修、仏語＝フランス語のみ履修、伊語と仏語＝イタリア語とフランス語の両言語を履修、履修無し＝イタリア語、スロヴェニア語、フランス語のいずれも履修せず。

<sup>199</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 989 より作成。

<sup>200</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 979 より作成。

<sup>201</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 969 より作成。

これら3年度を合計すると、8年生の母語別に見た言語科目履修状況の顕著な傾向が見て取れる（表4-8参照）。

表4-8：母語別言語科目履修（上記A-Cの総計）

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
ドイツ語	7	3	2	1	1	18
イタリア語	19	-	-	-	1	6
スロヴェニア語	-	21	2	-	-	5
セルビア・クロアチア語	-	3	-	-	-	3
ギリシャ語	1	-	-	-	-	2
合計	27	27	4	1	2	34

ドイツ語母語話者の生徒のうちイタリア語を履修した生徒はスロヴェニア語を履修した生徒の倍以上である。しかしそれ以上にドイツ語母語話者の生徒は「履修無し」の割合が高く、3年度の8年生合計32名のうち18名と半数以上が言語科目を履修していなかった。上田理恵子と京極俊明は「国家基本法」第19条第3項「複数の民族が居住する諸州に於いては、公的教育機関は第二言語の習得を強制されることが無く自らの言語で教育を受けられる手段を有することが出来るようにあらねばならない」のうち「第二言語の習得を強制されることが無く」という部分が採択された背景にはチェコ語の習得を望まなかったボヘミア諸領邦のドイツ系議員の意向があったことを指摘するとともに、これによって多言語教育または多言語話者の育成が否定され、民族間の相互理解の阻害が発生する危険性があったことを指摘している<sup>202</sup>。トリエステ国立ギムナジウムのドイツ語母語話者の生徒たちが第二言語習得に熱心だったとはいえない点は、まさにこの指摘に合致している。

イタリア語母語話者の生徒は多くがイタリア語を履修している。3年度合計では26名中19名と7割を超えている。その反面いずれの年度ともスロヴェニア語を履修していた生徒は見られなかった。しかし第二言語習得という点からいえば、イタリア語母語話者の生徒はイタリア語を教授語とするトリエステ市立上級ギムナジウムではなくこのギムナジウムを選択したという点で、既に第二言語に開かれていたといえよう。

スロヴェニア語母語話者の生徒も多数が自らの母語を履修している。28名中23名と、8割を超えている。こちらはイタリア語を履修している生徒が2名存在する。

母数は少ないものの、セルビア・クロアチア語を母語とする生徒とギリシャ語を母語とする生徒では、何らかの言語科目を履修した生徒とそうでない生徒がほぼ同数であった。セル

<sup>202</sup> 上田理恵子、京極俊明「ハプスブルクの国制」、140-141頁。

ビア・クロアチア語を母語とする生徒のうち言語科目を取っていた生徒 3 名全員がスロヴェニア語を履修している。スロヴェニア語はこれら生徒の母語であるセルビア語ないしクロアチア語に極めて近縁であり、イタリア語母語話者とスロヴェニア語母語話者の生徒がそれぞれ自らの母語を好んで選択していた傾向と一致するものである。クロアチア語とスロヴェニア語はともに南スラヴ語群に属する近縁の言語であり、とりわけクロアチア語のカイ方言 kajkavština とスロヴェニア語は非常に近い関係にある。

この傾向は前節で考察した 1910/1911 年度と 1900/1901 年度の在校生全体の言語科目履修状況によっても裏付けられる。1910/1911 年度の母語別生徒数はイタリア語が 26.3%、スロヴェニア語が 34.4%であった。そして選択科目としてのイタリア語とスロヴェニア語履修者の割合はそれぞれ 31.8%と 28.4%であった。同様に 1900/1901 年度の母語別生徒数の割合は、イタリア語が 34.2%、スロヴェニア語が 30.6%であり、選択科目としてのイタリア語とスロヴェニア語履修者の割合はそれぞれ 36.2%と 29.2%であった。

イタリア語母語話者、ドイツ語母語話者がスロヴェニア語をほとんど履修しなかった背景には、スロヴェニア語の授業が全学年を通じてスロヴェニア語で実施されていたことに加えスロヴェニア語の言語としての特徴も影響しているだろう。スロヴェニア語はゲルマン語派のドイツ語、イタリック語派のイタリア語とは系統の異なるスラヴ語派の言語で、両者とは①全く異なる基礎語彙、②著しい曲用（主格、生格、与格、対格、前置格、造格）、③動詞の完了体と不完了体の別、④単数形、複数形に加えて主語が「二つ」の時に使用される双数形の使用と、大きな差異を持つ。こうした言語的特徴に加え、トリエステにおけるスロヴェニア語の必要性と、「大言語」であるフランス語の履修が優先されたことが、イタリア語／ドイツ語母語話者のスロヴェニア語履修を少なくしていた要因と考えられる。

### 出身家庭と言語科目選択

次に出身家庭と言語科目選択の関連を明らかにする。1910/1911 年度 8 年生の保護者の職業と 8 年次における言語科目選択を以下に示す(表 4-9、4-10、4-11、4-12 参照)。

表 4-9 : 出身家庭別言語科目履修 (1910/1911 年度 8 年生) <sup>203</sup>

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
公務員(13名)	2	4	1	2	-	4
経営者(2名)	1	-	-	-	-	1
医師(0名)	-	-	-	-	-	-

<sup>203</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 989 より作成。

法律家(1名)	-	1	-	-	-	-
海運業(1名)	1	-	-	-	-	-
大土地所有者(3名)	-	-	-	-	-	3
農業(1名)	-	1	-	-	-	-
商業(8名)	3	2	-	-	-	3
その他(6名)	3	1	-	-	-	2
合計	10	9	1	2	-	13

注 伊語=イタリア語のみ履修、スロヴェニア語=スロヴェニア語のみ履修、伊語とスロヴェニア語=イタリア語とスロヴェニア語の両言語を履修、仏語=フランス語のみ履修、伊語と仏語=イタリア語とフランス語の両言語を履修、履修無し=イタリア語、スロヴェニア語、フランス語のいずれも履修せず。

表 4-10 : 出身家庭別言語科目履修 (1900/1901 年度 8 年生) <sup>204</sup>

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
公務員(8)	4	2	-	-	-	2
経営者(1)	-	-	-	-	-	1
医師(0名)	-	-	-	-	-	-
法律家(1名)	-	-	-	-	-	1
海運業(2名)	1	-	-	-	-	1
大土地所有者(2名)	-	2	-	-	-	-
農業(0名)	-	-	-	-	-	-
商業(8名)	5	-	-	-	-	3
その他(1名)	-	-	-	-	1	-
合計	10	4	-	-	1	8

表 4-11 : 出身家庭別言語科目履修 (1890/1891 年度 8 年生) <sup>205</sup>

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
公務員(9)	3	5	-	-	-	1
経営者(1名)	-	-	-	-	-	1
医師(3名)	-	-	1	-	-	2
法律家(2名)	-	-	-	-	-	2
海運業(2名)	1	-	-	-	-	1
大土地所有者(3名)	1	2	-	-	-	-
農業(4名)	-	3	1	-	-	-
商業(5名)	2	1	-	-	-	2
その他(7名)	-	2	1	-	-	4
合計	7	13	3	-	-	13

表 4-12 : 出身家庭別言語科目履修状況 (上記 3 年度総計)

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
公務員(30名)	9	11	-	2	-	7
経営者(4名)	1	-	-	-	-	3
医師(3名)	-	-	-	-	-	2

<sup>204</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 979 より作成。

<sup>205</sup> AST, *Scuole del litorale 1842-1918*, b. 969 より作成。

法律家(4名)	-	1	-	-	-	3
海運業(5名)	3	-	-	-	-	2
大土地所有者(8名)	1	4	-	-	-	3
農業(5名)	-	4	-	-	-	-
商業(21名)	10	3	-	-	-	8
その他(14名)	3	3	-	-	-	6
合計	27	26	4	2	1	34

母語と言語科目選択には強い相関があったが、出身家庭と8年次における言語科目選択には明確な関係性が読み取れない。次に在学中の履修履歴との関係を見る(表4-13参照)。

表4-13：在学中一度でも当該言語科目を履修した生徒(出身家庭別、1910/1911年度8年生)<sup>206</sup>

	イタリア語	スロヴェニア語	フランス語	在学中履修無し
公務員(13名)	8	6	5	1
経営者(2名)	2	-	1	-
医師(0名)	-	-	-	-
法律家(1名)	-	1	-	-
海運業(1名)	1	-	-	-
大土地所有者(3名)	-	-	1	2
農業(1名)	-	1	-	-
商業(8名)	6	2	4	-
その他(6名)	4	3	1	1
合計	21	13	12	4

注 複数言語を履修している生徒が存在するため延べ人数となっている。

出身家庭と言語科目履修の関係は、母語と言語科目履修の関係程には明確な関連性を持つものではないことがわかる。敢えていうならば商業関係者の家庭出身の生徒(ドイツ語母語話者5名、イタリア語母語話者2名、スロヴェニア語母語話者1名)にイタリア語とフランス語の人気の高かったといえる。この背景にはドイツ語母語話者であっても、(親の跡を継いで)トリエステというイタリア語優勢都市で商売を円滑に進めるためには正確なイタリア語の運用力が欠かせなかったこと、また国際的に通用するフランス語は商売人にも官吏にも有用だったことがあるだろう。

### 進路と言語科目選択

次に1900/1901年度と1890/1891年度の8年生を対象に、進路と言語科目選択の関係を考察する。なお1910/1911年度の生徒個々人の進路は記載がない。

<sup>206</sup> 上記表4-3より作成。

表 4-14 : 進路別言語科目選択 (1900/1901 年度) <sup>207</sup>

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
法学	4	2	-	-	-	7
医学	2	-	-	-	-	-
哲学	1	-	-	-	1	-
神学	-	-	-	-	-	-
工学	1	-	-	-	-	-
農学	-	-	-	-	-	-
その他進学	-	-	-	-	-	-
軍人	1	-	-	-	-	-
公務員	-	-	-	-	-	-
その他就職	-	-	-	-	-	-
合計	9	2	-	-	1	7

注 伊語＝イタリア語のみ履修、スロヴェニア語＝スロヴェニア語のみ履修、伊語とスロヴェニア語＝イタリア語とスロヴェニア語の両言語を履修、仏語＝フランス語のみ履修、伊語と仏語＝イタリア語とフランス語の両言語を履修、履修無し＝イタリア語、スロヴェニア語、フランス語のいずれも履修せず。

表 4-15 : 進路別言語科目選択 (1890/1891 年度) <sup>208</sup>

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
法学	3	2	1	-	-	3
医学	1	2	1	-	-	3
哲学	-	-	-	-	-	-
神学	1	2	-	-	-	1
工学	-	-	-	-	-	-
農学	-	1	-	-	-	1
その他進学	-	1	-	-	-	-
軍人	-	2	1	-	-	-
公務員	-	1	1	-	-	1
その他就職	1	1	-	-	-	-
合計	6	12	4	-	-	9

表 4-16 : 進路別言語科目履修状況 (上記の合計)

	伊語	スロヴェニア語	伊語とスロヴェニア語	仏語	伊語と仏語	履修無し
法学	7	4	1	-	-	10
医学	3	2	1	-	-	3
哲学	-	-	-	-	1	-
神学	1	2	-	-	-	1
工学	-	-	-	-	-	-
農学	-	1	-	-	-	1
その他進学	-	1	-	-	-	-
軍人	-	2	1	-	-	-

<sup>207</sup> 上記表 2-10 より作成。

<sup>208</sup> 上記表 2-11 より作成。

公務員	-	1	1	-	-	1
その他就職	1	1	-	-	-	-
合計	15	14	4	-	1	16

ここから浮かび上がる傾向として、スロヴェニア語選択者＝スロヴェニア語母語話者の進路は比較的多様であった一方、イタリア語選択者と履修なしの生徒は法学と医学に集中していることがわかる。しかし全体としてはスロヴェニア語選択者も法学に進学した者が多く、生徒たちの多くには法学あるいは医学という「エリート街道」が好まれたといえる。

一方、この生徒たちを母語で見ると、「法学・イタリア語選択」7名のうちイタリア語母語話者が5名、ドイツ語が2名であり、一方「法学・履修無し」10名のうちドイツ語母語話者が5名、イタリア語母語話者が3名、ギリシャ語1名、セルビア・クロアチア語1名となり、これは結局のところ「母語と言語科目選択」で明らかになった傾向と一致している。

以上により、トリエステ国立ギムナジウムの生徒たちは、いかなる家庭の出身なのか、あるいは将来いかなる職に就きたいのか<sup>209</sup>ということによって言語科目を選ぶというより、母語と一致する言語科目を選択していた傾向が明確であったといえる。前章で明らかにしたように、トリエステ国立ギムナジウムにおけるイタリア語とスロヴェニア語の教育は高水準にあった。特にスロヴェニア系住民にとって、ドイツ語と母語が学べ、高等教育機関への踏み台となるこのギムナジウムは、イタリア系住民との間に均衡を作り出す装置として重要であったといえる。

#### 第四章 小括

以上より、君主国事実上の公用語であり、学校の教授語であるドイツ語に加え、イタリア語またはスロヴェニア語のいずれかについて、生徒たちは主体的に選択し、それぞれの「標準語」を高度な水準まで高めていったことが分かった。その選択には、社会的背景や希望する進路選択が決定的に影響を与えた様子は見られない。しかし、少なくとも履修状況から見る限り、母語は少なからず影響を与えていた。即ちイタリア系の生徒がスロヴェニア語を、スロヴェニア系の生徒がイタリア語を積極的に履修するような状況にはなく、ドイツ系の生

<sup>209</sup> 選択科目としてのイタリア語あるいはスロヴェニア語の成績がドイツ語よりも良かった生徒が比較的多く見られたことに鑑みると、選択科目では多少は有利になることが期待できる母語を履修し、大学進学につなげようとしたという可能性も残る。

徒については言語科目を選択しない生徒もある程度存在しており、生徒たちが授業を通じて3言語の能力を全体的に高めようとした様子は見られなかった。特にドイツ系とイタリア系生徒のスロヴェニア語学習意欲は低く、在学中に一度でも履修したか否かという点については、自由科目のフランス語にも劣っていた。生徒たちはあくまで、君主国の支配言語であるドイツ語と母語に関して、高度な言語運用能力を身につけていたということができる。

## 結論

### 【総括】

以上、ここまで本稿は帝政末期のトリエステ国立ギムナジウムにおける言語教育とそこに通った生徒たちの背景を考察してきた。本稿を閉じるに当たり、ここまで論じてきたことを再び要約しておく。

### 第一章

第一章第一節ではトリエステ史の概略と、アウスグライヒ体制下におけるオーストリアとトリエステにおける多言語状況を確認した。19世紀以降、トリエステのイタリア系とスロヴェニア系住民は言語を巡って対立することがあり、帝政末期は「コスモポリタンの」調和が綻びを見せる時代でもあった。第二節ではトリエステ方言について述べた。トリエステ方言の成り立ちはトリエステがハプスブルク君主国の領地であったことと密接に関連しており、そうして形成されたトリエステ方言は、ドイツ語でもスロヴェニア語でも、最も近いイタリア語でもない混成言語であった。これを「媒介言語」に多様な背景を持つ人々の間に融和的なコミュニケーションが成立していたというのも、トリエステの言語状況の一端を捉えた見方といえる。

### 第二章

本章第一節では言語面から見たトリエステ国立ギムナジウムの全体的な特徴を、近隣校と比較しながら考察した。トリエステ国立ギムナジウムは1842年に設立され、1910/1911年度の授業科目は必修科目として宗教、ドイツ語、ラテン語、ギリシャ語、地理、歴史、数学、博物学、物理・化学、哲学入門があり、イタリア語とスロヴェニア語は選択科目、フランス語、速記、歌唱、美術、体育は自由科目として扱われていた。同校はラテン語と古典ギリシャ語の教育が重視されたいわゆる古典的なギムナジウムであったが、ドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語の配当時間数は比較的多いものであった。特にスロヴェニア語の授業を設けていたのはトリエステ市内の主要イタリア系中等教育機関（トリエステ市立上級ギムナジウム、トリエステ市立上級実科学校、トリエステ市立女学校）には見られない特徴である。また近隣の国立ギムナジウムはその地域の言語状況に対応したかたちで言語科目を設け

ており、非ドイツ語母語話者が一面的にドイツ語だけの習得を課されていたのではなかったことも明らかとなった。

第二節では生徒の母語、宗派、出身地、出身家庭と進路を考察した。トリエステ国立ギムナジウムの生徒数はドイツ語話者、イタリア語話者、スロヴェニア語話者が拮抗しており、これはイタリア系学校がいずれもほぼイタリア語話者のみで占められていたのとは対照的である。宗派と出身地を見ても、トリエステ国立ギムナジウムの多様性は顕著であり、それはトリエステ内外の近隣中等教育機関と比較で明らかであった。出身家庭は公務員が最多で、それに商業関係者、大土地所有者が続いていた。母語と合わせるとドイツ語母語話者は公務員と商業、イタリア語母語話者は公務員と商業、海運業、そしてスロヴェニア語母語話者は公務員と大土地所有者、農業関係者に多く見られた。同じクラスの中にはモルブルゴ家やホーエンローエ家といった地元の名士の子弟が在席していた一方で、裕福とは見られない一般家庭の子弟も在席していた。非ドイツ系の生徒の保護者にトリエステの有力者が数多く存在したことは、トリエステ国立ギムナジウムがドイツ語偏重ではなくイタリア語とスロヴェニア語の授業にも配慮していたことと無関係ではなかったと推察できる。そのような状況下で生徒の進路は大学進学が大半であった。これは母語を問わず、このギムナジウムに進学する主目的の一つだったといえる。また有力者の指定によるエリート再生産と同時に、社会階層間の移動も発生していた。充実した授業料免除制度がこれを後押ししていた。進路先の大学名は明示されていないが、トリエステには大学がなかったこと、トリエステ国立ギムナジウムがドイツ語を主要教授語とする学校であること、そしてイタリア系のトリエステ市立上級ギムナジウムですらウィーン大学とグラーツ大学への進学者が大多数であることを考慮すれば、ドイツ語圏の大学へと進学していたと考えるのが妥当である。前述の授業科目設置状況、中等教育機関における母語別話者数と合わせると、トリエステ国立ギムナジウムは特にスロヴェニア系住民の高等教育への窓口となっていたといえる。

第三節ではクラス編制を考察した。トリエステ国立ギムナジウムのクラス編制は特定の属性の生徒が偏在することのないように組まれた緻密なものであった。そしてここでは母語や出身家庭、宗派でクラスを峻別するような編制は取られておらず、各クラス内で多様な背景を持った生徒の接触・交流が可能となっていたことが明らかとなった。つまり学校全体として多様な生徒が在席していただけなく、そうした生徒たちが各クラス単位で共存する環境にあったのである。第二節の考察結果と合わせると、トリエステ国立ギムナジウムは他のイタリア系中等教育機関よりも「多様性の共存」という視点では上回っていたといえる。

### 第三章

第三章ではトリエステ国立ギムナジウムの言語教育の内実を考察した。第一節では1910/1911年度に焦点を当て、ドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語、フランス語の教育内容を検討した。まず必修・選択科目であるドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語について扱った。3言語とも文法、講読、作文を中心に授業が組み立てられていた点では共通しており、高い水準での読解力の養成が目指されていたことがわかった。講読・作文テーマの内容からは、ドイツ語話者のみならずイタリア語母語話者とスロヴェニア語母語話者も十分に自らの母語を学び豊かな文学に触れることができる授業となっていたことが浮かび上がった。一方、ドイツ語の若干の優位性も見て取れた。それは授業時間数、1-2年生のイタリア語と自由科目の教授語と文法教材がドイツ語であったことに現れていた。しかし全体として3言語の教育内容に大きな格差はなかったといえる内容であったのは確かである。第一節の最後では自由科目であるフランス語について検討した。トリエステ市内のイタリア系中等教育機関ではフランス語教育が重視されていたのに対し、トリエステ国立ギムナジウムでは授業時間数が少ない自由科目として扱われ、その内容は他の3言語と比較すると遥かに「薄い」ものであった。このフランス語とスロヴェニア語の扱いの差異は、一つにはスロヴェニア系住民にとってのトリエステ国立ギムナジウムの重要性と、イタリア系中等教育機関におけるスロヴェニア系住民の「冷遇」を端的に反映したものであると捉えられる。そしてもう一つには、スロヴェニア語またはイタリア語を選択科目として課す以上、フランス語に割く時間的余裕がなかったという現実的要請を反映したものと考えられる。

第二節ではトリエステ国立ギムナジウムのスロヴェニア語の授業内容を更に相対的に評価するため、リュブリャーナ第二国立ギムナジウムのスロヴェニア語教育について検討した。リュブリャーナ第二国立ギムナジウムはスロヴェニア語を母語とする生徒が圧倒的多数派で、主要教授語はスロヴェニア語であった。比較の結果、トリエステ国立ギムナジウムにおけるスロヴェニア語教育は、スロヴェニア語優勢地域であるリュブリャーナの国立ギムナジウムにおける教育と比べても遜色のないものであったことが判明した。授業時間数ではむしろトリエステ国立ギムナジウムが上回り、トリエステのスロヴェニア語母語話者の生徒も十分に母語の能力を高めることができたと考えられる。ただしリュブリャーナ第二国立ギムナジウムでは【口述練習】の項目が設けられ、口頭でのスロヴェニア語力に磨きがかけられていた点と、クロアチア語の講読を設けていた点で異なっていることも明らかとなった。

第三節では第二節に引き続き、トリエステ国立ギムナジウムのイタリア語教育を相対的に評価するため、トリエステ市立上級ギムナジウムのイタリア語教育について検討した。トリエステ市立上級ギムナジウムにおけるイタリア語教育は高い水準のイタリア語力の養成を目指したものであった。授業時間数ではトリエステ国立ギムナジウムのイタリア語教育を上回り、1年生からイタリア語での授業が行われていた。しかし全体としては、教材、講読、作文の内容が類似し、最終的に到達する水準が同程度であることから、トリエステ国立ギムナジウムのイタリア語教育もトリエステ市立上級ギムナジウムのイタリア語教育と十分に比肩し得るものであり、トリエステ国立ギムナジウムのイタリア語母語話者の生徒は自らの母語を十分に涵養できていたと考えられる。

第四節では、トリエステ国立ギムナジウムにおける生徒の学修の実際の到達度を見るため、成績と生徒の背景の関係を考察した。明らかになったのは次の点である、まず各言語科目ともに母語話者が圧倒的に優位にあったわけではなく、非母語話者でも優が獲得できた上、母語話者であっても可を取る可能性は十分にあったこと。特に必修のドイツ語について見ると、ドイツ語母語話者とスロヴェニア母語話者の成績分布は酷似している。次に、選択科目が一部生徒の得点源となっていたことである。イタリア語母語話者とスロヴェニア語母語話者のうち、ドイツ語の成績よりも自らの母語であるイタリア語／スロヴェニア語の成績が勝っていた生徒は多い。これは第四章で扱った言語科目選択で母語と一致するものが好まれる傾向にあったことの一つの理由と考えられる。最後に、このギムナジウムの生徒たちは母語を問わず高いドイツ語の運用力が養成されていたことが明らかとなった。この年度についていえば、言語科目としてのドイツ語で不可を取った生徒はおらず、非ドイツ語母語話者であっても優・良を修めた生徒は多い。更に哲学入門を除き、他の授業科目でも3言語の母語話者の成績はほぼ拮抗していた。即ち生徒たちは最終学年である8年生の授業内容をドイツ語で十分に理解していたといえ、これはこの学年までに高度なドイツ語力が養成されていたことを重ねて裏付けるものであり、ドイツ語母語話者と非ドイツ語母語話者の間に著しい学力差異はなかったことを示すものでもある。

#### 第四章

第四章第一節では①トリエステ国立ギムナジウムの1910/1911年度、1900/1901年度における在学学生全体の言語科目履修状況、②1910/1911年度8年生について入学から卒業に至るまでの言語科目選択の変遷を、そして第二節では③1910/1911年度、1900/1901年

度、1890/1891 年度 8 年生の生徒について母語・出身家庭・進路と言語科目選択の関連を考察した。その結果次の点が明らかとなった。

まず 1910/1911 年度、1900/1901 年度ともに選択科目としてイタリア語・スロヴェニア語を履修した生徒はそれぞれ在校生の 3 分の 1 に上り、その反面自由科目としてこれらの言語を履修した生徒は僅少で、フランス語履修者数にも及んでいなかったこと。次にイタリア語、スロヴェニア語ともに積み上げ型のカリキュラムが組まれ、更にイタリア語に関しては 1-2 年次にドイツ語で授業が行われていたにもかかわらず、全体として各生徒は自らの母語を磨く傾向にあり、大多数の生徒が第二／第三言語習得に進んで力を入れるという状態にまでは至っていなかったこと。第三に、3 年度とも母語と言語科目選択には強い相関性があったが、出身家庭と進路とはあまり関係がなかったこと。第四に、ドイツ語母語話者にはイタリア語とスロヴェニア語のいずれの言語科目も履修しない生徒も多く見られたこと<sup>210</sup>。そして第五に、ドイツ語母語話者とイタリア語母語話者はスロヴェニア語をほとんど履修しておらず、その一方でフランス語を在学中に一度は履修した生徒は全体の 3 分の 1 に上ったことである。

以上から、複言語状態にあった生徒も多かったとはいえ、全体としてトリエステ国立ギムナジウムの生徒たちは、基本的にはハプスブルク君主国で支配的な立場にあるドイツ語と母語について、高度な言語運用能力を身につけていたといえる。

ここまでの考察を総合すると、本稿の結論は以下の 3 点に集約される。

① トリエステ国立ギムナジウムはイタリア語話者が優勢であったトリエステ社会において、ネーション間と言語間に均衡を生み出す機能を持っていた。

トリエステ国立ギムナジウムの現場は、ドイツ／イタリア／スロヴェニア 3 言語間に顕著な格差が生まれぬよう配慮しつつ、高度な言語運用力の育成に努めていた。ドイツ系住民から見れば、この学校はイタリア語優勢の社会にありながら母語であるドイツ語で中等教育

---

<sup>210</sup> 本稿で考察したのはあくまでも学校における言語教育である。特に裕福な家庭の生徒の場合、家庭教師について勉強している可能性は大いにある。その点で本章の考察は、言語科目を履修していなかったドイツ系の生徒が一様に単一言語状態 monolingualism にあったと主張するものではない。

が受けられる場であった。フィリップソンの英語帝国主義論<sup>211</sup>に倣っていえばハブスブルク君主国におけるドイツ語の立場を指して言語帝国主義的と指摘することは容易いが、だからといってドイツ語母語話者の生徒の言語権がないがしろにされてよいわけではない。スロヴェニア系住民から見れば、トリエステで母語であるスロヴェニア語が学べる上に高等教育機関への窓口となる中等教育機関は事実上この学校のみであった。イタリア系住民にとっても、国内で優勢なドイツ語に熟達して高等教育に進むのは利益のあることであった。それはイタリア語を主要教授語とするトリエステ市立上級ギムナジウムではなくトリエステ国立ギムナジウムを選択した生徒が一定数存在し続けたことにも裏付けられる。

②トリエステ国立ギムナジウムは、トリエステの中等教育機関としては例外的に同時代の多言語状況を反映し、ドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語それぞれの母語話者が共存する場であった。

イタリア系の独占状態にあった他のイタリア系主要中等教育機関と異なり、トリエステ国立ギムナジウムにおいてこれら3者は数の上で拮抗して在籍していた。多様な背景（母語、宗派、出身地、出身家庭）を持つ生徒は各クラス単位で混在し、相互に接触・交流ができる環境にあった。そのような場でドイツ系、イタリア系、スロヴェニア系3者の生徒たちは自らの母語を他校と比較しても高度な水準まで学ぶことが可能であった。そして言語科目とその他の授業科目双方の成績において母語による大きな格差がなかったことは、生徒は母語を問わず学力をつけ評価され得る状態にあったことを示すものである。トリエステ国立ギムナジウムの事例は、教授語面での中等教育機関の設置状況が実態と対応していない状況下での現場の対応の一例である。

③言語の「均衡」「平等」には限界があったものの、国家基本法第19条の理念がある程度まで実現されていた。

無論、①と②で述べた「均衡」「共存」に多少の限定が加わっていたのも確かである。言語科目の教育内容では若干のドイツ語優位、ドイツ語母語話者優位が存在した。イタリア語、スロヴェニア語、フランス語の選択は、結局のところ母語が好まれる傾向にあり、母語

---

<sup>211</sup> Robert Phillipson, *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press, 1992, p. 47. ここでフィリップソンは作業仮説としての英語帝国主義を「英語とその他の言語間に構造的・文化的な不平等を形成し、またそれを継続的に再構成することによって英語支配が主張され、かつ維持されること」と定義している。

を問わず第二・第三言語を積極的に学ぶという状態ではなかった。そして言語の力関係、即ち端的に言えば当時のトリエステでスロヴェニア語は実用面でフランス語とイタリア語に劣っていたことも選択には反映されていた。学校側としても、例えばイタリア語とスロヴェニア語の両方を必修科目としたり、あるいは自らの母語と異なる言語の履修を義務付けるような環境を提供したりはしていなかった。生徒は全体として母語とドイツ語に習熟する傾向にあり、ここに法や学校の制度に対する生徒の側の現実的な対応が見て取れる。

共通語の教育と民族語の継承の両立は多民族国家・多言語教育が常に抱えるアポリアである。しかしそれでも、トリエステ国立ギムナジウムでは多種多様な背景を持つ生徒たちの多くが複言語状態にあったことも明らかとなった。イタリア系とスロヴェニア系に分極化していく帝政末期トリエステ社会にあって、それは限定的ではあっても国家基本法第 19 条の理念に適うものとして評価できる。

### 【おわりに】

第一次世界大戦後、「未回収のイタリア」であったトリエステはイタリア領となった。この時期のトリエステ研究では、アッティリオ・タマロ Attilio Tamaro に代表されるように<sup>212</sup>、トリエステのイタリアへの「帰還」の正当化に熱心なナショナリスト史観が支配的となっていた<sup>213</sup>。イタリア領になって以降、市内各所の地名は「イタリア的」地名へと変更された。それはオーベルダン広場 Piazza Oberdan<sup>214</sup>や 11 月 3 日海岸通り Riva 3 Novembre<sup>215</sup>に見られるように、イタリアにとって「愛国的」な装いのものであった。国立ギムナジウムの面していたリプシア広場はオルティス広場 Piazza Hortis に改称された。この由来となったアッティリオ・オルティス Attilio Hortis (1850-1926)はトリエステ出身の歴史家・政治家で市立図書館館長も務めた人物である。

大戦末期の 1918 年 10 月 31 日、知事アルフレッド・フリエス＝スケーネ Alfred Fries-Skene (1870-1947) は『トリエステの皆様へ』 Agli abitanti di Trieste! / An die

---

<sup>212</sup> Attilio Tamaro, *Storia di Trieste*. Vol. 1-2. Roma: Alberto Stock, 1924

<sup>213</sup> この事情とその後の研究史については濱口忠大「トリエステ近現代史研究文献案内--歴史叙述に描かれた国境都市の肖像」を参照。

<sup>214</sup> フランツ・ヨーゼフ暗殺未遂事件で処刑されたトリエステ出身のイッレデンティズモ支持者グリエルモ・オーベルダン Guglielmo Oberdan (1858-1882)に因む。

<sup>215</sup> ハプスブルク君主国が第一次世界大戦の休戦協定に署名した日付から。

Bewohner Triests! / Previvavcem Trsta! と題してイタリア語、ドイツ語、スロヴェニア語で以下の声明を発表した。

あらゆる状況に鑑み、私にトリエステを退去し、キュステンラント州知事府を今後はグラーツへと移転させる命令が下りました。市行政の協議事項は市民委員会に委任されます。

トリエステ市民の皆様には、この苦境に際し、どうか静寧と秩序を維持し、既に戦禍を被ったトリエステが、この平和への濫觴において、新たに痛手を受けることのないようお願い申し上げます。

丸4年に渡り、私と知事府職員一同は、皇帝陛下と閣僚の方々の御心に基づき、戦争の大難を和らげ、市民の皆様の犠牲を最小限に止めるべく苦心惨憺して参りました。

このたびトリエステを去るに当たり、この街の更なる繁栄を心から祈念するとともに、トリエステという、自由意思で加わって以来500年に渡ってオーストリアの大地であり、オーストリアとの緊密な紐帯とともに商業の一大中心地としてこの世の春を謳歌したこの街が、その歴史に値する発展を今後も遂げるのは、かつて自由な意思で加わり、自然と歴史によって結び付けられ、今は新しい国家体制に向かっているその後背地との関係を措いて外にないという確信をお伝えしておきます<sup>216</sup>。

かつてハプスブルク君主国随一の港として繁栄を謳歌したトリエステは、今やイタリアの地方港に過ぎない。他に有力港に乏しかったオーストリアとは異なり、イタリアは数多くの大港湾都市を持つ国家であった。フリエス＝スケーネがいうところのオーストリア含む中欧との「緊密な紐帯」は切断され、また冷戦期には東側との最前線だったトリエステに多額の投資がなされることはなかった。イタリア国家統計局 ISTAT の資料によれば、現在のトリエステ市でも人口のうち9.3%に当たる19192人は外国籍であるが、上位からセルビア5251名、ルーマニア2638名、クロアチア1143名であり、その一方でスロヴェニアとドイツは

---

<sup>216</sup> Comitato Trieste '68, *Trieste Ottobre-Novembre 1918*, Parte I. Milano: All'insegna del pesce d'oro, pag. 163-165. ここではドイツ語から訳出したが、各言語版とも差は見られない。

それぞれ 249 名と 146 名と様変わりしている<sup>217</sup>。1991 年に約 230000 人だったトリエステの総人口は四半世紀を経た 2015 年までに約 27000 人減少した。現人口の 3 分の 1 は 65 歳以上で、更なる人口減が予測されている<sup>218</sup>。1910 年の人口でいえばウィーンは 1834370 名、プラハは 221171 名であった<sup>219</sup>。現在のウィーンの人口はこの数値とほぼ等しいが、プラハは人口 127 万の大都市となり、トリエステに大差をつけている。

往時のトリエステ市立上級ギムナジウムがトリエステ・ダンテ・アリギエリ文科高等学校 Liceo Classico Dante Alighieri di Trieste として現在も存続している一方で、トリエステ国立ギムナジウムはハプスブルク君主国の 536 年に渡るトリエステ統治とともに終焉を迎えた。かつて国立ギムナジウムがあった建物は、現在国立上級航海技術学校 Istituto Statale di Istruzione Superiore Nautico として使用されている。同校の旧リプシア広場側入口上には、今も国立ギムナジウム k. k. Staatsgymnasium の刻印がドイツ語のまま残されている。これは近年の校舎補修作業に際し半世紀以上の時を経て「発見」されたものである<sup>220</sup>。

---

<sup>217</sup> 2015 年 1 月 1 日のデータ。Cittadini stranieri Trieste 2015. <http://www.tuttitalia.it/friuli-venezia-giulia/14-trieste/statistiche/cittadini-stranieri-2015/> (2016/01/28 閲覧)

<sup>218</sup> *Il Piccolo*, 06/09/2016.

<sup>219</sup> Die Ergebnisse der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den im Reichsrat vertretenen Königreichen und Ländern, 1/1. Die summarischen Ergebnisse der Volkszählung. Mit 6 Kartogrammen, S. 65.

<sup>220</sup> *Il Piccolo*, 08/11/2015. 『ピッコロ』 *Il Piccolo* はトリエステの地元紙である。

## 参考文献・史料

### 文書館史料

Archivio di Stato di Trieste (AST), *Scuole del litorale 1842-1918*,

b. 776, k. k. Realschule in Triest, Cataloghi generali / Hauptkatalog, 1910/11.

b. 969, k. k. Staatsgymnasium in Triest, Cataloghi generali / Hauptkatalog,  
1890/1891.

b. 979, k. k. Staatsgymnasium in Triest, Cataloghi generali / Hauptkatalog,  
1900/1901.

bb. 982-989, k. k. Staatsgymnasium in Triest, Cataloghi generali / Hauptkatalog,  
1903/1904-1910/1911.

### 刊行資料

Berufsstatistik nach den Ergebnissen der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den in Österreich, 3/1. Hauptübersicht und Besprechung der Ergebnisse, Wien: Bureau der k. k. Statistischen Zentralkommission, 1916.

Carpinter, Lino; Faraguna, Mariano. *Serbidiòla*. Trieste: La Cittadella, 1977.

Die Ergebnisse der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den im Reichsrat vertretenen Königreichen und Ländern, 1/1. Die summarischen Ergebnisse der Volkszählung. Mit 6 Kartogrammen. Wien: Bureau der k. k. Statistischen Central-Comission, 1912.

Die Ergebnisse der Volkszählung vom 31. Dezember 1910 in den im Reichsrat vertretenen Königreichen und Ländern, 1/3. Die Alters- und Familienstandsgliederung und Aufenthaltsdauer. Wien: Bureau der K.K. Statistischen Zentralkommission, 1914.

Österreichisches statistisches Handbuch. Wien: Bureau der k. k. Statistischen Central-Comission, 1911.

### 学校年報

*Annualio dell' I. R. Ginnasio Superiore di Capodistria*, 1910/1911.

*Annuario del Civico Ginnasio Superiore di Trieste*, 1910/1911, 1913.  
*Annuario della Civica Scuola Reale Superiore di Trieste*, 1910/1911.  
*Izvestje c. kr. II. državne gimnazije v Ljubljani*, 1909/1910, 1910/1911.  
*Jahresbericht des k. k. I. Staatsgymnasium zu Laibach*, 1909/1910, 1910/1911.  
*Jahresbericht des k. k. Obergymnasium in Rudolfswert*, 1910/1911.  
*Jahresbericht des k. k. Staats-Gymnasiums in Cilli*, 1909/1910, 1910/1911.  
*Jahresbericht des k. k. Staats-Gymnasiums in Marburg A/D*, 1910/1911.  
*Jahresbericht des k. k. Staatsgymnasiums mit deutscher Unterrichtssprache zu Laibach*, 1910/1911.  
*Jahresbericht über das k. k. Staatsgymnasium in Triest*, 1867/1868-1911/1912.  
*Programma annuale del Civico Liceo Femminile di Trieste*, 1910/1911.

#### 新聞資料

*Edinost.*

*Il Piccolo.*

#### 二次文献

##### (邦語文献)

アリギエリ、ダンテ『神曲【完全版】』平川祐弘（訳）、河出書房新社、2010。

イ・ヨンスク『「国語」という思想：近代日本の言語認識』岩波書店、2012。

石川達夫『チェコ民族再生運動——多様性の擁護、あるいは小民族の存在論』岩波書店、2010。

上田理恵子、京極俊明「ハプスブルクの国制」大津留厚他（編）『ハプスブルク史研究入門：歴史のラビリンスへの招待』昭和堂、2013、134-144頁。

大津留厚『ハプスブルク帝国』山川出版社、1996。

-----『ハプスブルクの実験—多分化共存を目指して』春風社、2007。

-----、河野淳、岩崎周一、水野博子（編）『ハプスブルク史研究入門：歴史のラビリンスへの招待』昭和堂、2013。

オーキー、ロビン『ハプスブルク君主国 1765-1918』山之内克子、秋山晋吾（監訳）NTT出版、2010。

- 金指久美子「古代スラヴ語研究史における『フライジング文書』」東京外国語大学『東京外国語大学論集』第86号、2013、1-18頁。
- カルヴェ、レイ・ジャン『言語学と植民地主義：ことば喰い小論』砂野幸稔（訳）三元社、2006。
- 『言語戦争と言語政策』砂野幸稔他（訳）、三元社、2010。
- 川島淳夫他（編）『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店、1994。
- 北村暁生、伊藤武（編著）『近代イタリアの歴史』ミネルヴァ書房、2012。
- 、小谷眞男（編著）『イタリア国民国家の形成』日本経済評論社、2010。
- クラウル、マルグレット『ドイツ・ギムナジウム200年史』望田幸男他（訳）ミネルヴァ書房、1986。
- 栗原成郎「スラヴ民衆英雄叙事詩研究序説」『Rusistika: 東京大学文学部露文研究室年報』第6号、1989、1-55頁。
- 言語権研究会（編）『ことばへの権利』三元社、1999。
- 小牧健夫他（編）『ゲーテ全集 第3巻』人文書院、1984。
- 佐々木洋子「トリエステにおける『共存』：十九世紀ハプスブルク帝国の辺境におけるコスモポリタニズム」『青山史学』第30号（伊藤定良教授退任記念号）、2012、43-58頁。
- 『ハプスブルク帝国の鉄道と汽船：19世紀の鉄道建設と河川・海運航行』刀水書房、2013。
- シラー、フリードリヒ・フォン『ヴィルヘルム・テル』桜井政隆、桜井国隆（訳）、岩波文庫、1957。
- 白井裕之、木村護郎「はじめに」『ことばへの権利』三元社、1999、7-21頁。
- 進藤修一「近代ドイツのエリート教育——『エリート』をめぐる教育改革の100年」橋本伸也他『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001、111-144頁。
- 高橋健二（編訳）『ゲーテ格言集』新潮文庫、2004。
- 渡辺和行「近代フランス中等教育におけるエリートの養成——リセについて」橋本伸也他『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001、69-109頁。
- 高橋秀寿、西成彦（編）『東欧の20世紀』人文書院、2006。
- 中澤達哉『近代スロヴァキア国民思想史研究 「歴史なき民」の近代国民法人説』刀水書房、2009。

- 中澤拓哉「〈モンテネグロ語〉の境界——ユーゴスラヴィア解体以降の言語イデオロギーにおける「言語」の再編（2007-2011）」『境界研究』第4号、2013、15-30頁。
- 西成彦「多言語的な『東欧』とドイツ人の文学」高橋秀寿、西成彦（編）『東欧の20世紀』人文書院、2006。
- 根本峻瑠「20世紀初頭トリエステにおける言語的多元性と国立ギムナジウム」『神戸大学史学年報』第31号、2016、1-26頁。
- 橋本伸也他『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001。
- 濱口忠大「トリエステ近現代史研究文献案内--歴史叙述に描かれた国境都市の肖像」『人文論究』第59巻1号、2009、191-208頁。
- 藤井泰「近代イギリスの教育システム——パブリック・スクールからオックスブリッジへの学歴経路」橋本伸也他『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001、23-67頁。
- 藤澤房俊『「クオーレ」の時代 近代イタリアの子供と国家』ちくま学芸文庫、1998。
- 松倉治代「刑事手続における Nemo tenetur 原則（4・完）—ドイツにおける展開を中心として」立命館大学法学会『立命館法学』、4、2011、1968 – 2058頁。
- 三浦信孝、糟谷啓介（編）『言語帝国主義とは何か』藤原書店、2000。
- モーパッサン、ギ・ド『モーパッサン短篇選』高山鉄男（編訳）、岩波文庫、2002
- 望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史』ミネルヴァ書房、1998。
- 安田敏朗『統合原理としての国語』三元社、2006。
- 『「多言語社会」という幻想』三元社、2011。
- 柳瀬陽介「複言語主義（plurilingualism）批評の試み」『中国地区英語教育学会研究紀要』第37号、2007、61-70頁。
- 若尾祐司、井上茂子（編著）『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房、2005。

### (欧語文献)

- Apih, Elio. *Storia delle città italiane-Trieste*. Bari: Laterza, 1988.
- Ara, Angelo; Kolb, Eberhard (Hg.). *Grenzregionen im Zeitalter der Nationalismen. Elsaß-Lothringen / Trient-Triest, 1870-1914*. Berlin: Duncker & Humblot, 1998.
- Ara, Angelo; Maglis, Claudio. *Trieste : un'identità di frontiera*. Torino: Einaudi, 1982.
- Bergdolt, Klaus. *Deutsche in Venedig: Von den Kaisern des Mittelalters bis Thomas Mann*. Darmstadt: Primus Verlag, 2011.

- Blasina, Paolo. Die Kirche und die nationale Frage in den adriatischen Gebieten 1870-1914, in: Ara, Angelo; Kolb, Eberhard (Hg.), *Grenzregionen im Zeitalter der Nationalismen. Elsaß-Lothringen / Trient-Triest, 1870-1914*. Berlin: Duncker & Humblot, 1998.
- Brix, Emil. *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation: die Sprachenstatistik in den zisleithanischen Volkszählungen, 1880 bis 1910*. Wien: Böhlau, 1982.
- Burger, Hannelore. *Sprachenrecht und Sprachgerechtigkeit im Österreichischen Unterrichtswesen 1867-1918*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1995.
- Catalan, Tullia. Presenza economica e sociale degli ebrei nella Trieste asburgica tra Settecento e primo Novecento, in: Finzi, Roberto; Giovanni, Panjek. *Storia economica e sociale di Trieste*. Vol. I. Trieste: Lint editoriale, 2001, pp. 483-517.
- Cattaruzza, Marina. Nationalitätenkonflikte in Triest im Rahmen der Nationalitätenfrage in der Habsburger Monarchie 1830-1918, in Melville, Ralph et al. (Hg.), *Deutschland und Europa in der Neuzeit. Festschrift für Karl Otmar Freiherr von Aretin zum 65. Geburtstag*. Bd. 2, Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden, S. 709-726.
- Trieste nell'Ottocento. Le trasformazioni di una società civile*. Udine: Del Bianco, 1995.
- L'Italia e il confine orientale, 1866–2006*. Bologna: Il Mulino, 2007.
- Caporrella, Vittorio. Strategie educative dei ceti medi italiani a Triestetra la fine del XIX sec. e il 1914. unv. Diss. Freie Universität Berlin, 2009.
- Cervani, Giulio. *La borghesia triestina nell'età di Risorgimento. Figure e problemi*. Udine: Del Bianco, 1969.
- Chabod, Federico. *Storia della politica estera italiana: dal 1870 al 1896*. Bari, Editori Laterza, 1965.
- Čok, Štefan. Slovensko-italijanski in hrvaško-italijanski odnosi preko poročanja tržaških časopisov 1866-1882, in: *Acta Histriae*, letnik 20, številka 1/2, 2012, pp. 189-212.

- Comitato triestino per le celebrazioni delcentenario (eds). *La Venezia Giulia e la Dalmazia nella rivoluzione nazionale del 1848–1849*. Udine: Del Bianco, 1949.
- Cornova, Ignanz. *Die Jesuiten als Gymnasiallehrer, in freundschaftlichen Briefen an den k. k. Kämmerer und Vizepräsidenten in Gallizien Grafen von Lezansky*. Prag: Calve, 1804.
- Cusin, Fabio. *Appunti alla storia di Trieste*. Trieste: Presso libreria Licinio Cappelli, 1930.
- Czeitschner, Susanne. Diglossia, hegemony and polyglossia in the judicial system of Trieste in the 19th century, in: Rindler Schjerve, Rosita, *Diglossia and Power: Language Policies and Practice in the 19th Century Habsburg Empire*. Berlin: Walter De Gruyter Inco., 2003, pp. 69-106.
- Denis, Johann Michael. *Jugendgeschichte, von ihm selbst beschrieben. Aus dem Lateinischen übersetzt*. Winterthur: Steiner, 1802;
- Deželjin, Vesna. Reflexes of the Habsburg empire multilingualism in some Triestine literary texts, in: *Jezikoslovlje*, 13, 2, Studeni 2012.
- Dorsi, Pierpaolo. La collettività di lingua tedesca, in: *Storia economica e sociale di Trieste*. vol. I, a cura di Roberto Finzi e Giovanni Panjek, Trieste: Lint editoriale, 2001, pag. 547-571.
- Engelbrecht, Helmut. *Geschichte des österreichischen Bildungswesens. Von den Anfängen bis zur Gegenwart*. 6 Bände, Wien: Österreichischer Bundesverlag, 1982-1995.
- Finzi, Roberto; Panjek, Giovanni (eds). *Storia economica e sociale di Trieste*, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918. Trieste: Lint, 2001.
- Frühbauer, Attilio. *Cenni sommari sul censimento della popolazione a Trieste al 31 dicembre 1900. Studio di demografia statica*. Trieste: Municipio di Trieste, 1903.
- Ghisalberti, Carlo. *Adriatico e confine orientale dal Risorgimento alla Repubblica*. Napoli: Edizioni Scientifiche Italiane, 2008.
- Good, David F. *The Economic Rise of the Habsburg Empire, 1750-1914*. Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press, 1984.

- Gerald Grimm, Wege und Wendepunkte der Erforschung der Geschichte des österreichischen Gymnasiums. Ein Beitrag zur Geschichte und Methodologie der Pädagogischen Historiographie in Österreich, in: Lechner, Elmar; Rumppler, Helmut; Herbert Zdarzil (Hg.) *Zur Geschichte des österreichischen Bildungswesens. Probleme und Perspektiven der Forschung*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1992, S. 79-116.
- Hametz, Maura. *Making Trieste Italian, 1918–1954*. Woodridge: Boydell Press, 2005.
- Herrity, Peter. *Slovene: A comprehensive grammar*. London; New York: Routledge, 2000.
- Hoke, Rudol; Reiter, Ilse. *Quellensammlung zur österreichischen und deutschen Rechtsgeschichte. Vornehmlich für den Studiengebrauch*. Wien: Böhlau, 1998.
- Jernej, Mirna et al. Multilingualism in Northwestern part of Croatia during Habsburg rule, in: *Jezikoslovlje*, 13, 2, Studeni 2012, pp. 327-350.
- Judson, Pieter. *The Habsburg Empire*. Cambridge: Belknap, 2016.
- Kachin-Wohinz, Milica; Conetti, Giorgio. *Slovensko-italijanski od-v nosi 1880–1956 : poročilo slovensko-italijanske zgodovinsko-kulturne komisije*. Ljubljana: Nova revija, 2001.
- Kann, Robert A. *A History of the Habsburg Empire 1526-1918*. Berkeley: University of California Press, 1974.
- Kocutar, Stanislav. Habsburška monarhija in jugoslovansko vprašanje v luči slovenske historiografije, in: *PILAR - Časopis za društvene i humanističke studije*, Vol.IV, No.7-8(1-2) Prosinac, 2009, pp. 11-35.
- Kohn, Hans. *The Habsburg Empire*. New York: Van Nostrand Reinhold, 1961.
- Kolb, Eberhard; Ara, Angelo. *Regioni di frontiera nell'epoca dei nazionalismi: Alsazia e Lorena, Trento e Trieste 1870–1914*. Bologna: Il Mulino, 1995.
- Mazohl-Wallnig, Brigitte; Meriggi, Merco (eds.) . *Österreichisches Italien – italienisches Österreich?* Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1999.

- Metzeltin, Michele. Le varietà italiane sulle coste dell'Adriatico orientale. In: *Balcani occidentali Adriatico e Venezia fra XIII e XVIII secolo*. Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2009, pp. 199-238.
- Minca, Claudio. 'Trieste Nazione' and its geographies of absence, in: *Social & Cultural Geography*, 10 (3), 2009, pp. 257-277.
- Millo, Anna. *L'élite del potere a Trieste. Una biografia collettiva 1891-1938*. Milano, Franco Angeli Storia, 1989.
- , *Trieste, le assicurazioni, l'Europa : Arnoldo Frigessi di Rattalma e la Ras*. Milano: Franco Angeli Storia, 2004
- Negrelli, Giorgio. *Al di qua del mito : diritto storico e difesa nazionale nell'autonomismo della Trieste asburgica*. Udine: Del Bianco, 1978.
- Novak, Kristian. What can language biographies reveal about multilingualism in the Habsburg monarchy? A case study on the members of the Illyrian movement, in: *Jezikoslovlje*, 13, 2, Studeni 2012.
- Ortalli, Gherardo; Schmitt, Oliver Jens (eds). *Balcani occidentali Adriatico e Venezia fra XIII e XVIII secolo*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2009.
- Pellegrini, Rienzo. Per un profilo linguistico, in: *Storia economica e sociale di Trieste*, vol. I, a cura di Finzi, Roberto; Panjek, Giovanni. Trieste: Lint editoriale, 2001, pag. 293-316.
- Phillipson, Robert. *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press, 1992.
- Pizzi, Katta. Triestine Literature between Slovenia and Italy: A Case of Missed Transculturalism? in: *Primerjalna Knjizevnost*, 36, 1, 2013, pp. 145-155.
- Pirjevec, Jože. *"Trst je naš!" Boj Slovencev za morje (1848-1954)*. Ljubljana: Nova revija, 2007.
- Purini, Piero. *Metamorfosi etniche. I cambiamenti di popolazione a Trieste, Gorizia, Fiume e in Istria. 1914-1975*. Udine: Kappa Vu, 2013.
- Randeraard, Nico. *States and statistics in the nineteenth century: Europe by numbers*. Manchester and New York: Manchester University Press, 2010.

- Reill, D. Kirchner. *Nationalists Who Feared the Nation: Adriatic Multi-Nationalism in Habsburg Dalmatia, Trieste, and Venice*. Stanford: Stanford University Press, 2012.
- Riosa, Alceo. *Adriatico irredento. Italiani e slavi sotto la lente francese (1793–1918)*. Napoli: Guida Editoli, 2009.
- A cura della Riunione Adriatica di Sicurtà. *Nel primo Centenario della Riunione Adriatica di Sicurtà (1838-1938). Volume commemorativo pubblicato in occasione dell'approvazione del 100° bilancio sociale*. Trieste: Novara, 1939
- Roksandić, Drago. *Srpska i hrvatska povijest i 'nova historija'*. Zagreb: Stvarnost, 1991.
- Romano, Sergio. 'Der Irredentismus in der italienischen Außenpolitik', in: Ara, Angelo, Kolb, Eberhard eds., *Grenzregionen im Zeitalter der Nationalismen. Elsaß-Lothringen / Trient-Triest, 1870-1914*. Berlin: Duncker & Humblot, 1998.
- Rumpler, Helmut; Seger, Martin (Hg.), *Die Habsburgermonarchie 1848-1918, Band IX/2, soziale Strukturen, Kartenband*. Wien: 2010.
- Scarciglia, Roberto. *Trieste multiculturale. Comunità e linguaggi di integrazione*. Bologna: Il Mulino, 2011.
- Schiffrer, Carlo. *Le origini dell'irredentismo triestino (1813–1860)*. Udine: Istituto delle scienze accademiche, 1937.
- Slataper, Scipio. *Scritti politici*. Roma: Alberto Stock, 1925.
- Spainì, Alberto. *Autoritratto triestino*. Milano: Giordano, 1963.
- Storia economica e sociale di Trieste*, vol. I, a cura di Finzi, Roberto; Panjek, Giovanni. Trieste: Lint editoriale, 2001.
- Stourzh, Gerald. *Die Gleichberechtigung der Nationalitäten in der Verfassung und Verwaltung Österreichs 1848-1918*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften 1985.
- Sutter, Berthold. *Die Badenische Sprachenverordnungen von 1897*, I. Graz: Böhlau-Verlag, 1960, S. 107-127.
- Tamaro, Attilio. *L'Adriatico Golfo D'Italia. L'Italianita Di Trieste*. Book on Demand Ltd., 2015.

-----*Storia di Trieste*. Roma: Alberto Stock, 1924.

Taylor, A. J. P. *The Habsburg Monarchy, 1809-1918. A History of the Austrian Empire and Austria-Hungary*. London: Macmillan & Co., 1941.

Timeus, Ruggero. *Trieste*. Roma: G. Garzoni Provenzani, 1914.

Valdevit, Gianpaolo. *Trieste. Storia di una periferia insicura*. Milan: Mondadori, 2004.

Vivante, Angelo. *Irredentismo adriatico. Contributo alla discussione sui rapporti italo-austriaci*. Firenze: Libreria della voce, 1912.

Vranješ Šoljan, Božena. Prvi opći popis stanovništva u Habsburškoj Monarhiji iz 1857.: Konceptija, metodologija i klasifikacija popisnih obilježja, in *Časopis za suvremenu povijest*, 40, 2, Listopad, 2008, pp. 15-39.

Winkler, Eduard. *Wahlrechtsreformen und Wahlen in Triest 1905-1909 : eine Analyse der politischen Partizipation in einer multinationalen Stadtregion der Habsburgermonarchie*. München : R. Oldenbourg, 2000.

Žontar, Jože et al. *Handbücher und Karten zur Verwaltungsstruktur in den Ländern Kärnten, Krain, Küstenland und Steiermark bis zum Jahre 1918 - Ein historisch-bibliographischer Führer*. Graz: Eigenverlag, 1988.